

県営越城野地区ふるさと農道緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡岸本町

SAKACHŌMIYATANOKAMI

坂長宮田ノ上遺跡

SAKANAKADAIGO

坂中第5遺跡

SAKACHŌHOTOKEDANI

坂長佛谷遺跡

KOMACHIKOSHIKINOHARADAIICHI

小町越城野原第1遺跡

KOMACHIKOSHIKINOHARADAINI

小町越城野原第2遺跡

1997

財団法人

鳥取県教育文化財団

- ①水田の耕作土
- ②客土
- ③暗灰褐色粘質土
- ④茶灰褐色粘質土 (黄灰褐色粘質土・黒灰褐色粘質土小ブロック微量混)
- ⑤茶灰褐色粘質土 (黄灰褐色粘質土多量混、黒灰褐色粘質土小ブロック微量混)
- ⑥暗灰褐色土 (橙褐色土細粒多量混)
- ⑦灰褐色粘質土
- ⑧暗灰褐色粘質土 (橙褐色土細粒多量混、暗黄灰褐色粘質土混)
- ⑨暗茶褐色粘質土 (暗黄灰褐色粘質土少量混)
- ⑩暗茶褐色粘質土と暗黄灰褐色粘質土の混合
- ⑪暗茶灰褐色粘質土 (炭化物粒多量混)
- ⑫暗灰褐色粘質土 (粘性強)
- ⑬灰褐色粘質土 (黄灰褐色粘質土少量混)
- ⑭茶灰褐色粘質土と黄灰褐色粘質土の混合
- ⑮淡茶灰褐色粘質土
- ⑯橙褐色粘質土 (淡茶灰褐色粘質土多量混)
- ⑰橙褐色粘質土 (淡茶灰褐色粘質土微量混)
- ⑱暗灰褐色土
- ⑲茶灰褐色土
- ⑳茶灰褐色土 (暗黄褐色土混)
- ㉑茶灰褐色土と暗黄褐色粘質土の混合
- ㉒暗茶灰褐色土
- ㉓暗灰褐色粘質土
- ㉔暗灰褐色粘質土と暗黄褐色粘質土の混合
- ㉕灰褐色粘質土 (橙褐色土微量混)
- ㉖淡灰褐色粘質土
- ㉗黒灰褐色粘質土
- ㉘灰褐色粘質土 (暗橙褐色土ブロック微量混)
- ㉙暗黄褐色粘質土 (灰褐色粘質土少量混)
- ㉚黒褐色土
- ㉛暗黄褐色粘質土 (暗茶灰褐色粘質土混)
- ㉜淡茶灰褐色土 (暗黄褐色土多量混)
- ㉝暗灰茶褐色土
- ㉞暗灰茶褐色粘質土 (黄褐色土粒少量混)
- ㉟灰褐色土 (やや粘質、黄褐色土ブロック少量混)
- ㊱黒茶褐色土
- ㊲橙褐色粘質土
- ㊳暗灰茶色土 (黄褐色土粒少量混)
- ㊴灰黄色土
- ㊵灰茶色土 (黄褐色土粒少量混)
- ㊶暗灰茶色粘質土 (黄褐色土粒少量混)
- ㊷灰黄色土 (黄褐色土ブロック混)

挿図102 SK-4 遺構図 土色

- ① 黒灰褐色土
- ② 暗茶灰褐色土
- ③ 暗茶灰褐色土
- ④ 黒灰褐色土
- ⑤ 暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土ブロックの混合
- ⑥ 黒灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土ブロックの混合
- ⑦ 黒灰褐色土 (粘性強)
- ⑧ 黒灰褐色土 (黄橙茶灰褐色粘質土ブロック微量混)

序

鳥取県西部に位置する岸本町は、東に秀峰大山を仰ぎ、北に日本海を望む美しい自然環境に恵まれた地域であります。さらに、古くから遺跡の宝庫としても知られており、割石小口積み・持ち送り式の構築法を用いた横穴式石室を持つ吉定1号墳、国指定重要文化財の石製鴟尾が出土した大寺廃寺など、古代人の生活や当時の活発な交流を物語る貴重な遺構・遺物が数多く存在しております。

当財団では、県営越敷野地区ふるさと農道緊急整備事業に伴い、平成7年度に鳥取県の委託を受け西部埋蔵文化財越敷野地区ふるさと農道調査事務所が平成7年度から2か年にわたり、町内の坂長宮田ノ上遺跡・坂中第5遺跡・坂長佛谷遺跡・小町越城野原第1遺跡・小町越城野原第2遺跡の発掘調査を実施し、記録保存に努めてまいりました。調査の結果、縄文時代から古墳時代にかけて断続的に遺跡が形成されていたことが確認され、当該地区の歴史の長さをあらためて認識することとなりました。これらの資料が今後の調査研究の一助となり、本報告書が多方面にわたって広く活用して頂ければ幸いです。

最後になりましたが、本調査に際しまして、多大な御理解と御協力をいただきました地元の皆様をはじめ、御指導いただきました方々、その他の関係各位に対し、心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 田 淵 康 允

例 言

1. 本報告書は、平成7年度県営越数野地区ふるさと農道開設工事に伴う埋蔵文化財発掘業務及び平成8年度県営越数野地区ふるさと農道緊急整備事業に伴い実施された、岸本町坂長及び小町地内に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 発掘調査を実施した各遺跡の名称と所在地は以下のとおりである。

坂長宮田ノ上遺跡	岸本町坂長字宮田ノ上353-1
坂中第5遺跡	〃 坂長字宮田ノ峯192-2
坂長佛谷遺跡	〃 坂長字佛谷1817
小町越城野原第1遺跡	〃 小町字越城野原ノ五575-25
小町越城野原第2遺跡	〃 小町字越城野原ノ五575-1

3. 本報告書で示す標高は海拔標高、方位は真北である。

X、Y：の数値は国土地標第V系を使用した。

4. 本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」の一部を使用し、調査区位置図は岸本町発行の5千分の1地形図「岸本町全区」No.1、2、4、5の一部を使用した。
5. 本報告書の作成は、調査員、調査補助員の討議に基づいて執筆・編集し、執筆担当者は目次に記載した。担当調査員は谷村・山田・山川・鬼頭、調査補助員は樋口である。本報告書に掲載した実測図・写真図版は西部埋蔵文化財越数野地区ふるさと農道調査事務所で作成した。遺構・遺物写真の撮影は調査員が行った。
6. 発掘調査に伴い作成された記録図面・写真は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は岸本町教育委員会に保管されている。
7. 今回の調査では、従来確認されてなかった古墳1基が検出された。「^{びらろづか}伯菜塚16号墳」の名称を与えて報告する。
8. 本発掘調査の実施にあたっては、土器の胎土分析を奈良教育大学の三辻利一教授に、また、坂中第5遺跡の竪穴住居跡出土炭化木の¹⁴C年代測定を京都産業大学の山田治教授に依頼したところ、玉稿を頂いた。石製品の石材鑑定は鳥取大学赤木三郎教授にお願いし、指導・助言を頂いた。記して、各先生方に深く謝意を表す。
9. 坂中第5遺跡・小町越城野原第1遺跡のリン分析および植物珪酸体分析、小町越城野原第2遺跡の土坑内出土炭化物の¹⁴C年代測定および遺跡標準層序の確立を(株)パリーノ・サーヴェイに委託した。
10. 現地調査および報告書作成にあたって下記の方々から助言・指導・協力を頂いた。

井上貴央 三辻利一 山田治 赤木三郎 井上武士 辻本裕也 下高瑞哉 杉谷愛象
高橋美久二 赤見高好 会見町教育委員会 岸本町教育委員会 樗造園 内藤造園

(順不同 敬称略)

凡 例

1. 調査区には、10×10mグリッドを設定した。任意の基準点より南北・東西のラインで10mごとの割り付けを行い、南北ラインをアルファベット、東西ラインをアラビア数字で表し、該当グリッドの北西隅交点をそのグリッド名とした。
2. 本報告書における遺構・遺物の略号は、下記のとおりである。
SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構 SK：土坑・落とし穴
SS：テラス状遺構 SX：埋葬施設・埋葬関連遺構 P：柱穴
Po：土器・土製品 S：石器 F：鉄製品
3. 遺構挿入図におけるセクション、エレベーションの基準線標高は「H=」の記号で表記する。
4. 遺構挿入図における一点破線は調査区の境界線を示す。
5. 落とし穴の遺構図においては、杭痕跡の輪郭線を赤色で表記する。
6. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外のものは断面白抜きで表した。また、丹塗りの土器については網かけで表した。
7. 遺物番号は、各遺跡ごとの通し番号である。

目 次

序
例言
凡例
目次

第1章 調査の経緯 (鬼頭)	
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	2
第2章 位置と環境 (山田・山川)	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第3章 坂長宮田ノ上遺跡の調査 (谷村)	
第1節 位置と環境	10
第2節 調査の経過と方法	10
第3節 遺構と遺物	10
1 概要	10
2 縄文時代の遺構	15
3 古墳時代の遺構	27
4 時期不明の遺構	30
5 遺構外遺物	32
第4章 坂中第5遺跡の調査 (谷村・山川)	
第1節 位置と環境	39
第2節 調査の経過と方法	39
第3節 遺構と遺物	41
1 概要	41
2 縄文時代の遺構	42
3 古墳時代前期の遺構	52
4 古墳	84
5 古墳時代の遺構	85
6 時期不明の遺構	92
第5章 坂長佛谷遺跡の調査 (山川)	
第1節 位置と環境	96
第2節 調査の経過と方法	96
第3節 遺構と遺物	96
1 概要	96
2 ビット群1	106
3 ビット群2	112
4 遺構に伴わない遺物	116

第6章 小町越城野原第1遺跡の調査(鬼頭)	
第1節 位置と環境	121
第2節 調査の経過と方法	121
第3節 遺構と遺物	121
1 概要	121
2 縄文時代の遺構	122
3 弥生時代の遺構	126
4 遺構外遺物	134
第7章 小町越城野原第2遺跡の調査(鬼頭)	
第1節 位置と環境	136
第2節 調査の経過と方法	136
第3節 遺構と遺物	136
1 概要	136
2 縄文時代の遺構	141
3 弥生時代の遺構	159
4 時期不明の遺構	161
第8章 考察	
第1節 坂中第5遺跡の液体シンチレーション ¹⁴ C年代測定結果	京都産業大学 山田 治 ……162
第2節 出土土器の蛍光X線分析	奈良教育大学 三辻 利一 ……163
1 坂長宮田ノ上遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	……163
2 坂中第5遺跡、坂長佛谷遺跡、小町越城野原第2遺跡出土土器の蛍光X線分析	……163
第3節 坂中第5遺跡・小町越城野原第1遺跡の土壌科学分析	バリノ・サーヴェイ株式会社 ……166
第4節 小町越城野原第2遺跡の自然科学分析調査	バリノ・サーヴェイ株式会社 ……174
第5節 落とし穴について(鬼頭)	……182

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県西伯郡岸本町地域における平成7年度県営越敷野地区ふるさと農道開設工事及び平成8年度県営越敷野地区ふるさと農道緊急整備事業に伴い、道路建設地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。

この県営越敷野地区ふるさと農道のルートにあたる西伯郡岸本町坂長から小町にかけては、周知の遺跡として坂長宮田ノ上遺跡・坂中第5遺跡・坂長佛谷遺跡・小町越城野原第2遺跡・小町越城野原第1遺跡の存在が確認されており、記録保存のための発掘調査の必要が生じた。平成6年度に岸本町教育委員会が実施した試掘調査の結果をもとに調査範囲が決定され、鳥取県農林水産部及び米子地方農林振興局と鳥取県教育委員会との協議の結果、財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査を委託した。これにより、平成7・8年度に、西部埋蔵文化財越敷野地区ふるさと農道調査事務所が調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過と方法

発掘調査は、平成7年度から平成8年度の2か年度にわたった。

平成7年度は、坂長宮田ノ上遺跡、坂中第5遺跡の北側部分（A区）、小町越城野原第1遺跡を調査した。

坂長地区と小町地区は遺跡間の距離が隔たっているため、二手に発掘調査員・発掘作業員が別れ、同時並行して調査を実施した。坂長地区では、坂長宮田ノ上遺跡の調査終了後、坂中第5遺跡の調査に移行した。4月より調査に着手し、12月に現場作業を終了、平成8年3月まで調査成果のまとめを行った。

平成8年度は、坂長佛谷遺跡、坂中第5遺跡の南側部分（B区）、小町越城野原第2遺跡を調査した。

前年度同様、坂長地区と小町地区の二手に別れ、同時並行で調査を実施した。坂長地区においては、坂長佛谷遺跡の調査終了後、坂中第5遺跡の調査に移行した。それぞれ4月より調査に着手し、11月に現場作業を終了、平成9年3月まで発掘調査報告書の作成を行った。

なお、各遺跡の最終的な調査面積は下記のとおりである。

坂長宮田ノ上遺跡	1,931.9㎡
坂中第5遺跡（A区）	3,776.0㎡
（B区）	1,992.4㎡
坂長佛谷遺跡	3,709.0㎡
小町越城野原第1遺跡	1,555.0㎡
小町越城野原第2遺跡	3,800.0㎡

各遺跡ごとの経過・方法については、各章でそれぞれ詳述する。

第3節 調査体制

平成7年度調査体制

○調査主体	財団法人鳥取県教育文化財団	
理事長	田 淵 康 允 (鳥取県教育委員会教育長)	
常務理事	上 田 徹 (鳥取県教育委員会教育次長)	
事務局長	若 松 良 雄	
	財団法人鳥取県教育文化財団	鳥取県埋蔵文化財センター
所 長	宮 谷 正 信 (鳥取県教育委員会文化課長)	
次 長	八木谷 昇	
庶務係		
係 長	梅 山 昭 美 (鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長)	
主任事務職員	米 村 康 夫	
事務職員	田 中 陽 子	
調査指導係		
係 長	田 中 弘 道 (鳥取県埋蔵文化財センター次長)	
文化財主事	久 保 穰二朗 (〃 文化財主事)	
〃	長 岡 充 展 (〃 〃)	
〃	山 折 雅 美 (〃 〃)	

○調査担当	財団法人鳥取県教育文化財団	西部埋蔵文化財越前野地区ふるさと農道調査事務所
所 長	船 森 康 弘	
主任調査員	山 田 真 一	
調 査 員	谷 村 憲 一	
〃	鬼 頭 紀 子	
調査補助員	樋 口 友 枝	
整 理 員	長 江 方 子	

○整理作業参加者

黒見 まゆみ 塩谷 和子 西村 薫子 松越 綾子 三原千里 大家幹江

○調査指導 鳥取県教育委員会文化課 鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力 鳥取県西伯郡岸本町 岸本町教育委員会

平成8年度調査体制

○調査主体	財団法人鳥取県教育文化財団	
理事長	田 淵 康 允 (鳥取県教育委員会教育長)	
常務理事	森 田 哲 彦 (鳥取県教育委員会教育次長)	
事務局長	岩 本 武 夫	

財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター

所長	宮谷 正 信 (鳥取県教育委員会文化課長)
次 長	八木谷 昇
調整係長	久 保 穰二郎 (鳥取県埋蔵文化財センター調査指導係長)
調整調査員	亀 井 照 人
〃	小 谷 修 一
庶務係主任事務職員	矢 部 美 恵
主任事務職員	米 村 康 夫

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財越後野地区ふるさと農道調査事務所

所長	船 森 康 弘
主任調査員	谷 村 憲 一
調 査 員	山 川 茂 樹
〃	鬼 頭 紀 子
整 理 員	長 江 方 子

○整理作業参加者

黒見 まゆみ 塩谷 和子 西村 薫子 船越 綾子 松本 敬子 厨子 彰子

○調査指導 鳥取県教育委員会文化課 鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力 鳥取県西伯郡岸本町 岸本町教育委員会

○下記の方々に発掘調査作業員として協力していただいた。記して謝意を表したい。

石門安定	荒井玉江	石橋公子	桑本貴子	小村泰子	大塚幹江	竹下洋枝	遠藤和子
篠村益美	安達朋子	江崎淳子	和田隆義	石倉信夫	石倉信子	藤平松子	鳥橋和夫
三原千里	小村茂子	遠藤寛一	大橋暢晏	小澤三郎	下本愛子	陶山静恵	田口雅通
谷村末吉	露無克子	仲田茂子	花房幸子	前田貞良	森安令公	安田貞則	池口幸子
舟木早苗	大暉光江	塚田哲子	渡部弘隆	影山八江	山田美江	船橋智章	西村正弘
小谷時雄	山中敏朗	安藤伸一	三宅武	仲田茂	佐伯進	陶山弼	長原境
潮藤子	石黒薫	安立章	浮田保	長尾茂	山下操	杉原功	遠藤伝
元次美恵子	秋田三代子	高塚早智子	岩本美保子	中西八千枝	安野すみえ	品川ともゑ	宮井未太郎
高橋ふじゑ	福永美佐恵	竹谷さゆり	河藤すみ江	川村美保子	(順不同 敬称略)		

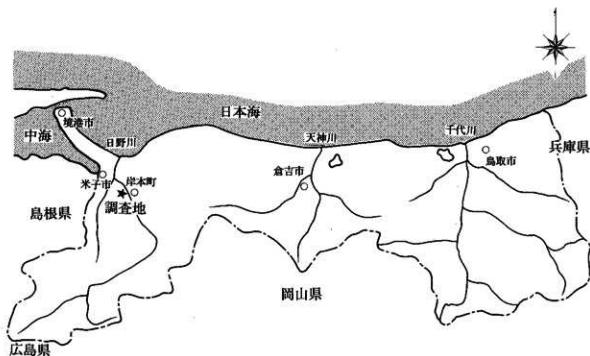
第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

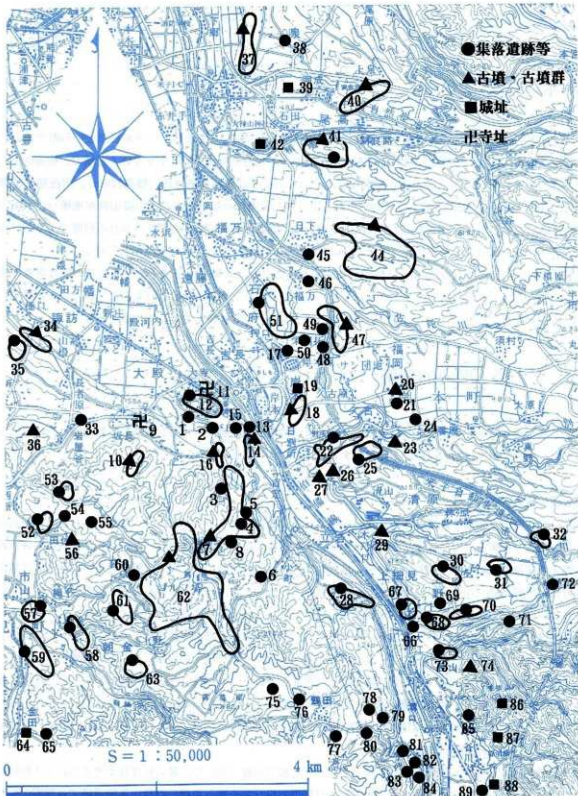
鳥取県

鳥取県は山陰地方の東部に位置する。北は日本海に面し、東は兵庫県、西は島根県、南は岡山・広島との両県と接している。総面積は3,506.96km²であるが、その内約80%を山地が占め、標高1,711mの大山を最高峰とした中国山地が連なっている。この中国山地から日本海に向けて千代川、天神川、日野川の一級河川が流れ、それぞれの下流に鳥取平野、倉吉・羽合・北条平野、米子平野が形成されている。各平野には鳥取市、倉吉市、米子市があり、東部・中部・西部の各地区の政治経済の中心となっている。また、米子市北部の弓ヶ浜半島には全国でも有数の漁港をもつ境港市がある。鳥取県はこの4市を中心に39の市町村で構成され、人口615,602人（平成9年1月1日現在）である。

生業は古くから農業が盛んであり、稲作をはじめ二十世紀梨や砂丘地での長いも・らっきょう栽培など、地形・地質を生かした特産品も多し。また、県東部に鳥取砂丘、西部に大山と国立公園にも指定されている風光明媚な自然を有し、毎年多くの観光客が訪れている。平成4年の米子自動車道全線開通に伴って県を訪れる人の数も増加傾向にある。現在県ではその豊富な自然環境をもとに、全県公園化構想を推進・着手している。



挿図1 遺跡位置図



- | | | | | |
|---------------|----------------|-------------------|--------------|--------------|
| 1. 板長宮田ノ上遺跡 | 19. 岸本要害 | 37. 尾高古墳群・尾高御馳山遺跡 | 55. 田住第5遺跡 | 73. 長山馬籠遺跡 |
| 2. 坂中第5遺跡 | 20. 真厚原古墳群 | 38. 桑中峠・泉前田遺跡 | 56. 田住古墳群 | 74. 長山古墳群 |
| 3. 坂長峰谷遺跡 | 21. 久古北山遺跡 | 39. 岡成城跡 | 57. 口崎金藏跡 | 75. 野島塚遺跡 |
| 4. 小町越城野原第1遺跡 | 22. 久古第3遺跡 | 40. 岡成古墳群 | 58. 朝金遺跡 | 76. 鶴田第2遺跡 |
| 5. 小町越城野原第2遺跡 | 23. 久古古墳群 | 41. 石田古墳群 | 59. 天王原遺跡 | 77. 鶴田東神ノ原遺跡 |
| 6. 小町第1遺跡 | 24. 番原第1遺跡 | 42. 尾高城跡 | 60. 萩名第1遺跡 | 78. 鶴田東山遺跡 |
| 7. 越敷山古墳群 | 25. 貝田古墳群 | 43. 尾高浅山遺跡 | 61. 萩名第2遺跡 | 79. 鶴田合清水遺跡 |
| 8. 小町石橋ノ上遺跡 | 26. 口別所古墳群 | 44. 日下古墳群 | 62. 越敷山遺跡群 | 80. 鶴田湯ヶ谷遺跡 |
| 9. 坂中地寺 | 27. 吉定古墳群 | 45. 日下遺跡 | 63. 上野遺跡 | 81. 宇代寺中遺跡 |
| 10. 坂長古墳群 | 28. 小野所古墳群 | 46. 上瀬方遺跡 | 64. 小松城跡 | 82. 宇代横平遺跡 |
| 11. 大寺高寺 | 29. 大平古墳群 | 47. 石州府古墳群 | 65. 金田瓦窯跡 | 83. 宇代1号墳 |
| 12. 越敷ヶ丘遺跡 | 30. 大平原第1遺跡 | 48. 石州府第1遺跡 | 66. 上野貝塚遺跡 | 84. 代遺跡 |
| 13. 越敷野原遺跡 | 31. 大平原第2遺跡 | 49. 石州府第2遺跡 | 67. 溝口上野第1遺跡 | 85. 長山第2遺跡 |
| 14. 越敷野原古墳群 | 32. 林ヶ原遺跡 | 50. 石州府第3遺跡 | 68. 溝口上野第2遺跡 | 86. 鬼住山城 |
| 15. 大寺原遺跡 | 33. 長者原遺跡 | 51. 石州府第4遺跡 | 69. 溝口上野第3遺跡 | 87. 久米野香 |
| 16. 伯耆原古墳群 | 34. 樋ノ口・諏訪古墳群 | 52. 田住第2遺跡 | 70. 竹原遺跡 | 88. 谷川城 |
| 17. 岸本遺跡 | 35. 樋ノ口第2~第4遺跡 | 53. 田住第3遺跡 | 71. 河平遺跡 | 89. 谷川遺跡 |
| 18. 岸本古墳群 | 36. 別所1号墳 | 54. 田住第4遺跡 | 72. 下山町遺跡 | |

挿図2 周辺遺跡分布図1

岸本町

西郡岸本町は大山西麓に位置する総面積39.41km²・総人口7,436人（平成9年1月末日現在）の町である。町域の西寄りには、日野川が南北に流れている。右岸は大山の裾野から緩やかに下っていく台地で、標高60mの辺りで日野川の浸食を受け段丘崖となって落ち込んでいる。左岸は南端に高塚山（標高270m）、南西端に越敷山（標高227m）があり、起伏のある丘陵地形であるが、その北端部分には大山の火山噴出物が堆積し、右岸とよく似た台地状の地形となっている。平野は町の南半分は日野川の右岸に狭い沖積がみられる程度であるが、ほぼ中央の辺りから急に開け、米子平野（地元の人は箕蚊原平野と呼ぶ）となって下流へと広がっていく。

交通は日野川沿いに国道181号線・JR備前線が走っており、北に隣接する米子市との交通の便は非常に良好である。従って、近年米子市のベッドタウンとして発達しており、団地の造成も行なわれている。この結果、平成7年の国勢調査の結果では、人口減少の多い県内の市町村の中で、最高の人口増加率を示している。

第2節 歴史的環境

本節では、岸本町を中心にその周辺地域も含めた歴史的環境を概観する。なお遺構の名称の跡に（ ）で示した数字は、挿図2の周辺遺跡分布図1に対応する。

先土器～縄文時代

現在、岸本町内で確認されている考古資料の中で、最も時期の遡るものは、大山の裾野にあたる日野川右岸丘陵の久古地区で採集されたサヌカイト製の有舌尖頭器である。この形態の石器は、一般に先土器時代の終わり頃から縄文時代草創期にかけて、製作・使用されたと考えられている。しかし同じ日野川右岸の台地上に位置する溝口町長山馬籠遺跡（73）をはじめとして、先土器時代のものと考えられる打製石器が大山山麓ではいくつか確認されており、将来、岸本町内でも先土器時代の石器が発見される可能性は十分に考えられる。

縄文時代の遺構としては、林ヶ原遺跡（32）で墓の可能性のある土壌が確認されている。また、この時代の狩猟用の落とし穴と考えられるものが数多く見つかっており、これらは日野川の両岸に広がる丘陵地の至る所につくられているものと思われる。日野川右岸丘陵に位置する遺跡として、先の林ヶ原遺跡の他に、久古第3遺跡（22）・貝田原遺跡（25）・北田山遺跡（21）・番原第1遺跡（24）があり、左岸丘陵に位置するものとしては、小町越城野原第1遺跡（4）・小町越城野原第2遺跡（5）・越敷山遺跡群（62）・坂長宮田ノ上遺跡（1）・坂中第5遺跡（2）・大寺原遺跡（15）が挙げられる。

周辺地域では、日野川を下った右岸丘陵上の米子市上福万遺跡（46）で、墓の可能性が考えられる大規模な早期の土壇群・集石群が確認されている。また同じ日野川右岸丘陵を通った溝口町長山馬籠遺跡では前期の竪穴住居跡が確認されている。

弥生時代

弥生時代の遺跡も、縄文時代と同じく日野川両岸の丘陵上に分布している。日野川右岸丘陵では、上述の林ヶ原遺跡・貝田原遺跡等で住居跡が確認されているが、いずれも中期のもので、現状では縄文時代との間に時間的空白が認められる。また標高350mの高原に位置する藍野遺跡では、石斧・石庖丁がみつかっており、高地でも作物の耕作が行なわれていたことを示している。日野川右岸丘陵では、越敷山北麓から北に延びる台地（長者原台地）に位置する大寺原遺跡（15）や坂中第5遺跡（2）で住居跡が確認されている。この台地の先端近くには大規模な集落遺跡として有名な米子市青木遺跡・福市遺跡が存在しており、台地上の広い範囲に集落が存在して

いたことが想定される。

周辺地域では、日野川を若干下った右岸丘陵上に環濠を伴う集落が築かれている。前期の米子市尾高御建山遺跡(37)でその可能性をもつものが認められているが、後期の米子市尾高浅山遺跡(43)・日下寺山遺跡(45)では環濠集落に近接して四隅突出型墳丘墓が築かれており、地域集団が確立されていた様子がうかがわれる。米子(箕紋屋)平野を望む日野川右岸の同地形の丘陵は町内まで連なっており、また日野川上流の溝口町内でも四隅突出型墳丘墓が確認されていることから、町内にも同種の遺構が存在している可能性も考えられる。

古墳時代

古墳時代前期から中期にかけての大型古墳は、長者原台地を挟んで西隣に位置する会見地域に集中する。三角縁神獸鏡を出土した会見町普段寺1号墳(前方後円墳)は、畿内型の古墳としては県内で最古のものと考えられる。また会見町三崎殿山古墳は全長110mの前方後円墳で、県内最大級の規模を誇る。

後期に入ると、岸本町内でも特色ある古墳が築かれる。日野川右岸丘陵の吉定1号墳(27)は、割石小口積みによる古式の横穴式石室をもつ大型の方墳(あるいは円墳)である。日野川左岸丘陵にも、越敷山山頂の前方後円墳(越敷山13号墳)をはじめとして、その山麓丘陵に数多くの古墳がつくられるようになる。特に北麓の長者原台地の日野川沿いの辺りにその分布が集中しており(越敷ヶ丘古墳群・長者原古墳群)、後期以降、この地域にこれらの古墳群を築いた集団が成立していたことがうかがわれる。一方、大型の古墳を築造していた会見地域では、この時期にはその規模が縮小していく傾向が認められる。

古代

律令体制の下で、日野川中・下流域は伯耆国会見郡として編成される。古墳時代後期に多数の古墳が築かれた長者原台地周辺には、白鳳時代に大寺鹿寺(11)・奈良時代に坂中鹿寺(9)といった寺院が創建される。また坂中鹿寺に隣接する長者屋敷遺跡(33)では大型の掘立柱建物群が確認されており、豪族の居館あるいは伯耆国会見郡の郡衙といった可能性が考えられている。このように、この地域は古代の会見郡の中心的な位置を占めていたものと思われる。

この地域に勢力を広げていた豪族として、紀氏の名が史料にあらわれており、上述の遺構との関連が注目される。紀氏は、平安末期に国司として土着した紀成盛のときに最盛期を迎え、長者原台地に大邸宅を構え勢力を誇ったといわれている。

中世

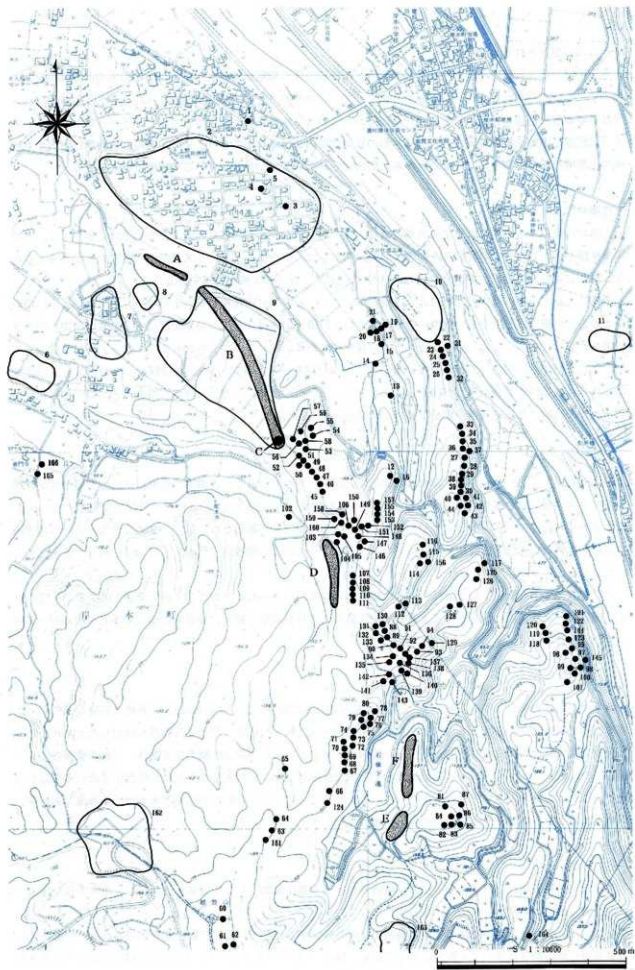
律令体制の基礎をなしていた班田制は、豪族の私有地拡大の動きとともに崩れはじめ、各地に荘園が発達する。岸本町内には、中世の荘園として日野川右岸に中間荘・久古牧・大山荘、左岸に八幡荘が所在したとされる。

鎌倉幕府倒幕から南北朝時代にかけては、殿河内の豪族、巨勢宗国が後醍醐天皇を助け、以後南朝制について活躍したと伝えられている。その後の伯耆国の領国支配権は、激しい戦乱を繰り返し、守護山名氏から戦国大名尼子氏へ、さらに戦国大名毛利氏へと移っていく。この間の山名方の行松氏の居城が米子市の尾高城であるが、岸本要害はこの尾高城の砦あるいは播州三木城の山城と考えられている。

近世

江戸時代の幕藩体制下で、因幡と伯耆は統合され、鳥取池田藩32万石として編成される。また米子城が築造され、伯耆の中心は倉吉から米子へと移るようになる。

この時代、幕藩体制の経済基盤である農民の年貢を確保するために、盛んに新田開発が行なわれた。その中でも長者原台地の開発は藩内でも有名なものである。特に日野川の水を取り入れるための全長8.8kmに及ぶ水路(佐野川)の開設は、中断期間を含めて243年の期間、数十万人の人手を要した大事業であった。



挿図3 周辺遺跡分布図2

近代

明治維新の藩置廃置及びその後の整備統廃合によって、鳥取藩は廃止され鳥取県が置かれる。1889（明治22）年には市制町村制が施行され、旧村の大規模な合併が行なわれる。この結果現在の岸本町内には、大幡村・幡郷村・日吉村・吉寿村の4つの村が設置される。また1896（明治29）年に実施された郡制により、会見郡と汗入郡は統合され西伯郡となる。郡制は1923（大正12）年に廃止されるが、以後も行政区画として残っている。

1876（明治6）年、明治政府は徴兵令を發布するが、幕末から明治初年にかけての凶作続きで困窮していた農民は、徴兵反対と米価の引き下げを要求して集団で蜂起した。騒動は5日間に及び、会見郡ほぼ全域に広がる大規模なものとなった。これは会見血税一揆と呼ばれ、現在も語り伝えられている。

現代

第2次大戦後、全国的に合理的な町村規模の検討が行なわれ、県内でも町村合併が進められる。その結果、西伯郡大幡村・幡郷村（大字諸木を除く）・日野郡八郷村（1912年、日吉村と吉寿村が合併）を合体合併することになった。新町名は一般募集によって、国鉄の駅の名前で知られている岸本に決定し、こうして1955（昭和30）年に、現在の西伯郡岸本町が成立した。近年は米子市への交通の便が非常に良いことから、米子市のベッドタウンとしても発達している。

<参考文献>

『岸本町誌』	1983	岸本町
『旧石器・縄文時代の鳥取県』	1988	鳥取県埋蔵文化財センター
『弥生時代の鳥取県』	1987	鳥取県埋蔵文化財センター
『歴史時代の鳥取県』	1989	鳥取県埋蔵文化財センター
『尾高御建山遺跡Ⅱ・尾高古墳群Ⅱ・尾高1号横穴墓』	1995	財団法人鳥取県教育文化財団 建設省倉吉工事事務所
『大寺原遺跡発掘調査報告書』	1981	岸本町教育委員会
『久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡』	1984	財団法人鳥取県教育文化財団

- A. 坂長宮田ノ上遺跡 B. 坂中第5遺跡 C. 伯楽塚16号墳 D. 坂長佛谷遺跡
E. 小町越城野原第1遺跡 F. 小町越城野原第2遺跡
1. 大寺廃寺 2. 越敷ヶ丘遺跡 3～5. 越敷ヶ丘1～3号墳 6. 坂中第1遺跡 7. 坂中第3遺跡
8. 坂中第4遺跡 9. 坂中第5遺跡 10. 越城野原遺跡 11. 坊ガヶ遺跡 12～20. 大寺原1～9号墳
21. 大寺原遺跡 22～44. 越城野原1～23号墳 45～59. 伯楽塚1～15号墳 60～161. 越敷山13～118号墳
162. 越敷山第2遺跡 163. 小町第2遺跡 164. 小野小町墓伝承地 165～166. 坂長44・45号墳

挿図3 周辺遺跡分布図番号対応表

第3章 坂長宮田ノ上遺跡の調査

第1節 位置と環境

坂長宮田ノ上遺跡は、鳥取県西伯郡岸本町坂長字宮田ノ上に所在し、東方に大山、北方に日本海を望むことができる。調査地は、東西約160m、南北約15mで、谷を形成する北側斜面部にあり、その谷をはさんで、住宅地となっている「こしがが丘団地」と向かい合うように位置している。標高は、現況で55.0～65.0m、検出面で54.5～64.0mである。調査地南側は、越敷山から北へ延びる尾根の突端部に台地を形成し、田畑が営まれている。遺跡の南東部には、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡および古墳等を検出した坂中第5遺跡（本書・第4章）が所在する。

第2節 調査の経過と方法

調査は、平成7年4月に着手し、8月に現場作業を終了した。調査地内は、事前に岸本町教育委員会によって試掘調査が行われており、遺構、遺物の検出状況と現地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査面積は、1,931.9㎡であった。

調査前の当地は、竹林と一部が水田であった。調査前の地形を測量後、数本ベルトを設定し、土層状況を観察しながら重機により表土を除去した。その後、人力による精査、掘り下げを行った。その際、必要に応じて遺物の出土状況の写真撮影、実測、取り上げを行った。実測は、10×10mのグリッドを南北軸に合わせて設定し活用した。遺構の検出にあたっては、基本となる検出面を黄褐色土とし、土質の変化を観察しながら遺構を検出していった。検出した遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行い、調査後の地形を測量した。

第3節 遺構と遺物

1 概要（挿図4、5・写真図版7）

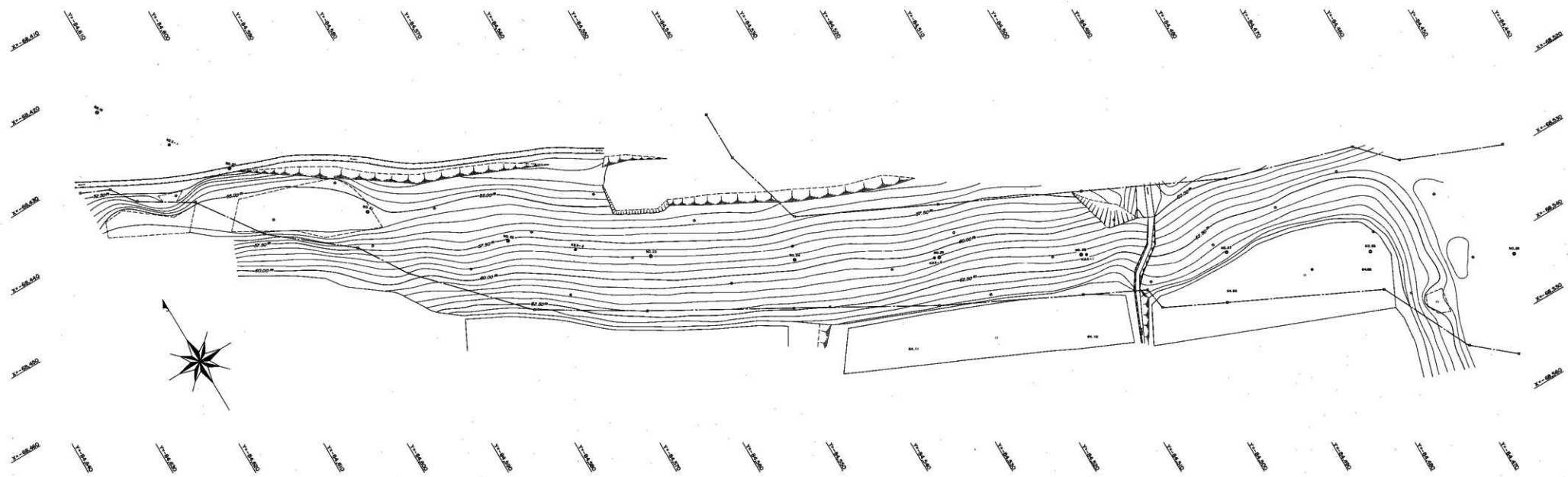
遺構は、落し穴15基（SK-1～15）、不明土坑2基（SK-16、17）、竪穴住居跡1棟（SI-1）、溝状遺構2条（SD-1、2）、ピットを検出した。

落し穴は、調査地内東側で検出した。調査地中央南端部では、形態、規模とも酷似した2基の土坑（SK-16、17）を検出した。これらの性格は不明であり、遺物は出土しなかった。

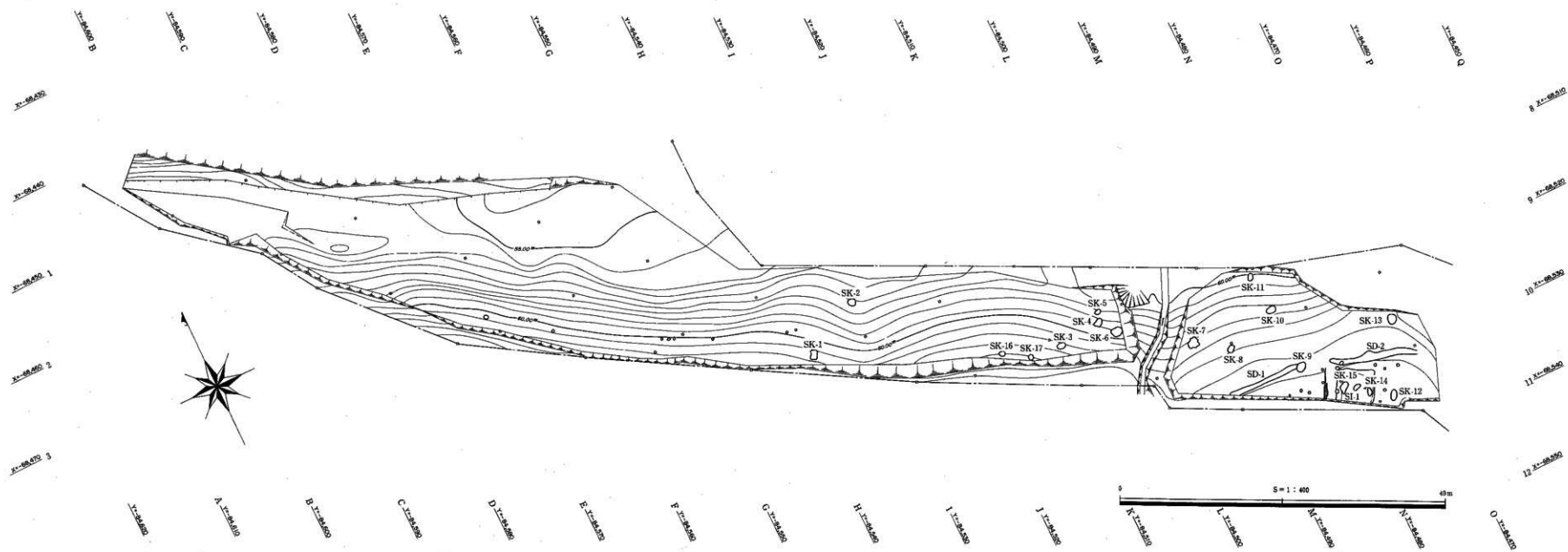
調査地東端部は、平坦面であった。ここでは、竪穴住居跡1棟、溝状遺構2条を検出した。竪穴住居跡からは土師器壺・甕・碗、須恵器杯蓋・坏身などが出土した。竪穴住居跡の時期は、古墳時代後期である。

溝状遺構については、遺物は出土しておらず、時期も不明である。

ピットは、調査地東端部の平坦面で主に検出した。埋土、規模、形態などを検討した。しかし、規則的に並ぶものは見られず、柱痕も確認できなかった。



挿図4 坂長宮田ノ上遺跡 調査前地形測量図

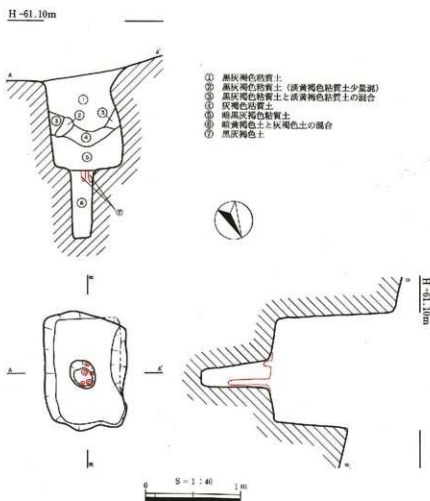


挿図5 坂長宮田ノ上遺跡 全体遺構実測図

2 縄文時代の遺構 (挿図6～20・写真図版1～5)

坂長宮田ノ上遺跡では、土坑17基 (SK-1～17) を確認した。その17基の土坑からは、遺物は出土していない。そのため時期を決定する要素はないのであるが、形態、埋土、他遺跡の検出土坑との比較を行い、それらの内15基は縄文時代の落し穴であると判断した。その根拠は、それらの土坑底面にピット (以下、底面ピットと呼称する) を持っていたことである。この底面ピットは、獲物を殺傷するための杭を据えるために掘られたものと考えられる。底面ピット埋土内には、複数の杭が立てられていた跡 (以下、杭痕跡と呼称する) も確認できた。杭痕跡は、土坑底面に直接立てていたと思われるものも確認した。このようなことより、ここでは15基の土坑を縄文時代の遺構として報告することにする。

なお、落し穴の実測図において、杭痕跡は赤色、石は青色で表している。



挿図6 SK-1 遺構図

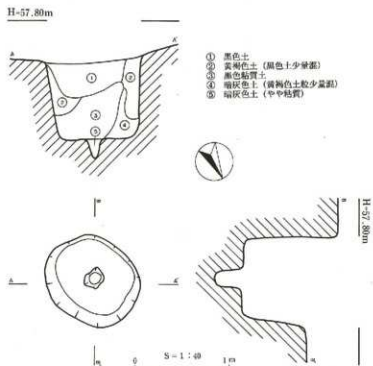
SK-1 (挿図6・写真図版1)

位置 調査地中央部南端、H 6 グリッドに位置し、標高60.3～60.8mの北向きの斜面に立地する。

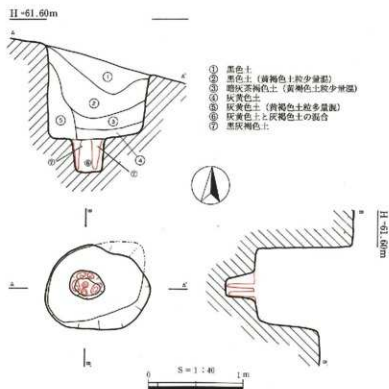
形態 検出面、底面とも隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸124cm、短軸61cm、底面で長軸113cm、短軸67cm、深さは122cmを測る。底面ピットを持ち、径は33cm、深さ71cmを測る。底面ピット埋土中には、⑦層 (黒灰褐色土) が棒状に入り込んでいる部分が5か所認められた。これは杭痕跡と考える。径

は約3cm、深さは約10cmであり、北側に位置するもののみ深さ45cmである。

埋土 埋土は7層に分けられ、全体的に、黒褐色系の粘質土である。底面ピット内の⑥層（暗黄褐色土と灰褐色土の混合土）は、杭の固定土と考える。



挿図7 SK-2遺構図



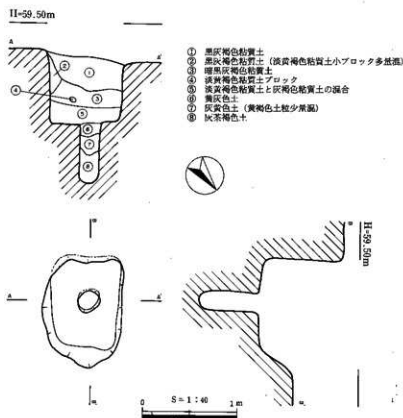
挿図8 SK-3遺構図

SK-2 (挿図7・写真図版1、2)

- 位置 調査地中央、I 6 グリッドに位置し、標高57.2~57.6mの北向きの斜面に立地する。
- 形態 検出面、底面とも楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸103cm、短軸60cm、底面で長軸82cm、短軸58cm、深さ97cmを測る。底面ビットを持ち、径は30cm、深さ27cmを測る。
- 埋土 埋土は7層に分けられ、全体的に黒灰色系の埋土である。底面ビットの埋土は、⑤層（やや粘質の暗灰色土）である。

SK-3 (挿図8・写真図版2)

- 位置 調査地東側、K 8 グリッドに位置し、標高61.0~61.4mの北向きの斜面に立地する。
- 形態 検出面、底面とも楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸112cm、短軸79cm、底面で長軸106cm、短軸68cm、深さ100cmを測る。底面ビットを持ち、径は35cm、深さ35cmを測る。底面ビット埋土中には、⑦層（黒灰褐色土）が塊状に入り込んでいる部分が6か所認められる。これは杭痕跡と考える。径は6~14cm、深さは約30cmである。
- 埋土 上層部分は黒色系土、下層部分は灰黄色系土であり、全体的に黄褐色土が混在している。底面ビット内の⑥層（灰黄色土と灰褐色土の混合土）は、杭の固定土と考える。



挿図9 SK-4遺構図

SK-4 (挿図9・写真図版2)

- 位置 調査地東側、K 8 グリッドに位置し、標高58.8~59.3mの北向きの斜面に立地する。
- 形態 検出面、底面ともいびつな長方形を呈する。規模は、検出面で長軸114cm、短軸69cm、底面で長軸95cm、短軸70cm、深さ83cmを測る。底面ビットを持ち、径は24cm、深さ67cmを測る。
- 埋土 埋土は8層に分けられ、上層は、黒褐色系の粘質土、最下層は地山土と粘土質の灰褐色土の混合土で

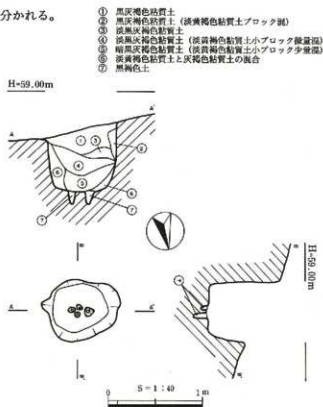
ある。底面ピット内の埋土は灰色系土で、3層に分かれる。

SK-5 (挿図10・写真版2)

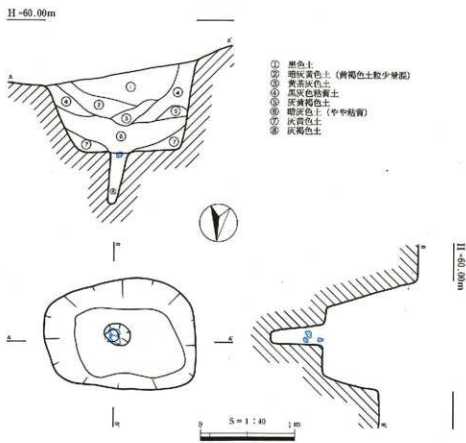
位置 調査地東側、K7グリッドに位置し、標高58.4~58.7mの北向きの斜面に立地する。

形態 検出面、底面ともいびつな楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸80cm、短軸49cm、底面で長軸58cm、短軸39cm、深さ72cmを測る。底面には、⑦層(黒褐色土)が棒状に入り込んでいる部分が4か所認められる。これは、杭痕跡と考える。径は7~10cm、深さ約30cmを測る。

埋土 埋土は7層に分けられ、全体的に、黒灰褐色系の粘質土であり、淡黄褐色粘質土ブロックが混在している。



挿図10 SK-5遺構図



挿図11 SK-6遺構図

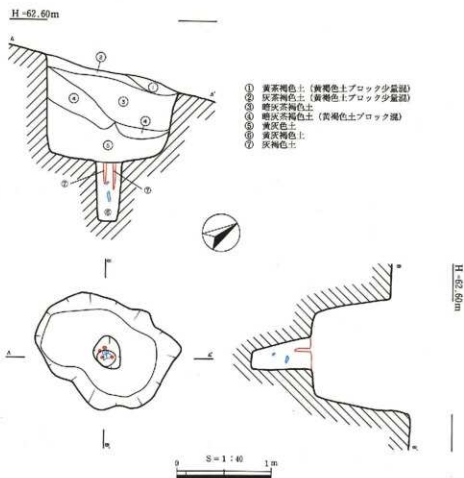
S K - 6 (挿図11・写真図版3)

位置 調査地東側、K 8 グリッドに位置し、標高59.2~59.6mの北向きの緩斜面に立地する。

形態 検出面、底面ともいびつな長方形を呈する。規模は、検出面で長軸160cm、短軸97cm、底面で長軸113cm、短軸68cm、深さ92cmを測る。底面ビットを持ち、径は28cm、深さ54cmを測り、わずかに斜め気味に穿たれている。

底面および底面ビット内部より出土した握り拳大の石3個は、杭の固定材と考える。

埋土 埋土は8層に分けられる。上層は①層(黒色土)、下層は灰色系土である。底面ビット内の埋土は、⑥層(灰褐色土)である。



挿図12 SK - 7 遺構図

S K - 7 (挿図12・写真図版3)

位置 調査地東側、M 9 グリッドに位置し、標高61.8~62.3mの北向きの緩斜面に立地する。

形態 検出面、底面とも楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸156cm、短軸94cm、底面で長軸123cm、短軸67cm、深さ102cmを測る。底面ビットを持ち、径は36cm、深さ65cmを測る。この中には、⑦層(灰褐色土)が棒状に入り込んでいる部分が4か所認められた。これは杭痕跡と考える。径は約4cm、深さは18~24cmである。

底面ビット内より出土した握り拳大の石4個は、杭の固定材と考える。

埋土 埋土は6層に分けられ、上層、中間層は灰茶褐色系土に黄褐色土ブロックが混在し、下層は⑤層(黄

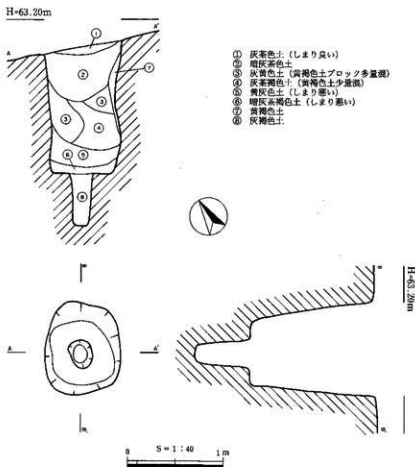
灰色土)である。底面ピット内の⑥層(灰褐色土)は、杭の固定土と考える。

SK-8 (挿図13・写真図版4)

位置 調査地東側、M10グリッドに位置し、標高62.9~63.0mの北向きの緩斜面に立地する。

形態 検出面、底面ともいびつな楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸100cm、短軸61cm、底面で長軸78cm、短軸58cm、深さ140cmを測る。底面ピットを持ち、径は30cm、深さ55cmを測る。

埋土 埋土は8層に分けられ、全体的に灰茶色系の土層であり、中間層には黄褐色土が混在している。底面ピットの埋土は⑥層(灰褐色土)である。



挿図13 SK-8遺構図

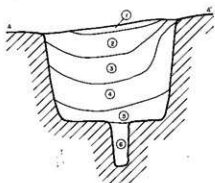
SK-9 (挿図14・写真図版4)

位置 調査地東側、N10グリッドに位置し、標高63.8~63.9mの北向きの緩斜面に立地する。

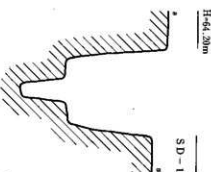
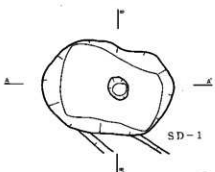
形態 検出面はいびつな楕円形、底面はいびつな長方形を呈する。規模は、検出面で長軸140cm、短軸90cm、底面で長軸110cm、短軸62cm、深さ106cmを測る。底面ピットを持ち、径は25cm、深さ47cmを測る。

埋土 埋土は6層に分けられ、上層は灰茶色系土、下層は灰色系土に黄褐色土が混在している。底面ピット内の埋土は、⑥層(暗灰黄色土)でかなりしまりが悪かった。

H-64.20m

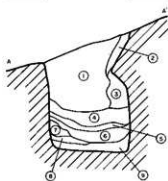


- ① 灰青色土 (しまり悪い)
- ② 灰青色土 (やや粘質)
- ③ 灰青色土
- ④ 灰青色土 (黄褐色土ブロック混)
- ⑤ 暗灰色土 (黄褐色土粒少量混)
- ⑥ 暗灰黄色土 (しまり悪い)

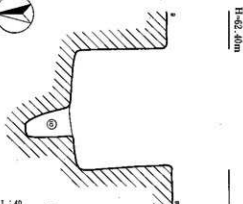
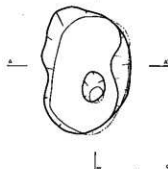


挿図14 SK-9遺構図

H-62.40m



- ① 暗黒灰褐色土
- ② 暗黒灰褐色土 (暗黄褐色粘質土少量混)
- ③ 暗黒灰褐色土と暗黄褐色粘質土の混入
- ④ 暗灰褐色粘質土 (しまり非常に良い)
- ⑤ 暗灰褐色粘質土 (暗黄褐色粘質土ブロック多量混)
- ⑥ 暗茶灰褐色粘質土
- ⑦ 暗茶灰褐色粘質土 (暗黄褐色粘質土混)
- ⑧ 茶灰褐色粘質土
- ⑨ 茶灰褐色粘質土 (暗黄褐色粘質土少量混)
- ⑩ 灰青色土



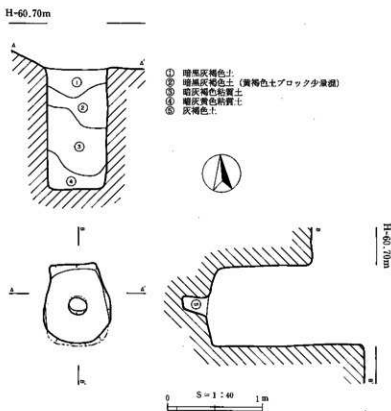
挿図15 SK-10遺構図

SK-10 (挿図15・写真図版4)

- 位置** 調査地東側、N9グリッドに位置し、標高61.7~62.0mの北向きの緩斜面に立地する。
- 形態** 検出面、底面ともいびつな楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸135cm、短軸89cm、底面で長軸124cm、短軸68cm、深さ121cmを測る。底面ピットを持ち、径は31cm、深さ49cmを測る。
- 埋土** 埋土は10層に分けられ、上層は①層(暗黒灰褐色土)であり、下層は灰褐色系の埋土が重なり合うように堆積している。底面ピットの埋土は⑩層(灰褐色土)である。

SK-11 (挿図16・写真図版4)

- 位置** 調査地東側、N9グリッドに位置し、標高60.0~60.6mの北向きの緩斜面に立地する。
- 形態** 検出面、底面とも隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸84cm、短軸53cm、底面で長軸80cm、短軸50cm、深さ160cmを測る。底面ピットを持ち、径は20cm、深さ26cmを測り、わずかに斜め気味に穿たれている。
- 埋土** 埋土は5層に分けられ、上層部は黒灰褐色系土、下層部は灰褐色系の粘質土である。底面ピットの埋土は⑥層(灰褐色土)である。

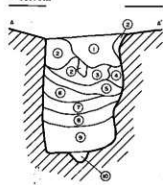


挿図16 SK-11遺構図

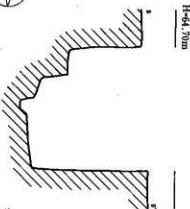
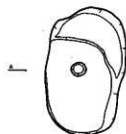
SK-12 (挿図17・写真図版5)

- 位置** 調査地東端部、O11グリッドに位置し、標高64.3~64.4mの北向きの緩斜面に立地する。
- 形態** 検出面、底面ともいびつな楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸135cm、短軸76cm、底面で長軸95cm、短軸54cm、深さ124cmを測る。北側は中ほどで段状になっている。底面ピットを持ち、径は17cm、深さ15cmを測る。
- 埋土** 埋土は10層に分けられ、全体的に粘質系の埋土で、上層は黒灰褐色系土、下層は茶褐色系土である。底面ピットの埋土は⑩層(灰褐色土)である。

H-64.70m



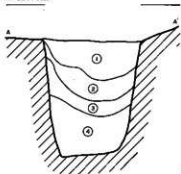
- ① 暗黒灰褐色土
- ② 黒灰褐色土
- ③ 暗黄褐色粘質土 (粘性強い)
- ④ 黒灰褐色土 (暗黄褐色粘質土少量混)
- ⑤ 暗茶灰褐色粘質土
- ⑥ 暗黄褐色粘質土 (粘性強い)
- ⑦ 暗茶灰褐色粘質土と暗黄褐色粘質土の混合
- ⑧ 暗茶褐色粘質土
- ⑨ 暗黄茶褐色粘質土
- ⑩ 灰褐色土



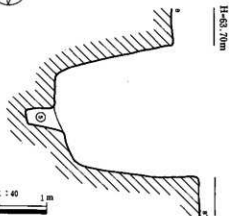
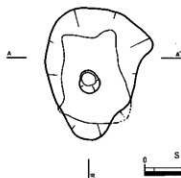
S = 1 : 40 1m

挿図17 SK-12遺構図

H-63.70m



- ① 暗茶褐色土
- ② 黒褐色土
- ③ 淡橙褐色粘質土
- ④ 暗黒褐色土
- ⑤ 灰褐色土

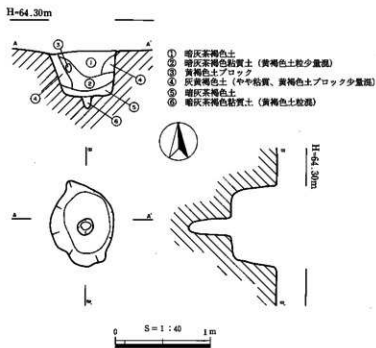


S = 1 : 40 1m

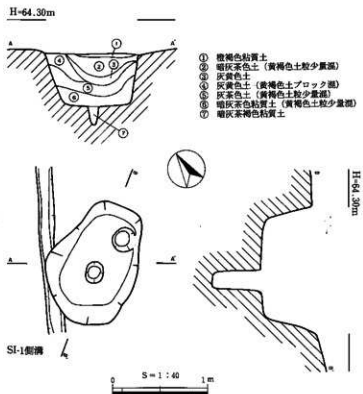
挿図18 SK-13遺構図

SK-13 (挿図18・写真図版5)

位置 調査地東端部、O10グリッドに位置し、標高63.3~63.5mの北向きの緩斜面に立地する。
 形態 検出面はいびつな楕円形、底面はいびつな長方形である。規模は、検出面で長軸142cm、短軸80cm、
 底面で長軸100cm、短軸56cm、深さ138cmを測る。底面ビットを持ち、径は25cm、深さ37cmを測る。
 埋土 埋土は5層に分けられる。底面ビットの埋土は、⑤層(灰褐色土)である。

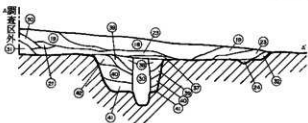


挿図19 SK-14遺構図



挿図20 SK-15遺構図

H-65.00m



H-65.00m

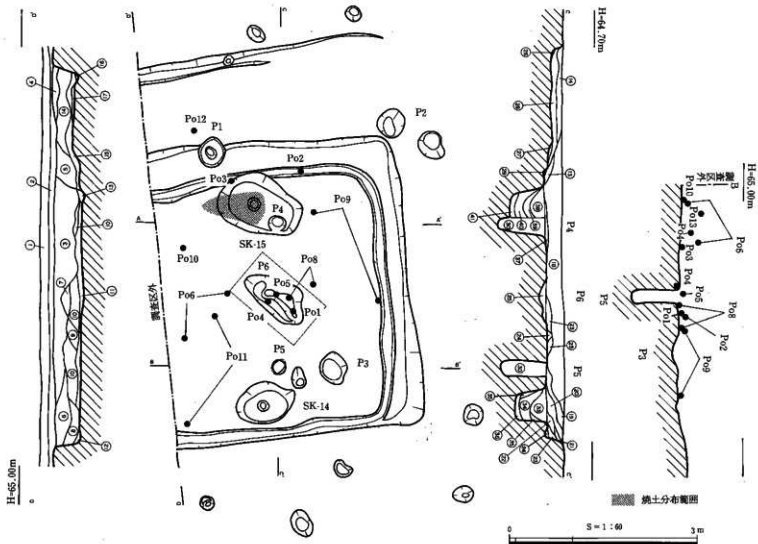
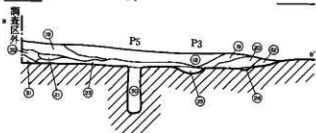


插图21 S I - 1 遺構図

SK-14 (挿図19・写真図版5)

- 位置 調査地東端部、O11グリッドに位置し、標高64.0mに立地する。S I-1の床面で検出した。
- 形態 検出面、底面とも槽円形を呈する。規模は、検出面で長軸95cm、短軸48cm、底面で長軸66cm、短軸35cm、深さ49cmを測る。底面ビットを持ち、径は19cm、深さ43cmを測る。
- 埋土 埋土は6層に分けられ、全体的に灰茶褐色系の埋土であり、黄褐色土が混在している。底面ビットの埋土は、⑥層（黄褐色土粒の混在した暗灰茶褐色粘質土）である。

SK-15 (挿図20・写真図版5)

- 位置 調査地東端部、O11グリッドに位置し、標高63.9mに立地する。S I-1の床面で検出した。
- 形態 検出面、底面ともいびつな槽円形である。規模は、検出面で長軸134cm、短軸63cm、底面で長軸104cm、短軸63cm、深さ56cmを測る。底面ビットを持ち、径は23cm、深さ51cmを測る。底面壁際のビットは、S I-1に伴う柱穴である。
- 埋土 埋土は7層に分けられ、全体的に黄褐色土が混在している。底面ビットの埋土は、⑦層（暗灰茶褐色粘質土）である。①層（橙褐色粘質土）は、S I-1の床面で検出した焼土である。

3 古墳時代の遺構

S I-1 (挿図21~25・写真図版6、8)

- 位置 調査地東側南端部、N11グリッドに位置し、標高64.1~64.5mの北向きのかなだらかな斜面に立地する。遺構南部は調査地外におよんでいるため、全体を検出できていない。
- 形態 土層断面の観察より、S I-1は、2度の建て替えが行われたと考える。住居の構築順序の考察を行い、①→②→③の順序（挿図23）で構築され、構築ごとに縮小が行われたと判断した。
- ①は、大部分が流失しており、検出した規模は、南北に3.9mである。壁高は、最も残存状態が良い南端部で40cmである。側溝は、幅約10cm、深さ約4cmを測る。①に伴う柱穴は、P 1、2と考え、その径は約50cm、深さ約40cmを測る。柱穴間距離は、2.4mである。
- ②の検出できた規模は、南北4.0m、東西4.7mである。壁高は、最も残存状態が良い南端部で15cmである。柱穴はP 4、5を使用したと考える。これらの径は25cm、深さ80cm、柱穴間距離は2.5mを測る。側溝は認められなかった。
- ③の検出できた規模は、南北3.6m、東西4.2m、残存壁高は、東端部で40cmを測る。壁面沿いには、幅約10cm、深さ約3cmの側溝を検出した。東壁は、②と共用したと考える。柱穴もP 4、5を②と共用したと考える。P 6は中央ビットであり、ビット底面から少し浮いた状態でPo 1、4、5、8が出土した。P 4付近では、焼土を検出した。
- 埋土 埋土は、42層に分けられるが、①・②層は現代の耕作土である。土層断面には、⑭層、⑮層、⑯層の切り合い関係が見られる。このことより、住居の構築順序を①→②→③と考えた。
- 遺物 図化できたものはPo 1~12である。Po 1~9は土師器、Po 10~12は須恵器である。Po 1、4~9は土師器の壺である。中でもPo 4は残存状態が良好であり、ほぼ全体を復元することができた。「く」の字状の口縁を有し、丸底を呈し、外面頸部はハケメ調整、内面頸部に横方向のケズリが見られる。Po 2、9は土師器の小型丸底壺である。2点とも内面にケズリ調整、底部付近に指頭圧痕が見られる。Po 3は土師器の碗である。Po 10は須恵器の杯身である。口縁部の立ち上がりはやや内傾し、受部はやや上向きに延びる。口縁内側には軽い段を有する。Po 11、12は須恵器の杯蓋である。Po 11は口縁部と天井部の境目に鈍い稜を有し、口縁端部には内面に軽い段が見られる。Po 12は、天井部と口縁部の境

目に沈線がめぐり、口縁端部に段は見られない。

時期 出土した土器より古墳時代後期と考える。

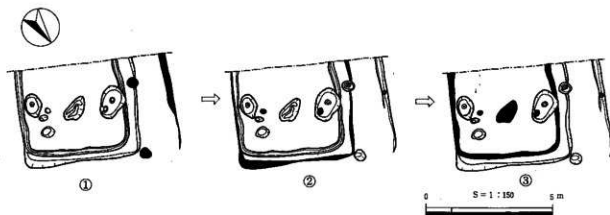


H=64.10m



S = 1 : 10
0 10 20 30m

挿図22 S I - 1・P 6 遺物検出状況図



挿図23 S I - 1・住居の変遷

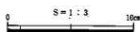
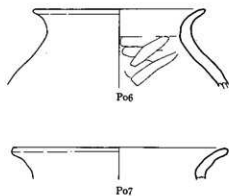
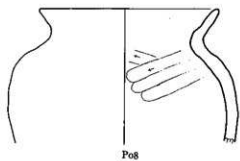
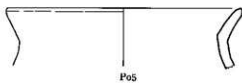
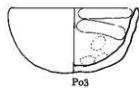
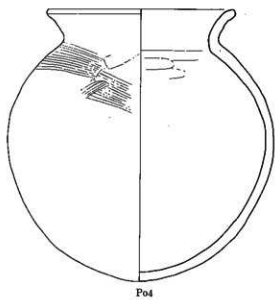
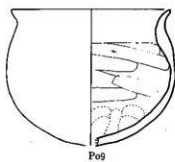
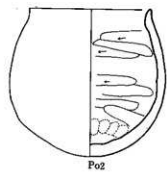
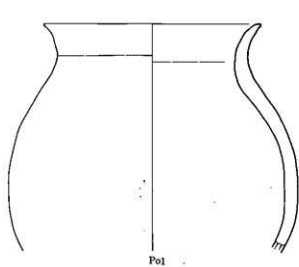
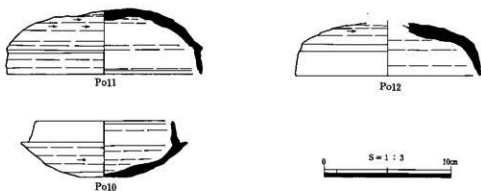


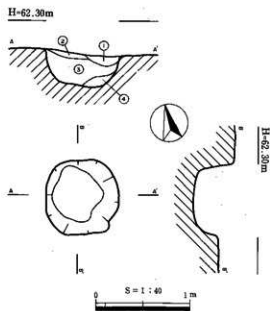
插图24 S I - 1出土物实测例图1



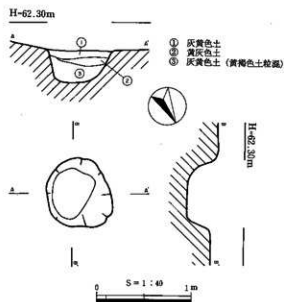
挿図25 S I - 1 出土遺物実測図 2

4 時期不明の遺構 (挿図26~29・写真図版7)

既に報告した遺構以外に、当調査地では、土坑2基 (SK-16、17) と溝2条 (SD-1、2) を検出した。これらの遺構からは、遺物が出土しておらず時期を特定することはできなかった。



挿図26 SK-16遺構図



挿図27 SK-17遺構図

SK-16 (挿図26・写真図版7)

位置 調査地東側、J7グリッドに位置し、標高61.9~62.1mの北向き緩斜面に立地する。

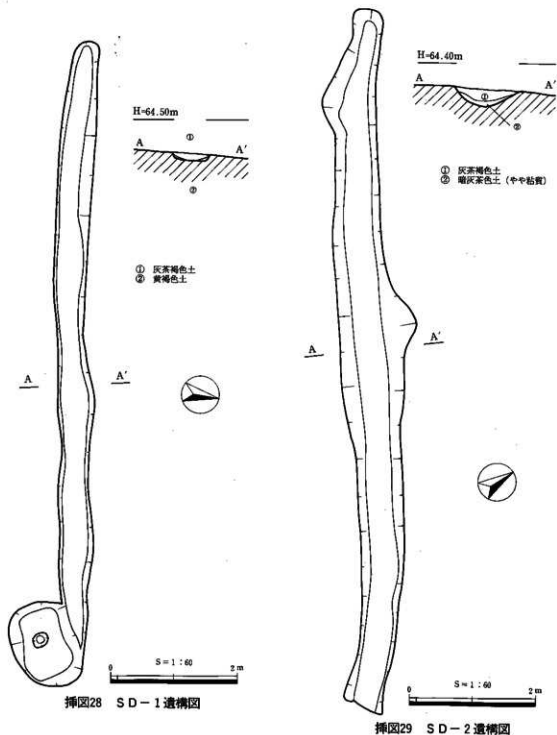
形態 検出面、底面ともいびつな円形を呈する。規模は、検出面で長軸85cm、短軸65cm、底面で長軸60cm、短軸32cm、深さ36cmを測る。

埋土 埋土は4層に分けられ、全体的に灰黄色系土である。

性格 性格は不明であるが、SK-16は後述するSK-17から西に約3mと近接しており、規模、形態、埋土とも酷似していることより、両者はほぼ同時期のものとする。

SK-17 (挿図27・写真図版7)

- 位置 調査地東側、J 8 グリッドに位置し、標高61.9～62.0mの北向きの緩斜面に立地する。
 形態 検出面、底面ともいびつな円形を呈する。規模は、検出面で長軸77cm、短軸52cm、底面で長軸50cm、短軸29cm、深さ34cmを測る。
 埋土 埋土は3層に分けられ、全体的に灰黄色系土である。
 性格 性格は不明である。



SD-1 (挿図28・写真図版7)

- 位置 調査地東側、M 9 グリッドに位置し、標高63.7～63.9mの北向きの緩斜面に立地する。調査地南端部より東に延びる。

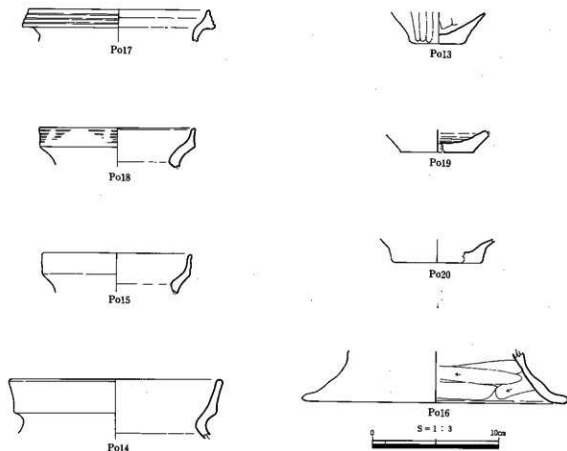
- 形態 ほぼ東西に延び、東端部はSK-11上で消失し、西端部は完結している。規模は、長さ約10m、幅約50cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは10cm前後を測る。
- 埋土 埋土は2層に分けられ、大半を①層（灰茶褐色土）が占め、自然堆積したものと思われる。
- 性格 性格は不明であるが、後述するSD-2と近接しており、形態、埋土も酷似しているため、これらは同時期のものと考ええる。

SD-2 (挿図29・写真図版7)

- 位置 調査地東端部、N9グリッドに位置し、標高63.0~63.8mの北向きに緩斜面に立地する。
- 形態 東端部は後世の擾乱により消失しており、西端部は完結している。規模は、長さ約11.3m、幅50cmから120cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは20cm前後を測る。
- 埋土 埋土は2層に分けられ、大半を①層（灰茶褐色土）が占め、自然堆積したものと思われる。
- 性格 性格は不明である。

5 遺構外遺物 (挿図30)

図化できたものはPo13~20である。Po13、19、20は底部片、Po14、15は土師器の複合口縁、Po17、18は凹縁が施された弥生土器の口縁部片、Po16は器台脚部である。



挿図30 遺構外出土遺物実測図

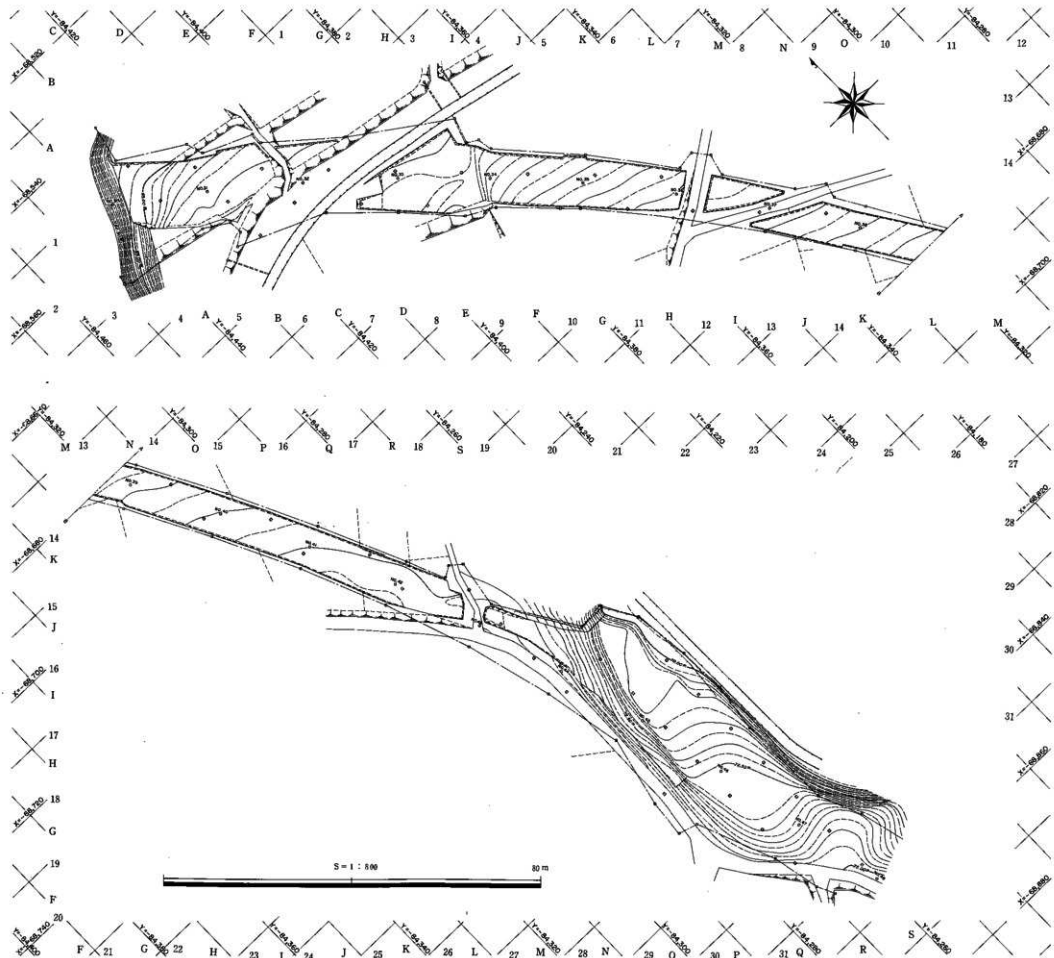


插图31 板中第5道跡A区調査前地形測量図

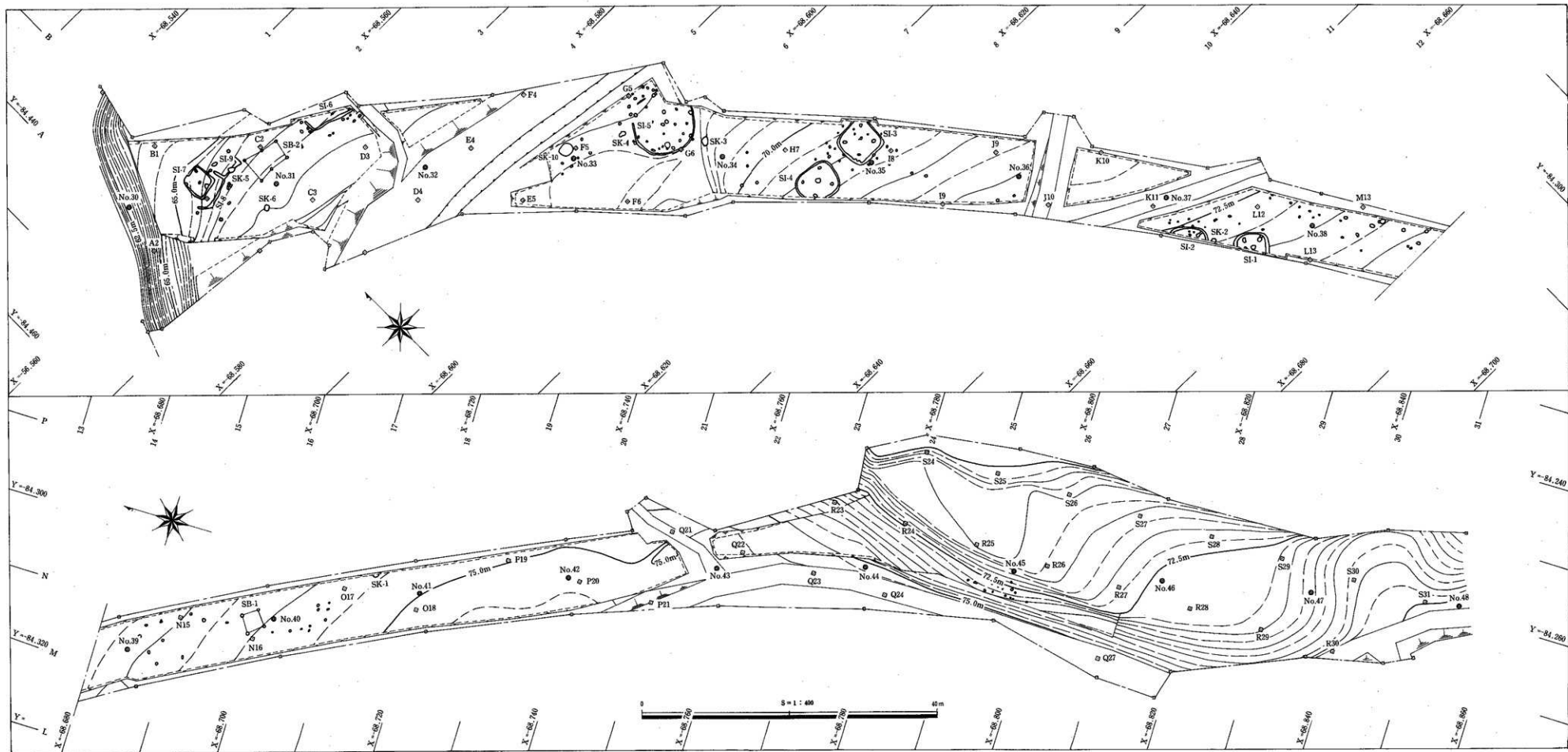


插图32 坂中第5遺跡A区全体遺構実測図

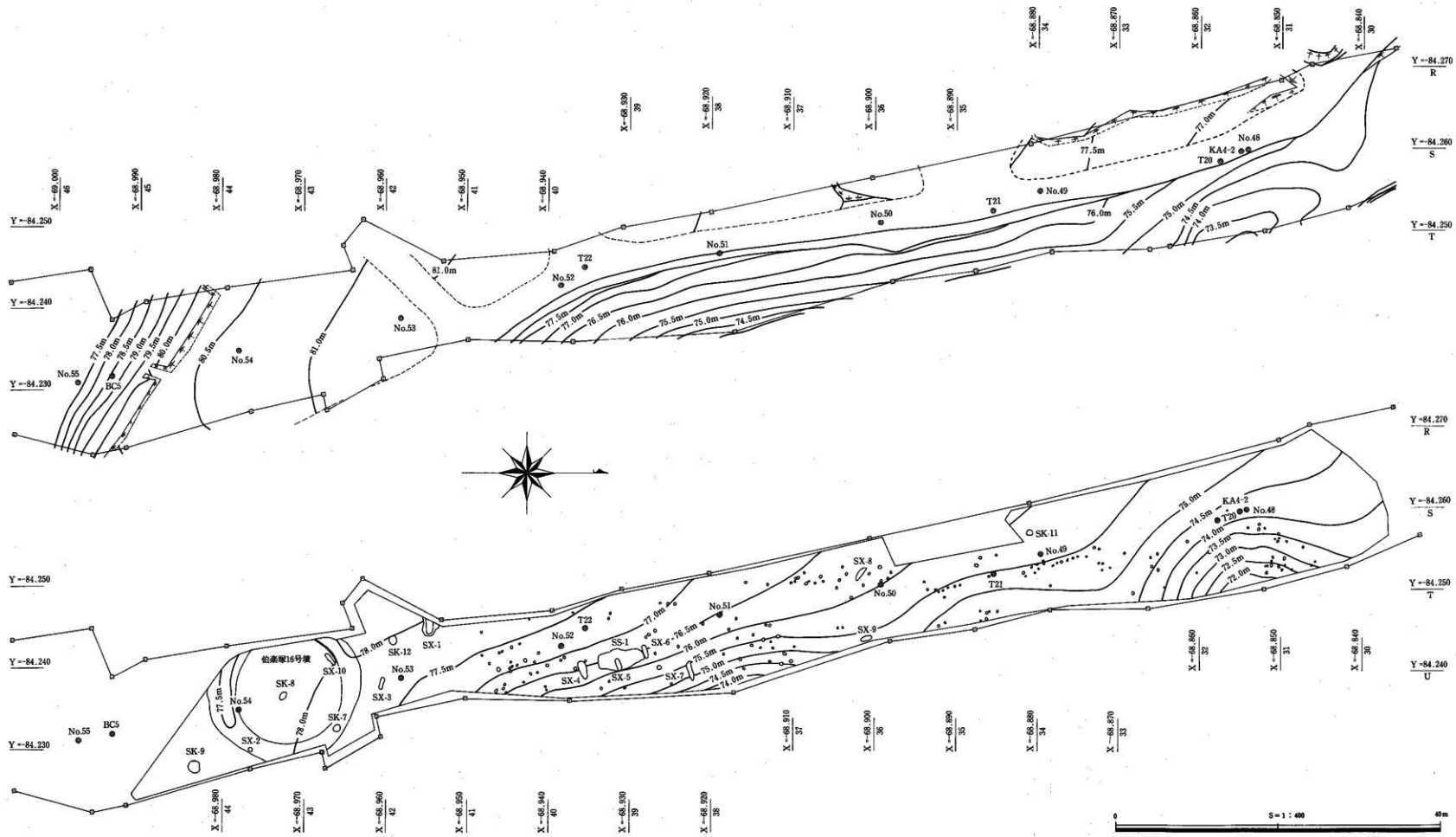


插图33 板中第5号避难区域调查前地形测量图·全体透视图测区

第4章 坂中第5遺跡の調査

第1節 位置と環境 (挿図31~33)

坂中第5遺跡は、鳥取県西伯郡岸本町坂長字宮田ノ峯に所在し、2ヶ年にわたって調査をおこなった。平成7年度調査区をA区、平成8年度をB区と呼称する(以下同様)。

A区は、東方に大山、北方に日本海を望むことができる。調査地は、南北に約360mで、越敷山から北に向かって派生する尾根の突端部に形成されている台地上に位置する。調査地は緩やかに傾斜しているが、全体に平坦地であるため、周囲では、果樹園、水田、畑等が営まれている。調査地東側には並行して佐野川が流れており、調査地北部を横切る。その付近は攪乱されており、検出面が段状地形となっている。標高は、現況で65~75m、検出面で64.7~74.7mである。調査地の北側には、小さな谷を挟んで坂長宮田ノ上遺跡が存在する。

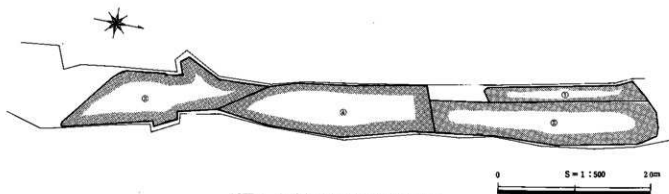
B区は、A区の南より始まる。東西約10m、南北約130mの狭長な調査範囲である。標高226mの越敷山から北に向かって派生する尾根は、深い谷を形成し、2本に分かれる。やや東寄りに延びた尾根は日野川の左岸を走り、一方の真つぐ北に延びる尾根はその北端でなだらかな台地を形成している。標高73~80mの調査区はその台地上東端にあり、東側に小さな谷地形を形成し、北東に向かってなだらかに下る。

本調査区の南には16基からなる伯耆塚古墳群、さらに南には総数119基からなる越敷山古墳群が尾根上のいたる所に所在している。また東側の尾根には越敷野原遺跡、越敷野原古墳群が存在しており、B区より南側は古墳の密集地帯となっている。

第2節 調査の経過と方法 (挿図31~34)

A区の調査は、平成7年7月に着手し、12月に現場作業を終了した。調査区内は、事前に岸本町教育委員会によって試掘調査が行われており、遺構、遺物の検出状況と、現地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査面積は3,776m²であった。

調査前の当地は、果樹園、畑、一部が水田であった。調査前の地形を測量後、土層状況を観察しながら重機により表土を除去した後、人力により精査、検出を行った。その際、必要に応じて遺物の出土状況の写真撮影、実



挿図34 坂中第5遺跡B区調査区略図

測には、10×10mの測量用基準杭を南北軸に合わせて設定し活用した。遺構の検出にあたっては、黄褐色土の地山面を基本とし、土質の変化を観察しながら行った。調査区が狭長なため、遺構が調査区外に広がる場合も多かった。また、調査区内を農道が4本横切っており、その部分は調査を行っていない。検出された遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行い、調査区全体については、調査後の地形を測量し、ラジコン・ヘリコプターによる全体の空中写真撮影を行った。平成7年11月に現場説明会を行い、一般に遺跡を公開した。

B区の調査は平成8年8月に着手、10月に現場作業を終了した。事前の岸本町教育委員会による試掘調査の結果と、鳥取県埋蔵文化財センターによる遺跡分布調査の結果を勘案し、現地地形の様子から判断して調査範囲を決定した。調査面積は約2,000m²であった。

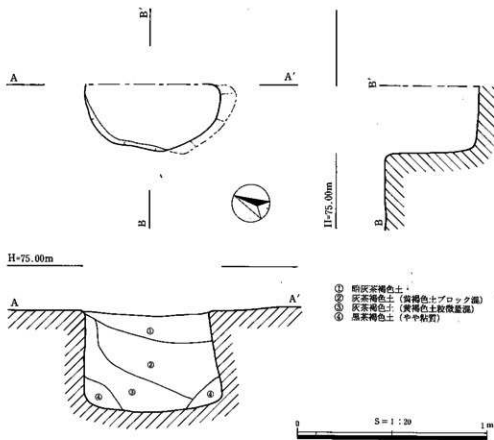
調査区は後世の畑地造成や、造園作業時に地形の改変がなされており、造園の施肥料や、植木の搬入および搬出などで多数の掘り込みがみられ、攪乱された状態が随所で見られた。さらに越数山へ通じる古くからの道が調査区を縦断しており、本来の地形を維持しているものとは考えられなかった。

調査着手の段階で予測されたのは、北側ではA区から続く堅穴住居跡や掘立柱建物跡およびその付随施設、南側では周知の遺跡である伯耆塚古墳群に関連した遺構であった。

調査の方法としては、既存の道路を確保するために調査区を大きく4分割(挿図34)し、①→②→③→④の順に調査を進めた。調査は、重機による表土剥ぎを行った後に人力による精査、掘り下げを行った。遺構面の確認のため、重機による表土剥ぎの前に各所にトレンチを設定、人力によって掘り下げた。

①および②では、表土下にクロボク層が10~50cm、東側斜面の深いところで約1m堆積しており、このクロボク層を除去すると、橙褐色の地山が露出し、この面を遺構面として調査を行った。

③ではトレンチによって古墳の周溝と見られる落ち込みを確認したため、トレンチの増設および延長を行っ



挿図35 SK-1遺構図

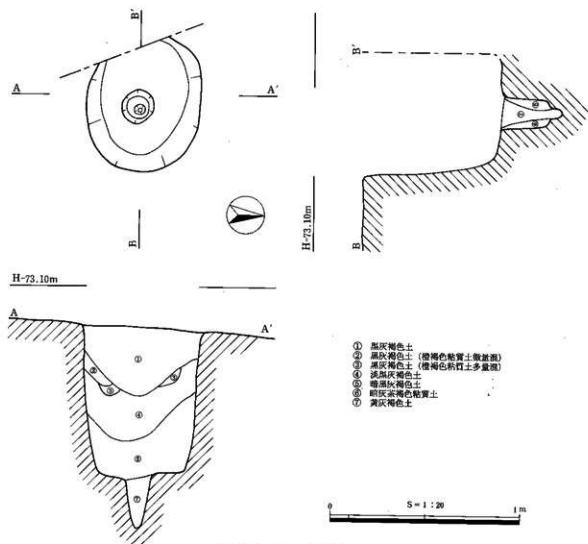
た。事前に行われた岸本町教育委員会の試掘調査の結果とも合わせ、調査区内に円墳の存在を確認した。円墳は伯耆塚古墳群の1つとし、伯耆塚16号墳と呼称することにした。伯耆塚16号墳は後世の削平により墳丘を失っており、周溝のみの検出となった。クロボク層を基底面として古墳を築造しており、墳丘を失った後にも黒色土が堆積した様子で、周溝の検出には周溝の埋土である茶系の埋土が確認できるまで、上面から重機で少しずつ黒色土を剥ぎ取った。結果、上層が茶褐色系の土で堆積した古墳周溝を検出することができ、その後、人力による精査、掘り下げを行った。古墳調査終了後、人力によってすべてのクロボク層を除去し、地山面での精査、掘り下げを行った。

④では、南側が③と接しているため、古墳および付随施設の存在を考え、入念なトレンチ調査を行ったが、古墳の存在が確認できなかったため、重機によってクロボク層をすべて除去し、地山面を遺構面として調査を進めていった。

第3節 遺構と遺物 (挿図31~33・写真図版9~30)

1 概要 (挿図31~33・写真図版9~30)

A区で検出した遺構は、土坑7基 (SK-1~6、10)、竪穴住居跡9棟 (SI-1~9)、掘立柱建物跡2棟



挿図36 SK-2遺構図

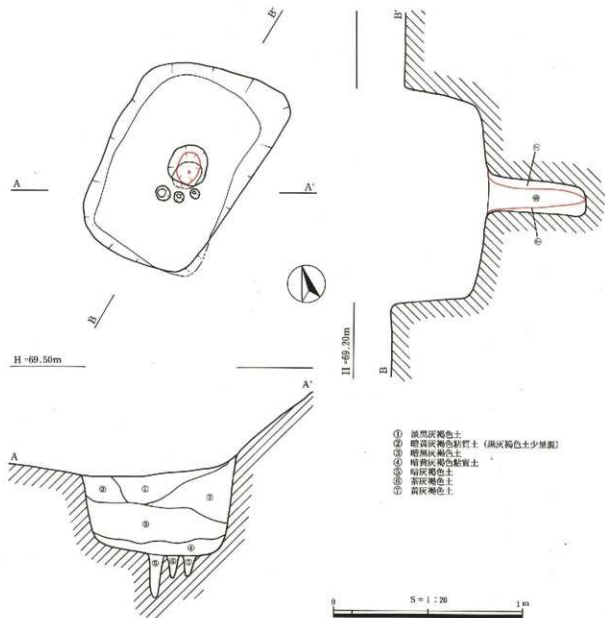
(SB-1、2)、ピットである。土坑は、調査区北側に点在する。SK-1~6は落し穴、SK-10は貯蔵穴と考えられる。SK-10は、竪穴住居跡とほぼ同時期のものと思われる。竪穴住居跡も調査区北側の平坦面に存在する。すべての住居跡は古墳時代前期のものと思われる、住居跡はSI-1とSI-2、SI-3とSI-4がそれぞれ隣接している。調査区北端部では、SI-6、7、8、9を検出した。SI-7、8、9は互いに切り合い・重複関係にあった。SB-1、2は、遺物が出土しておらず、時期は不明である。

B区では、調査区南側に古墳1基(伯楽塚16号墳)、伯楽塚16号墳の周溝内埋葬土器棺墓1基(SX-2)、石蓋土墳墓1基(SX-1)、木棺墓1基(SX-3)、調査区中央から南側にかけて土墳墓7基(SX-4~10)、テラス状遺構1基(SS-1)、落し穴3基を含む土坑5基(SK-7~9、11、12)を検出した。

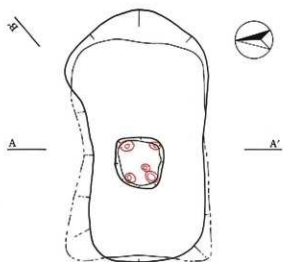
2 縄文時代の遺構 (挿図35~43・写真図版10~13)

落し穴 (挿図35~43・写真図版10~13)

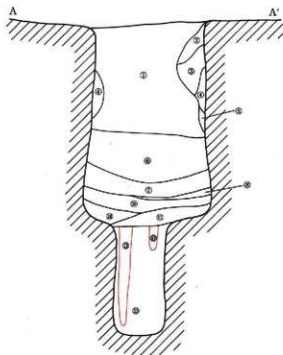
本遺跡で検出した落し穴と考えられる土坑は9基(SK-1~9)であった。落し穴の構築時期についてはそ



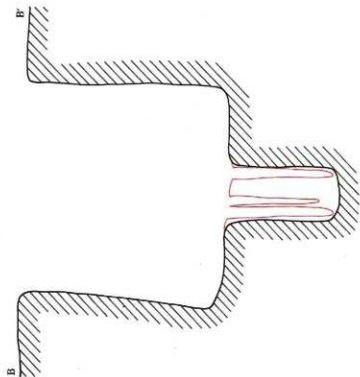
挿図37 SK-3 遺構図



H = 69.00m



H = 69.00m



- ① 黒灰褐色土
- ② 黒灰褐色土と黄灰褐色土の融合
- ③ 黄灰褐色土（黒灰褐色土少量混）
- ④ 黒灰褐色土と赤褐色土の融合
- ⑤ 黒灰褐色土（赤褐色土少量混）
- ⑥ 赤褐色土
- ⑦ 赤灰褐色粘質土（黄褐色土細粒少量混）
- ⑧ 暗赤褐色土
- ⑨ 暗赤褐色粘質土（黄褐色土細粒少量混）
- ⑩ 暗赤褐色粘質土
- ⑪ 暗赤褐色粘質土（黄灰褐色粘質土少量混）
- ⑫ 黄灰褐色粘質土（赤灰褐色土しみ込に混）
- ⑬ 赤灰褐色粘質土（黄灰褐色粘質土中心ブロック及び粘砂土少量混）

S = 1 : 20 1m

挿図38 SK-4遺構図

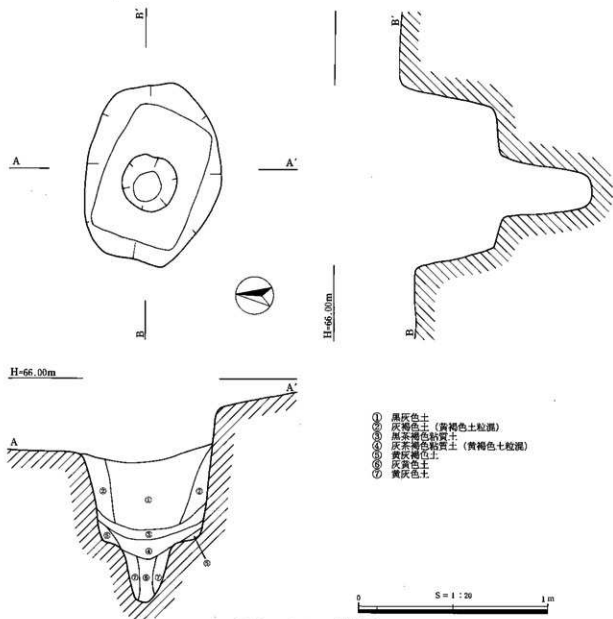
の用途上、構築時期の特定できる遺物を検出することは稀である。本遺跡が所在する越敷山周辺、米子平野周辺でも落し穴が多数報告されている。越敷山遺跡群（註1）や青木遺跡（註2）、泉中峰・泉前田遺跡（註3）からは縄文土器が出土し、小町越城野原第2遺跡（註4）や尾高御建山遺跡（註5）では埋土中の炭化物の¹⁴C年代測定を行い、縄文時代後期～晩期という結果が報告されている。埋土中の遺物は、遺構の埋没時に二次的に流入したものであって、必ずしも正確な遺構の構築時期を示すとはいえないが、概ね縄文時代後期～晩期が妥当であると考えられる。

今回検出した9基の落し穴についても、埋土中に遺物が見られないため、その構築時期を特定することができないが、規模・形態・埋土等が周辺遺跡検出の落し穴と比較的によく似ていることより、縄文時代の遺構とする。

SK-1（挿図35・写真図版10）

A区のほぼ中央東端、O17グリッドに位置し、標高74.8mの平坦面に立地する。

東側が調査区外におよんでおり、遺構全体を把握することはできないが、検出面、底面とも楕円形を呈するものと思われる。規模は検出面で長軸約70cm、短軸36cm以上、底面で長軸約80cm、短軸37cm以上、深さ約50cmを測る。埋土は4層に分けられ、自然堆積と考える。



挿図39 SK-5 遺構図

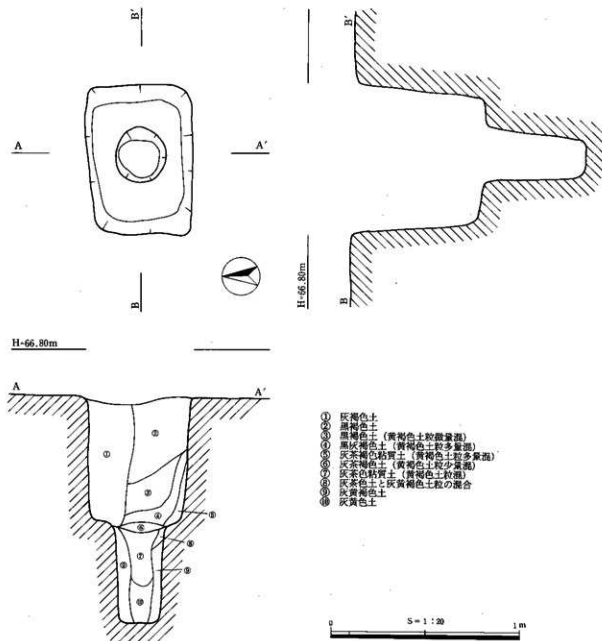
SK-2 (挿図36・写真図版10)

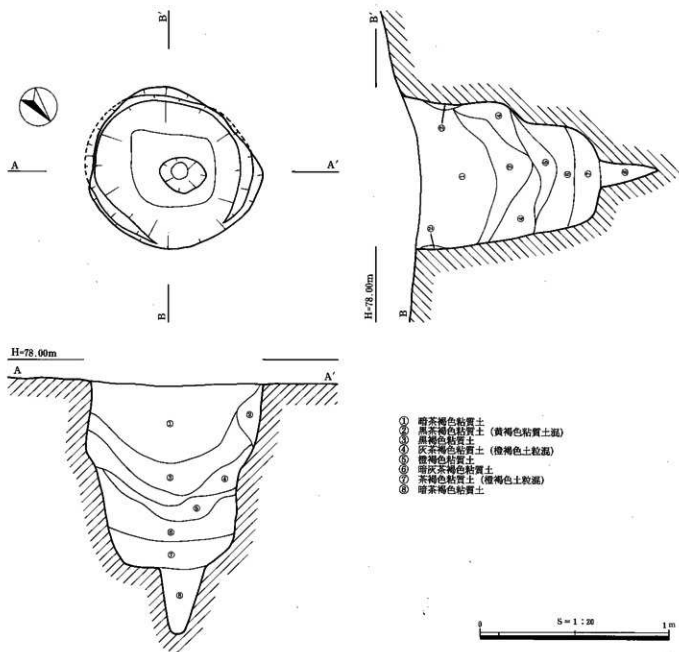
A区のほぼ中央南端、K11グリッドに位置し、標高72.9mの平坦面に立地する。

遺構はS I-1、2と隣接する。南側が調査区外におよんでおり、遺構全体を把握することができないが、検出面、底面とも楕円形を呈するものと思われ、底面には獲物殺傷用の杭を据えるための穴（以下底面ピットと呼称する）を持つ。規模は検出面で長軸75cm以上、短軸約50cm、底面で長軸60cm以上、短軸約50cm、深さ約80cmを測る。底面ピットは径約20cm、深さ約40cmを測る。埋土は7層に分けられ、自然堆積と考える。⑦層は杭の痕跡（以下杭痕跡と呼称する）、⑧層は杭の固定土と考える。

SK-3 (挿図37・写真図版10)

A区の南側、G 6グリッドに位置し、標高69.0mの平坦面に立地する。遺構上面は後世に攪乱を受けており、全体を大きく切り削られている。検出面、底面とも隅丸長方形を呈しており、底面ピットとその付近に直接杭を打ち込んだ小穴（以下これも杭痕跡と呼称する）を3つもつ。規模は、検出面で長軸約1.2m、短軸約80cm、底





挿図41 SK-7遺構図

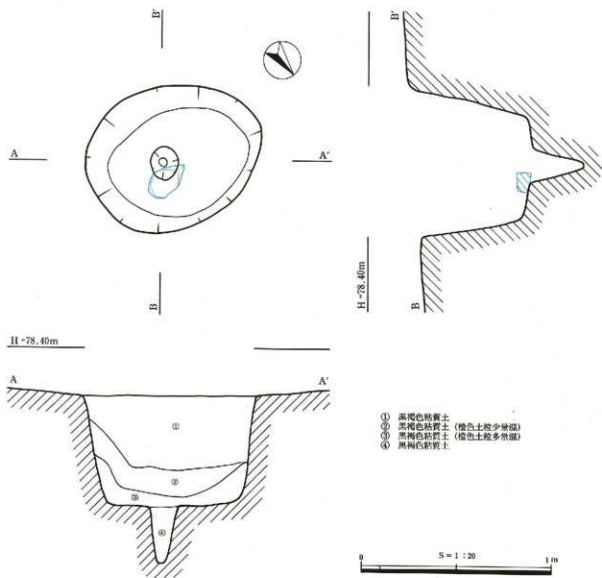
面で長軸約1m、短軸約60cm、深さ約40cmを測る。底面ビットは径約20cm、深さ約40cm、3つの杭痕跡は径8cm前後、深さ13~24cmを測る。埋土は7層に分けられ、自然堆積したものと考える。⑤、⑥層は杭痕跡、⑦層は杭の固定土と考える。

SK-4 (挿図38・写真図版10、11)

A区の北側F5グリッドに位置し、標高68.7mの平坦面に立地する。検出面、底面ともいびつな隅丸長方形を呈し、底面ビットを持つ。規模は、検出面で長軸約1.4m、短軸約70cm、底面で長軸約1.2m、短軸70cm、深さ約1.1mを測る。底面ビットは径約30cm、深さ約60cmを測る。埋土は13層に分かれ、②~⑤層は壁面の崩落と考える。底面ビット内の⑬層は径6cm前後、深さ10~50cmを測る杭痕跡と考える。

SK-5 (挿図39・写真図版17)

A区北端B1グリッドに位置する。遺構は標高65.6~65.9mに立地し、SI-9と切り合っている。検出面はいびつな楕円形、底面は隅丸長方形を呈しており、底面ビットを持つ。規模は検出面で長軸約1m、短軸約70

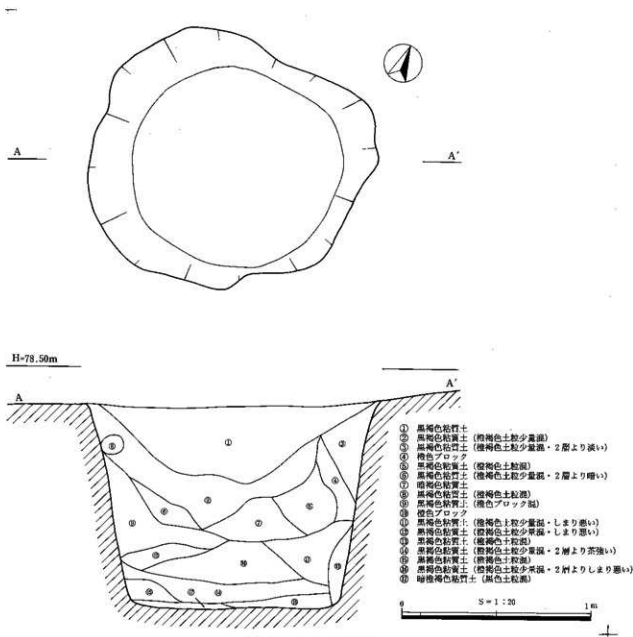


挿図42 SK-8 遺構図

cm、底面で長軸約70cm、短軸約50cm、深さ約50cmを測る。底面ピットは径約30cm、深さ約50cmを測る。埋土は7層に分けられ、⑥層は径約10cm、深さ約25cmを測る杭痕跡と考える。

SK-6 (挿図40・写真図版11)

A区北端B2グリッドに位置し、標高66.5mの平坦面に位置する。検出面、底面とも長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は検出面で長軸約80cm、短軸約60cm、底面で長軸約60cm、短軸約50cm、深さ約70cmを測る。底面ピットは径約30cm、深さ約50cmを測る。埋土は10層に分けられる。⑦、⑩層は径約20cm、深さ約50cmを測る杭痕跡と考える。



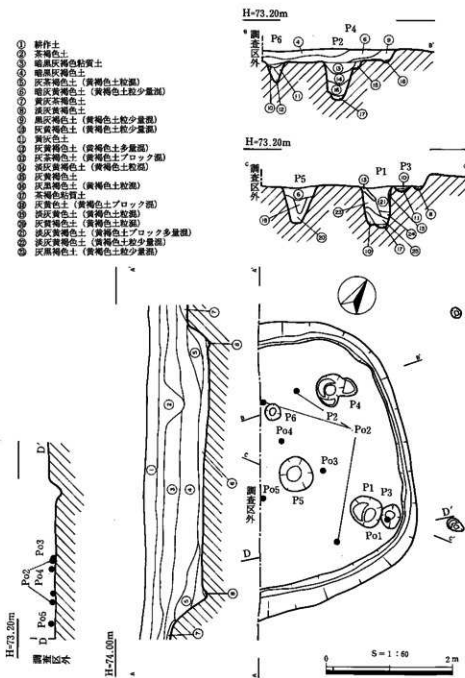
挿図43 SK-9 遺構図

SK-7 (挿図41・写真図版12)

SK-7はB区の南、U42グリッドの東、伯楽塚16号墳の周溝内で検出した。検出面の標高は77.7mである。検出面はいびつな円形、底面は隅丸方形を呈しており、底面ビットをもつ。規模は、検出面で長軸90cm、短軸80cm、底面で長軸45cm、短軸40cm、底面までの深さは約1mを測る。また底面ビットは長軸25cm、深さ30cmを測る。埋土は8層に分層でき、全体的に暗い色の土で堆積しているが、⑤層のオレンジ色の明るい土であり、壁面の崩落と考える。

SK-8 (挿図42・写真図版12、13)

伯楽塚16号墳の調査終了後、クロボク層を除去して検出した。B区のU43グリッドに位置し、検出面の標高は78.2mである。検出面、底面とも楕円形を呈しており、底面ビットをもつ。規模は検出面で長軸95cm、短軸75



挿図44 S1-1遺構図

cm、底面で長軸75cm、短軸55cmを測り、底面までの深さは約60cmである。底面ピットは径約20cm、深さ30cmを測る。埋土は4層に分層でき、自然堆積の様相が窺える。底面付近で30cm大の角礫を検出した。礫は大山系黒雲母石英安山岩（註6）で、中央が若干へこんでおり、砥石として使用した可能性もある。自然流入したのではなく、石製品として使用した後、杭の固定材として再利用したものと考える。

SK-9（挿図43・写真図版13）

B区の南隅、V44グリッドに位置する。やや西へ下るが、標高78.3mのほぼ平坦な地山に立地する。本遺構もSK-8と同様、伯楽塚16号墳の調査終了後、クロボク層を除去した後に出検した。検出面、底面ともいびつな円形を呈しており、検出面で長軸1.5m、短軸1.3m、底面で径約1.1m、深さ約1mを測る。埋土は17層からなり、自然堆積と考えるが、⑤層および⑩層は橙色系の地山土に近い色のブロックで、壁面の崩落と考える。

3 弥生時代～古墳時代前期の遺構

SI-1（挿図44、45・写真図版14、15、27）

位置 A区の中央、K12グリッドに位置し、標高73.0mの平坦面に立地する。遺構は、調査区外におよんでいるため、全体を検出できていない。

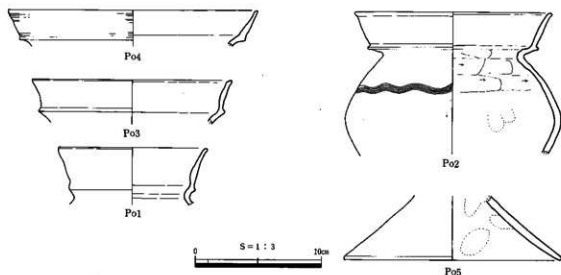
形態 平面形は隅丸の方形を呈すると思われる。検出できた規模は、東西約4.3m、南北約2.7mを測る。遺構は南側の残りが良く、壁高は、最も残存状態が良い南壁で55cmを測る。壁面沿いには、幅約20cm、深さ約6cmの側溝を持つ。

ピットは、6個検出した。P1、2は主柱穴と思われ、径約50cm、深さ65cmを測り、ほぼ同規模のものである。柱穴間距離は約1.5mである。P5は、中央ピットと思われ、径約55cm、深さ55cmを測る。

埋土 埋土は、23層に分けられる。①・②層は現代の耕作土である。埋土は、自然堆積したものである。

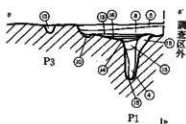
遺物 図化できた遺物はPo1～5である。Po1～4は壺の複合口縁部分である。Po2は比較的残存状態が良く、口縁部から胴部まで復元できた。口縁部下端は横に鋭く突出し、外面の肩部には波状文が施される。内面にはケズリ調整が見られる。Po4は口縁外面に平行沈線をナゲ消した痕が見られる。Po5は土師器で「ハ」の字状に開く器台の脚部と思われる。

時期 出土した土器および出土状況より、古墳時代前期と考える。

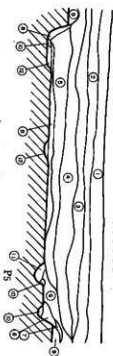
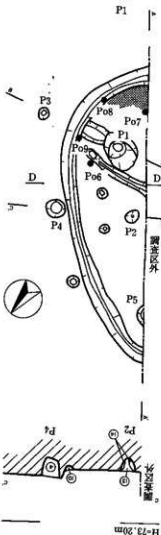
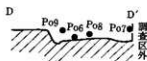


挿図45 SI-1出土遺物実測図

H-73.20m

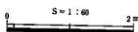


H-73.20m

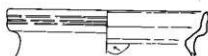


- H-73.20m
- ① 耕作土
 - ② 灰褐色土
 - ③ 黒灰褐色土
 - ④ 暗灰褐色土
 - ⑤ 赤褐色土 (暗黄褐色粘質土小ブロック多量混)
 - ⑥ 赤褐色土 (暗黄褐色粘質土小ブロック少量混)
 - ⑦ 暗赤褐色土
 - ⑧ 淡黒灰褐色土
 - ⑨ 淡黄褐色粘質土と暗灰褐色土の混合
 - ⑩ 灰褐色土と黄褐色粘質土の混合
 - ⑪ 黄褐色粘質土
 - ⑫ 黄褐色粘質土 (灰褐色土少量混)
 - ⑬ 灰褐色土 (黄褐色粘質土・暗褐色土少量混)
 - ⑭ 黄褐色粘質土と灰褐色粘質土の混合
 - ⑮ 暗灰褐色土と暗褐色粘質土の混合
 - ⑯ 黄褐色粘質土 (灰褐色土少量混)

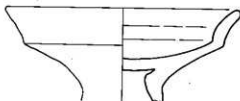
貼り床



挿図46 S1-2遺構図



Po7



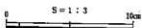
Po6



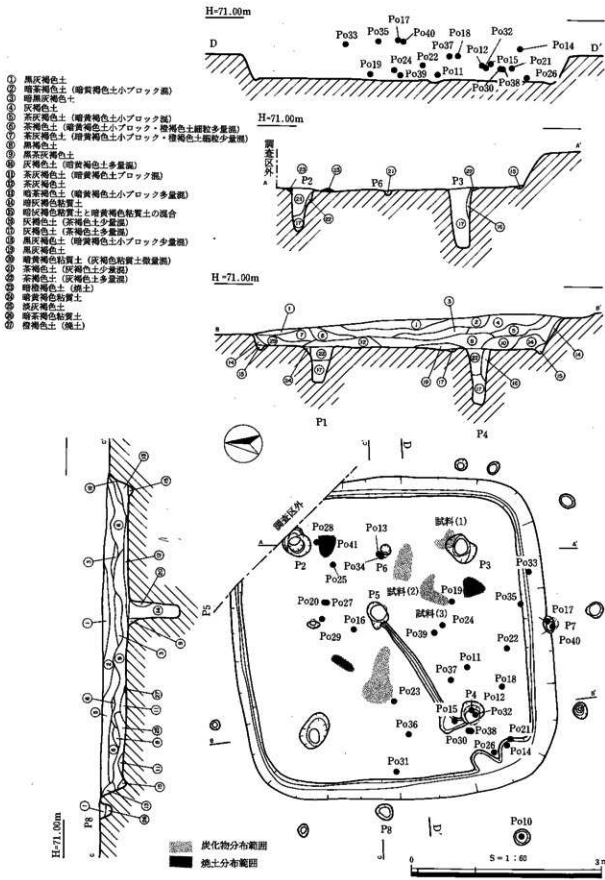
Po9



Po8



挿図47 S1-2出土遺物実測図



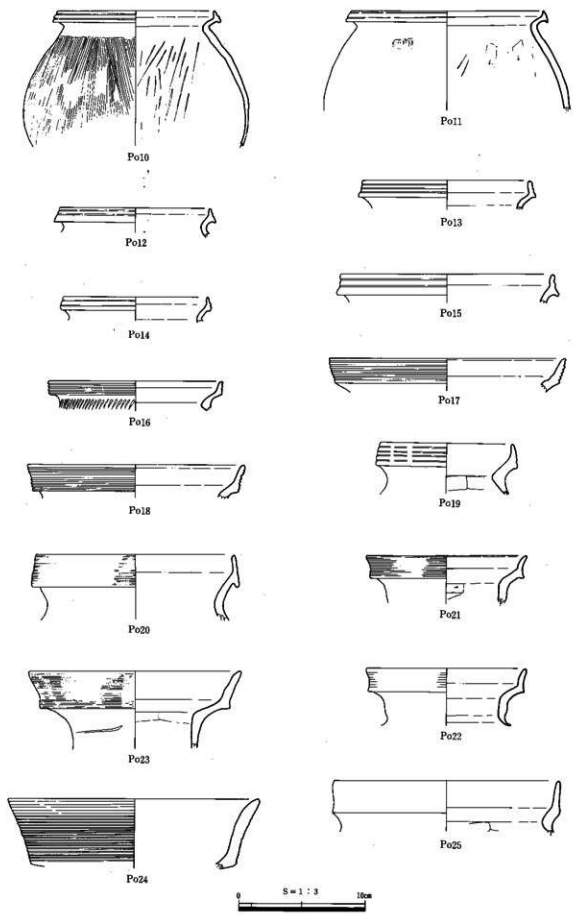


插图49 S1-3出土遗物实测图1

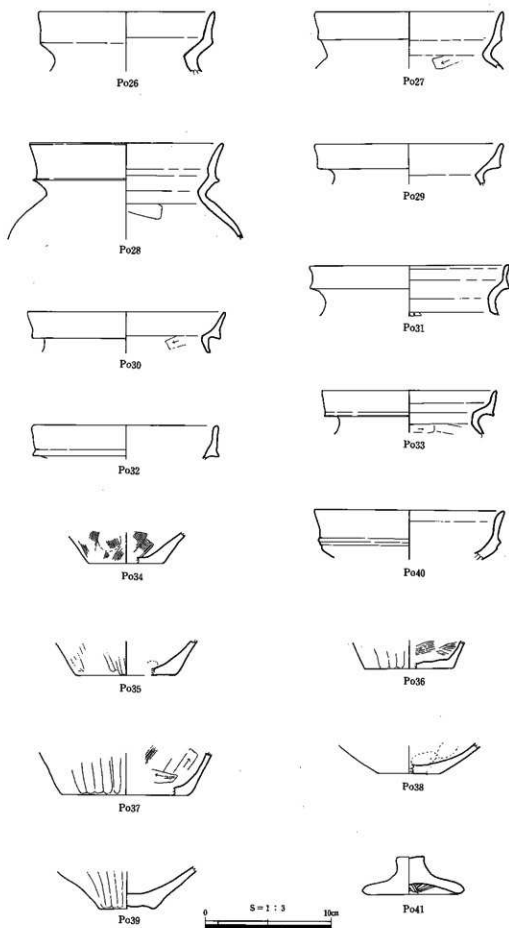
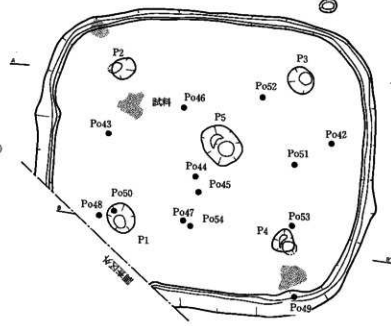
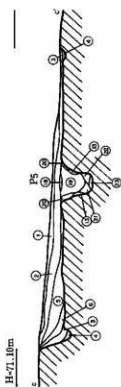
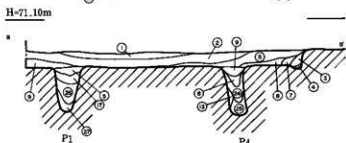
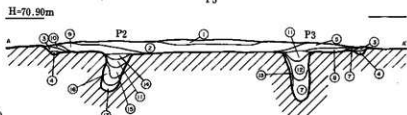
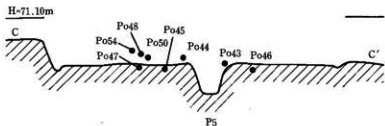


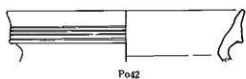
插图50 S1-3出土文物实测图2

- ① 黒灰褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ② 暗灰褐色土 (黄褐色土粒)
- ③ 暗灰黄褐色粘質土 (黄褐色土粒)
- ④ 灰黄褐色粘質土 (黄褐色土粒)
- ⑤ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒)
- ⑥ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑦ 黒灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑧ 灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑨ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑩ 灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑪ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑫ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑬ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑭ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑮ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑯ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑰ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑱ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑲ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ⑳ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉑ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉒ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉓ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉔ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉕ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉖ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉗ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉘ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉙ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉚ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉛ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉜ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉝ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉞ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉟ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊱ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊲ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊳ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊴ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊵ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊶ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊷ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊸ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊹ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊺ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊻ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊼ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊽ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊾ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㊿ 暗灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)

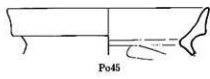


炭化物分布概図

挿図51 S I - 4 遺構図



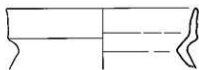
Po42



Po45



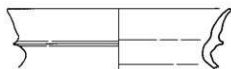
Po43



Po46



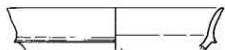
Po44



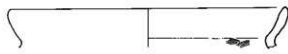
Po48



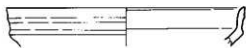
Po47



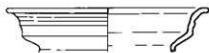
Po49



Po52



Po50



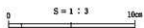
Po53



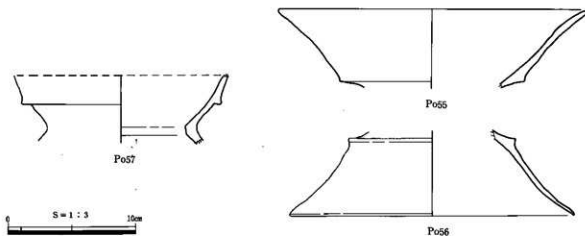
Po51



Po54



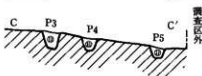
挿図52 S I - 4 出土遺物実測図



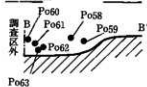
挿図54 S I - 5 出土遺物実測図

- ① 淡茶褐色土 (表土)
- ② 灰褐色粘質土と赤褐色茶褐色粘砂土の混合 (しまり強くかたい)
- ③ 黒灰褐色粘質土 (黄褐色茶褐色粘質土ブロック多量混)
- ④ 茶褐色土
- ⑤ 暗茶褐色土
- ⑥ 黒灰褐色土
- ⑦ 黒灰褐色土 (⑥よりやや黒み強し)
- ⑧ 黒灰褐色土
- ⑨ 黄褐色茶褐色粘質土 (黒灰褐色土混)
- ⑩ 黄褐色茶褐色粘質土と黒灰褐色土の混合
- ⑪ 黒灰茶褐色土

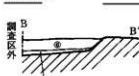
H-66.80m



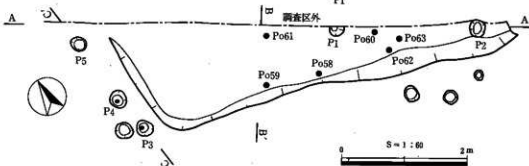
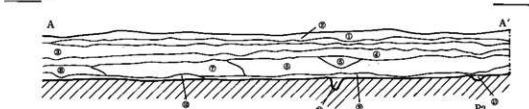
H-66.80m



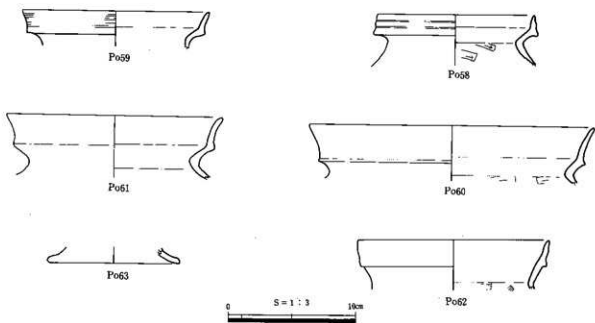
H-66.80m



H-67.20m



挿図55 S I - 6 遺構図



挿図56 S1-6出土遺物実測図

S1-2 (挿図46、47・写真図版14、15、27)

位置 A区の中央、K11グリッドに位置し、標高73.0mの平坦面に立地する。遺構は、調査区外におよんでいるため、全体を検出できていない。

形態 平面形は隅丸の方形を呈すると思われる。検出できた規模は、東西約1.5m、南北約4.5mを測る。壁高は、最も残存状態が良い南端部で約30cmを測る。壁面沿いには、幅約20cm、深さ約8cmの側溝を持つ。

ピットは、5個検出した。P1は支柱穴であり、径25cm、深さ65cmを測る。

床面で、溝を二つ検出した。一つは、幅約30cm、深さ約5cmでP1と側溝をつなぐように、もう一つは幅約18cm、深さ約8cmで側溝手前まで延びている。住居床面南端部では、貼り床が確認できた。

埋土 埋土は、16層に分けられる。①・②・③層は現代の耕作土である。P1内の④層(暗灰褐色土)は、柱痕と考える。貼り床の埋土は、⑩層(灰褐色土と黄褐色粘質土の混合土)と⑪層(灰褐色土が多量に混在した黄褐色粘質土)である。埋土は、自然堆積したものと思われる。

遺物 図化できた遺物はPo6～9である。Po6、8は土師器の高坏、Po7、9は壺の口縁部である。Po6は、器壁の厚いしっかりとしたつくりで、脚部内面には、一部しほり目も見られる。Po8は高坏脚部片である。Po7は、口縁外面に3条の凹線がうっすらと見えるが風化が著しい。Po9は「く」の字状に屈曲する口縁である。

時期 出土した土器および出土状況より、古墳時代前期と考える。

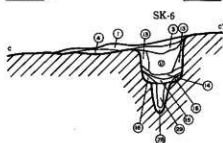
S1-3 (挿図48～50・写真図版15、16、27)

位置 A区の北側、H7グリッドに位置し、標高70.2～70.6mの、北に向かって緩やかに下る緩斜面に立地する。遺構の東端部分は、調査区外におよんでいる。

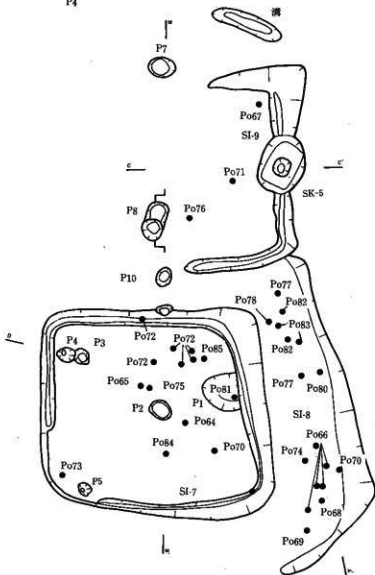
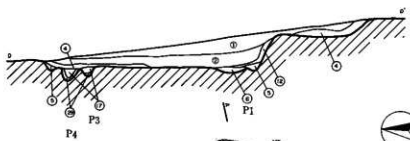
形態 平面形は隅丸の方形を呈する。規模は、東西5.1m、南北5.0mを測る。壁高は、最も残存状態が良い南端部で約60cmを測る。壁面沿いには、幅約15cm、深さ約8cmの側溝を持つ。

ピットは、7個検出した。支柱穴と思われるものはP1～4である。径40～60cm、深さ56～96cmを測る。P2、4は、やや傾いて穿たれている。P5は中央ピットであり、径約40cm、深さ約80cmを測る。

H-66.40m

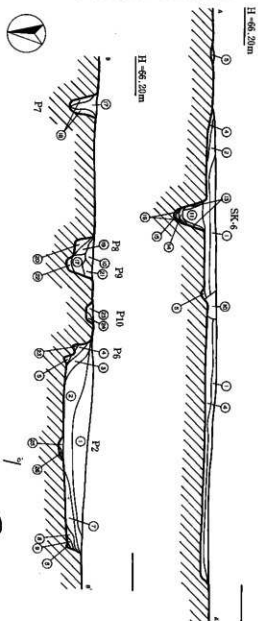


H-66.40m



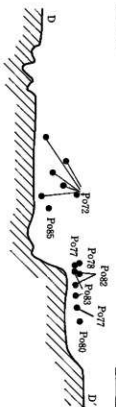
0 S=1:40 3m

- ① 黒褐色土
- ② 黒褐色粘質土 (黄褐色土粒微量)
- ③ 黒灰褐色粘質土 (黄褐色土粒微量)
- ④ 暗灰褐色粘質土 (黄褐色土粒)
- ⑤ 灰黄褐色土
- ⑥ 暗灰赤褐色土
- ⑦ 灰黄褐色粘質土 (黄褐色土粒少量)
- ⑧ 暗灰黄褐色粘質土 (黄褐色土粒少量)
- ⑨ 暗灰黄褐色粘質土 (黄褐色土粒)
- ⑩ 暗灰赤褐色土 (土中少量)
- ⑪ 黒灰赤土
- ⑫ 暗灰赤褐色土 (黄褐色土粒)
- ⑬ 灰褐色土 (黄褐色土粒)
- ⑭ 黒灰褐色粘質土
- ⑮ 灰赤褐色粘質土 (黄褐色土粒)
- ⑯ 黄灰褐色土
- ⑰ 黒灰赤土
- ⑱ 暗灰赤褐色粘質土中小ブロック少量
- ⑲ 灰黄褐色粘質土 (黄褐色土粒)
- ⑳ 灰黄褐色粘質土 (黄褐色土粒少量)
- ㉑ 暗灰赤褐色土 (黄褐色土粒微量)
- ㉒ 黄灰褐色土
- ㉓ 灰黄褐色粘質土
- ㉔ 暗灰赤褐色土 (灰黄褐色粘質土小ブロック)
- ㉕ 暗灰黄褐色粘質土 (暗灰赤褐色土小ブロック)
- ㉖ 灰黄褐色土 (黄褐色土粒少量)
- ㉗ 黄灰褐色粘質土 (暗灰赤褐色土小ブロック少量)
- ㉘ 灰黄褐色土
- ㉙ 灰赤褐色粘質土 (黒灰赤褐色土少量)



H-66.20m

H-66.40m



挿図57 SI-7・8・9 透視図

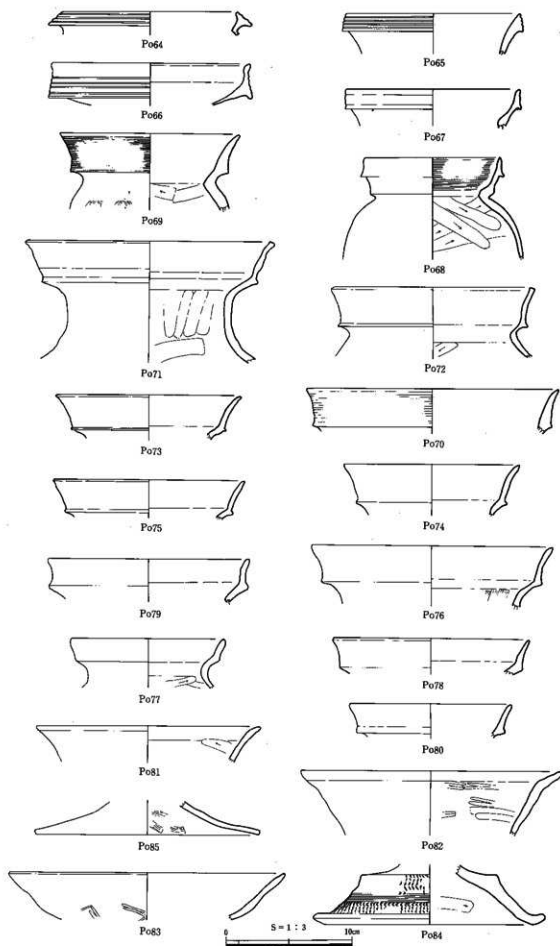


插图58 S1-7·8·9出土遗物实测图

床面西側で、P4とP5をつなぐ幅10~30cm、深さ約6cmの溝を検出した。床面では、4か所で炭化物、3か所で焼土を検出した。炭化物については、京都産業大学・山田治教授に、¹⁴C年代測定をお願いした。(第8章・考察「坂中第5遺跡の液体シンチレーション¹⁴C年代測定」参照)

埋土 埋土は、27層に分けられ、自然堆積したものと思われる。

遺物 図化できた遺物はPo10~41である。Po10~15は、弥生土器の壺である。内傾するくりあげ口縁に2~3条の凹線が施されている。比較的残存状態の良いPo10を見ると、口縁端部は上下に拡張され、外面には丁寧なハケメ調整が確認できる。Po16も弥生土器の壺口縁部である。口縁部には3条の凹線、頸部には、長さ1cm程度の距状工具による刺突穴がめぐる。Po17、18は、口縁が複合化する弥生土器の壺である。口縁外面にはそれぞれ6、7条の平行沈線を有する。Po19、20も口縁の複合化した弥生土器の壺であり、Po20は口縁端部の上下の拡張が著しい。Po21~23は、複合口縁を呈する弥生土器の壺である。口縁外面には、複数の平行沈線を施した後ナデ消した痕が見られ、口縁下端部はかるくつまみ出されている。Po24は壺の複合口縁であり、その器壁は厚く、外面に22条の平行沈線を有する。Po25~33は壺の複合口縁部片であるが、外面に沈線は施されない。口縁部下端が鋭く横に突出するものにPo28、下垂気味につまみだされたものにPo30~33が挙げられる。Po34~39は底部である。しっかりとした平底を呈するPo34~37は弥生土器壺の底部と思われる。Po38、39は底面積がわずかな平底で、壺の底部と思われる。外面にヘラミガキ調整が見られるものが多い。Po40は高環の段を有する皿部である。Po41は短いつまみを有する蓋である。内面には一部ミガキが見られる。

時期 出土した土器および出土状況より、古墳時代前期と考える。

S1-4 (挿図51、52・写真図版15、16、28)

位置 A区の北側、H7グリッドに位置し、標高70.1mの平坦面に立地する。遺構の南端部分は、調査区外にもおよんでいる。

形態 平面形は隅丸の方形を呈する。規模は、東西5.4m、南北4.7mを測る。壁高は、最も残存状態が良い南端部で約50cmを測る。壁面沿いには、幅約20cm、深さ約12cmの側溝を持つ。

ピットは、5個検出した。支柱穴と思われるものはP1~4である。径は、約40cm、深さ60~80cmを測る。P2、4は、やや傾いて穿たれている。P5は中央ピットであり、径約70cm、深さ約50cmを測る。

床面では、3か所で炭化物を検出した。これについては、京都産業大学・山田治教授に、¹⁴C年代測定をお願いした。(第8章・考察「坂中第5遺跡の液体シンチレーション¹⁴C年代測定」参照)

埋土 埋土は、27層に分けられ、自然堆積したものと思われる。

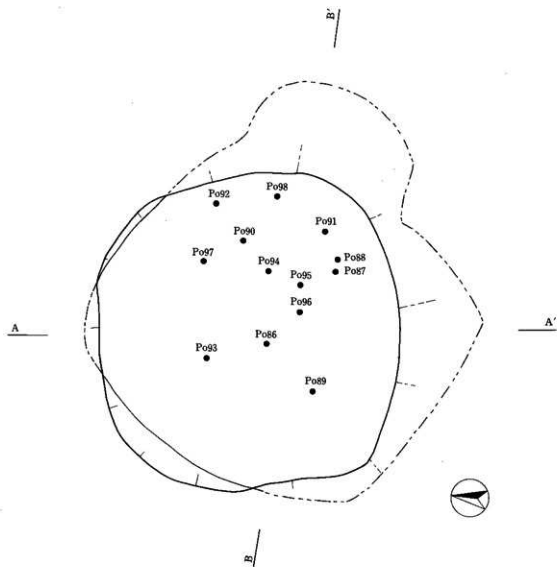
遺物 図化できた遺物はPo42~54である。Po42~50は壺の複合口縁である。Po42は口縁外面下部に4条の凹線が施されている。Po43は口縁の外面下部にわずかな凸線が見られる。Po42、43とも、口縁下端部はやや下垂している。Po48、49は口縁下端部が鋭く横につまみだされる。Po51は鉢および椀状の形態を持つ土器の口縁部と思われる。Po53は、形態的に見て高環の可能性が高い。段を有し、口縁先端は大きく外反している。Po54は「ハ」の字状に開く高環脚部である。

時期 出土した土器および出土状況より、古墳時代前期と考える。

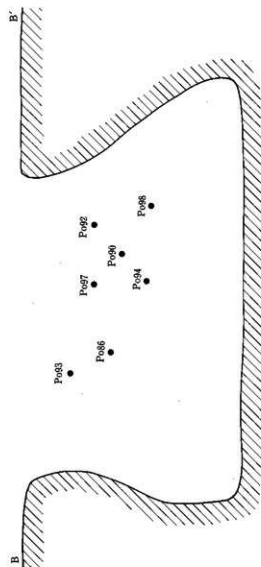
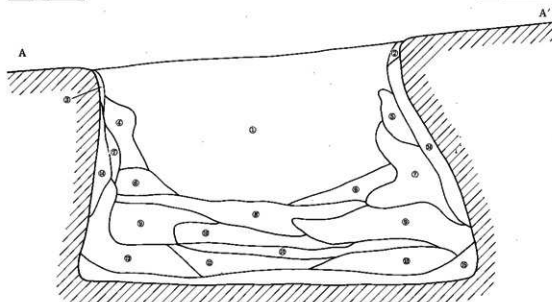
S1-5 (挿図53、54・写真図版16、17、28)

位置 A区の北側、F・G5グリッドに位置し、標高68.7mの平坦面に立地する。本遺構は、後世に擾乱を受けており、ピットと側溝のみの検出にとどまった。遺構の東端部分は、調査区外にもおよんでいる。

形態 平面形は多角形を呈する。径は、8.2mである。側溝は、幅15~30cm、深さ13~20cmを測り、北側でとぎれているが、本来は全体をめぐるとと思われる。



H=68.00m

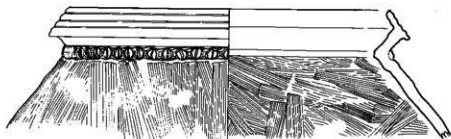


H=65.10m

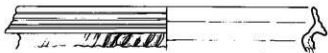
- ① 黒灰褐色粘質土
- ② 赤褐色土
- ③ 黒褐色土
- ④ 黒褐色粘質土 (暗黄褐色粘質土ブロック層)
- ⑤ 暗黄褐色粘質土
- ⑥ 黒灰褐色粘質土と暗黄褐色粘質土の混合
- ⑦ 暗黄褐色粘質土、黒灰褐色粘質土、暗黄褐色粘質土の混合
- ⑧ 暗黄褐色粘質土 (暗黄褐色粘質土層)
- ⑨ 暗黄褐色粘質土 (暗黄褐色粘質土少量層)
- ⑩ 淡黒灰褐色粘質土 (暗黄褐色粘質土小ブロック層)
- ⑪ 赤褐色粘質土
- ⑫ 赤褐色粘質土
- ⑬ 赤褐色粘質土と暗黄褐色粘質土の混合
- ⑭ 暗黄褐色粘質土
- ⑮ 淡黒褐色粘質土

S = 1 : 20

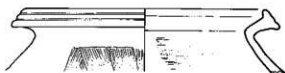
挿図59 SK-10遺構図



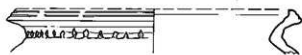
Po86



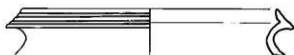
Po87



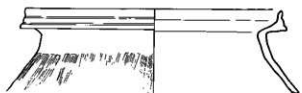
Po90



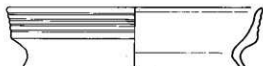
Po88



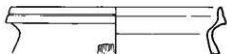
Po92



Po89



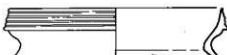
Po94



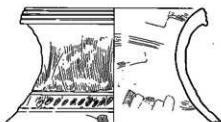
Po91



Po95



Po93



Po96



Po97



Po98

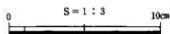
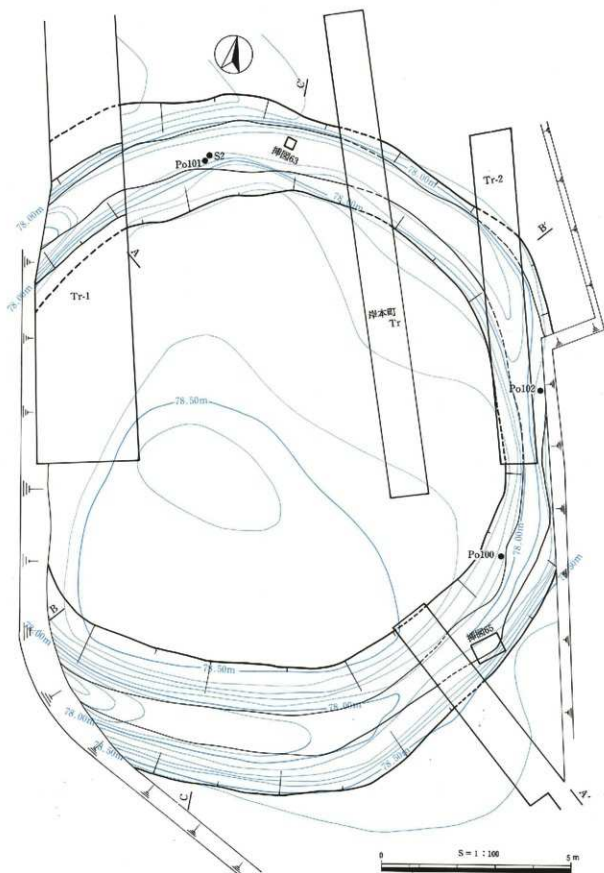
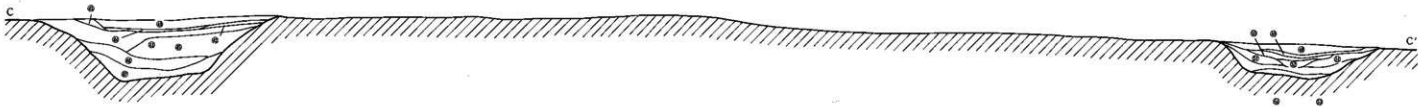


插图60 SK-10出土遗物实测图

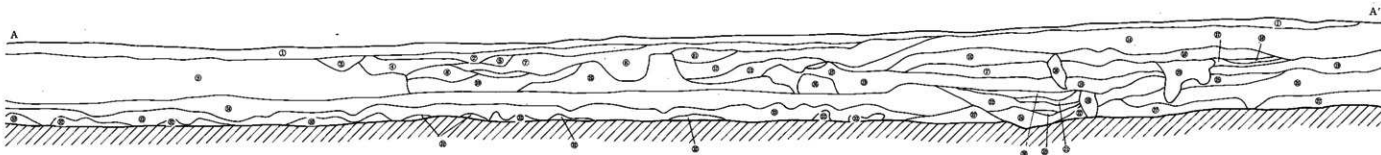


挿図61 伯楽塚16号墳遺構図

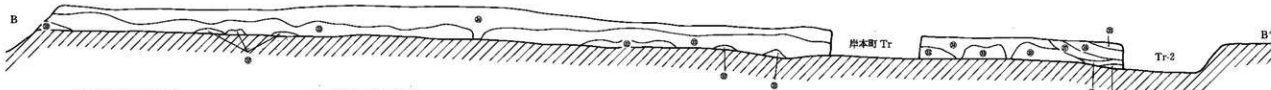
H=79.50m



H=89.00m



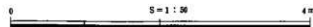
H=79.30m



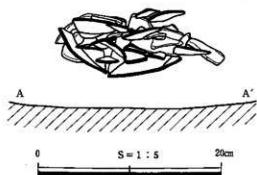
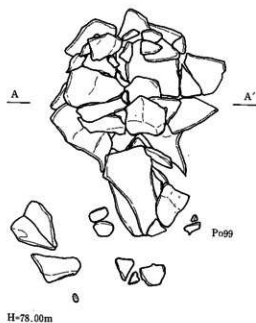
- ① 淡褐色土 (バラス類)
- ② 赤褐色粘質土 (暗褐色ブロック類)
- ③ 赤褐色粘質土
- ④ 暗褐色粘質土 (赤茶褐色土類)
- ⑤ 暗褐色粘質土 (赤褐色ブロック類)
- ⑥ 暗褐色粘質土 (赤茶褐色土類・4層より明るい)
- ⑦ 暗褐色粘質土 (赤茶褐色土類・4層より赤強い)
- ⑧ 暗褐色粘質土 (腐乱層)
- ⑨ 暗褐色粘質土 (赤褐色ブロック少量類)
- ⑩ 赤茶褐色粘質土・暗褐色土 (赤茶褐色土類) 混在
- ⑪ 暗褐色粘質土 (5層より赤強い)
- ⑫ 暗褐色粘質土
- ⑬ 暗褐色粘質土
- ⑭ 暗褐色粘質土 (2層より明るい)
- ⑮ 赤茶褐色粘質土 (2層より赤強い)
- ⑯ 赤茶褐色粘質土 (赤強い)

- ⑰ 黒褐色粘質土 (赤強い)
- ⑱ 黒褐色粘質土 (灰色強い)
- ⑲ 黒褐色粘質土 (2層より灰色強い)
- ⑳ 黒褐色粘質土 (茶色ブロック類・赤強い)
- ㉑ 黒褐色粘質土 (2層より暗い)
- ㉒ 赤茶褐色粘質土 (木の根による擾乱)
- ㉓ 赤茶褐色粘質土 (木の根による擾乱)
- ㉔ 赤茶褐色粘質土 (木の根による擾乱)
- ㉕ 赤茶褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㉖ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㉗ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㉘ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㉙ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㉚ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㉛ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㉜ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㉝ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㉞ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㉟ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊱ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊲ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊳ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊴ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊵ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊶ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊷ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊸ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊹ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊺ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊻ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊼ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊽ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊾ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)
- ㊿ 赤褐色粘質土 (赤褐色土上少量類)

- ㊿ 暗褐色粘質土 (砂質)
- ① 暗褐色粘質土 (暗褐色土上少量類)
- ② 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土少量類)
- ③ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ④ 暗褐色粘質土 (4層より赤強い)
- ⑤ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑥ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑦ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑧ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑨ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑩ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑪ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑫ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑬ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑭ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑮ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑯ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑰ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑱ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑲ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑳ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉑ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉒ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉓ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉔ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉕ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉖ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉗ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉘ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉙ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉚ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉛ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉜ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉝ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉞ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㉟ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊱ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊲ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊳ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊴ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊵ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊶ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊷ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊸ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊹ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊺ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊻ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊼ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊽ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊾ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ㊿ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)



挿図62 伯耆塚16号墳断面実測図



挿図63 伯耆塚16号古墳Po99出土状況

る。

S1-6 (挿図55、56・写真図版17、18、28)

位置 A区の北端部、C2グリッドに位置し、標高66.0~66.3mの、北に向かってわずかに下る緩斜面に立地する。遺構は、調査区外におよんでいる。

形態 平面形は方形を呈すると思われる。検出できた規模は、東西5.7m、南北2.1mを測る。壁高は、最も残存状態が良い南端部で約20cmを測る。

ピットを2個検出したが、主柱穴と思われるものは確認できなかった。また、側溝は確認できなかった。

埋土 埋土は、11層に分けられ、自然堆積したものである。

遺物 図化できた遺物はPo58~63である。Po58は弥生土器の甕である。内傾するくりあげ口縁の外面には2条の凹線が認められる。Po59は甕の複合口縁であり、外面に平行沈線を施したのちナデ消した痕が見られる。Po60、61も甕の複合口縁であり、Po60の口縁下端部は鋭く横に突出している。内面頸部には、わずかにケズリの痕が観察できる。Po63は高坏の脚部と思われる。

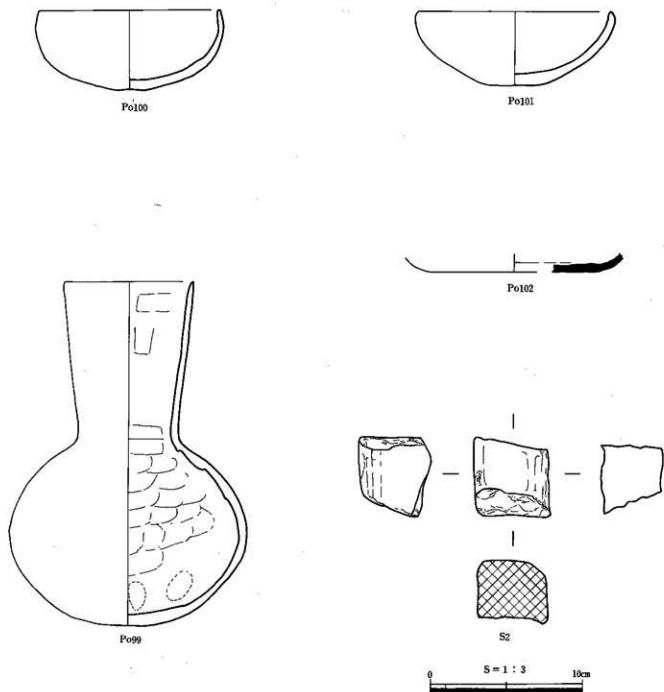
時期 出土した土器および出土状況より、古墳時代前期と考える。

ピットは、26個検出した。P1~7が主柱穴であり、調査区外にも主柱穴を1個持つと思われ、8個の主柱穴を持つ竪穴住居であったと考える。P1~7のそれぞれの径・深さは、P1-54cm・46cm、P2-54cm・66cm、P3-26cm・54cm、P4-40cm・49cm、P5-48cm・71cm、P6-36cm・58cm、P7-56cm・54cmを測る。柱穴間距離は、2.2~2.9mである。各主柱穴間には、径20~30cm、深さ30cm程度の柱穴を検出した。P2・P3の間には認められないため、P2・P3間に出入口があった可能性を考える。中央には、柱穴が5個(P8~12)認められる。P8~11は、径20~45cm、深さ53~70cmで、柱穴間距離は約1.7mである。P13は、中央ピットである。床面東側で、P13と側溝をつなぐ溝を検出した。幅10~30cm、深さ約10cmを測る。

埋土 埋土は、45層に分けられる。各主柱穴の埋土中には、柱痕が認められる。中央ピット・P13の埋土には、全体に地山土が混入している。また、住居内で最も規模が大きいP16の埋土は、地山土に黒灰色土が混入している土層である。これらのピットは、埋め戻したものと考える。

遺物 図化できた遺物はPo55~57である。Po55は器台上部、Po56は器台下部である。それぞれ、下端部、上端部は垂直気味になる。Po57は複合口縁の下部~頸部片であり、口縁下端部は横につまみだされる。

時期 出土した土器および出土状況より、古墳時代前期と考える。



挿図64 伯耆塚16号古墳出土土遺物実測図

S I - 7 (挿図57、58・写真図版17、18、28、29)

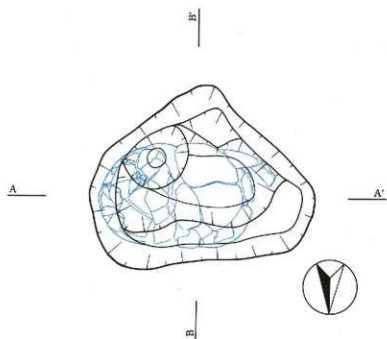
位置 A区の北端部、B1グリッドに位置し、標高65.2~65.6mの北に向かって緩やかに下る緩斜面に立地する。

形態 平面形は方形である。規模は、東西3.3m、南北3.7mを測る。壁高は、最も残存状態が良い南端部で約60cmを測る。壁面沿いには、幅10~20cm、深さ約8cmの側溝を持つが、北西の住居隅で完結している。

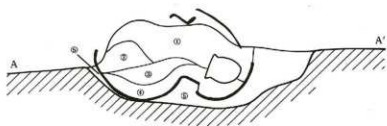
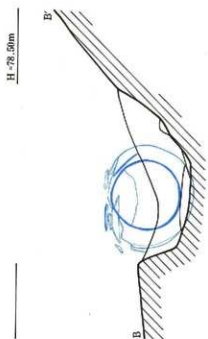
ピットは、5個検出した。主柱穴はP5、3と思われる。これらの径は22cm、30cm、深さは約20cmを測る。中央では、P2を検出した。

埋土 埋土は、15層に分けられ、自然堆積したものと思われる。

遺物 S I - 7、8は流失が激しく、それぞれの埋土は流れ込みによる自然堆積である。ここでは、S I -

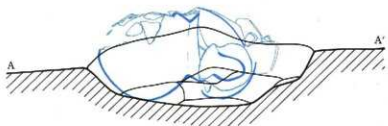


H-78.40m



H-78.40m

- ① 黄灰色黏質土
- ② 暗灰褐色黏質土
- ③ 暗灰褐色黏質土 (2層より暗い)
- ④ 暗灰色黏質土
- ⑤ 黒灰色粘質土 (1層より暗い)

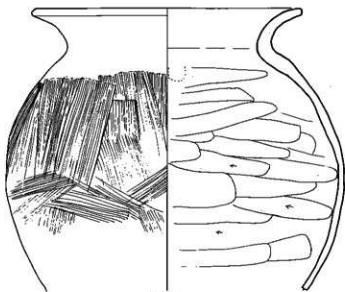


0 S = 1 : 10 50cm

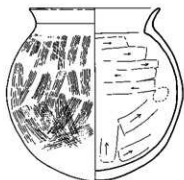
挿図65 SX-2 遺構図



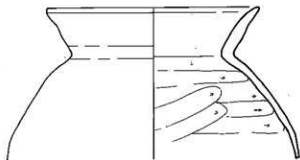
Po103



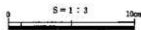
Po104



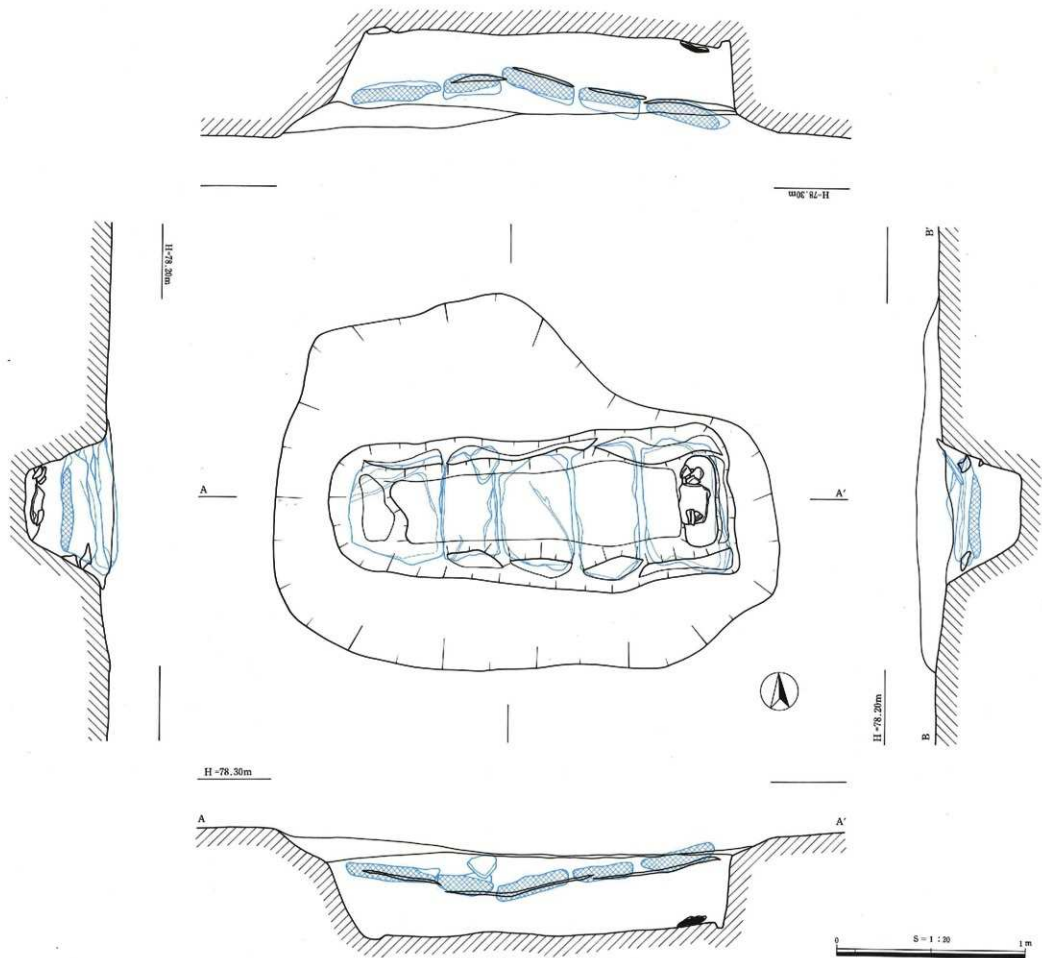
Po105



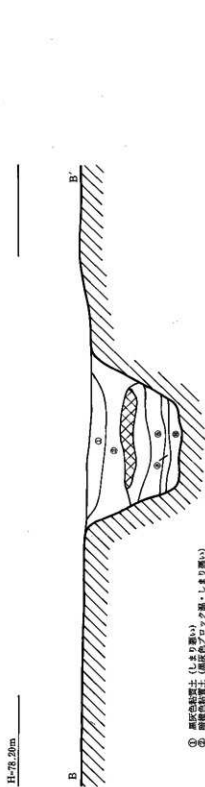
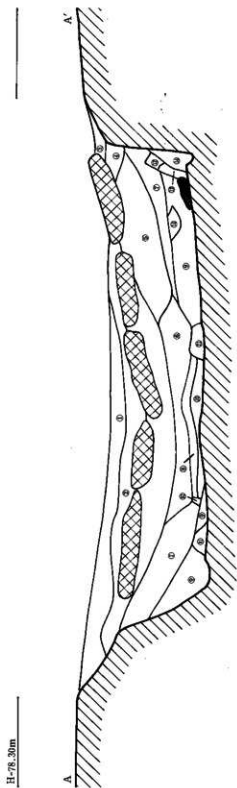
Po106



挿図66 SX-2 出土遺物実測図



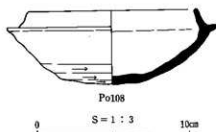
挿図67 S X-1 遺構図



- ① 黒色粘質土 (しまり悪い)
- ② 暗褐色粘質土 (黒褐色アロクサ土層、しまり悪い)
- ③ 暗褐色粘質土 (黒褐色粘質土少量層)
- ④ 暗褐色粘質土
- ⑤ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑥ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑦ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑧ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑨ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)
- ⑩ 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土)



挿図68 SX-1断面実測図



挿図69 S X-1 出土遺物実測図

7、8 出土遺物を一括して報告する。

図化できた遺物はPo64~85 (Po67、71、76を除く)である。Po64は弥生土器の甕である。上下に拡張されたりあげ口縁で、口縁外面には3条の凹線を有する。Po65も口縁外面に4条の凹線を持つもので、器形は壺と思われる。Po66は小型の器台の受け部と考えられる。口縁部は上下に拡張され、外面下部には4条の凹線がめぐる。Po68はやや特異な形態をしている。口縁部はわずかに内傾し、口縁下部は下垂気味に横方向へつまみだされる。口縁内面には横方向に細いハケメの痕が観察でき、また頸部から胴部の内面はケズリ調整が見られる。Po69、70は甕の複合口縁で、口縁外面は多数の平行沈線が施される。器壁は厚く、口縁先端部は鋭さをもつ。Po72は複合口縁を呈する甕である。口縁端部は平坦な面を持ち、下部はやや下方向へつまみだされている。内面は頸部以下にケズリが見られる。Po73~75、77~80も甕の複合口縁と思われ、下部部が横につまみだされる。Po82は器台の受け部と思われ、内面にミガキ痕が観察できる。Po83は皿状を呈する高坏の上部で、外面下部にミガキ痕が見られる。Po84は器台の脚部である。全体的に器壁は厚く、外面中段部に4条の凹線を有する。また、貝殻状工具による連続刺突文の装飾が施されている。Po83は高坏脚部と考えられる。

時期 出土した土器および出土状況より、古墳時代前期と考える。

S I-8 (挿図57、58・写真図版17、18、28、29)

位置 A区の北端部、B1グリッドに位置し、標高65.7mの、北に向かって緩やかに下る緩斜面に立地する。東側で、S I-9と切り合っている。

形態 北部は、流失しており、南壁と西壁の一部を検出した。平面形は方形と思われる。検出できた規模は、東西4.2m、南北2.0mを測る。壁高は、最も残存状態が良い南端部で約25cmを測る。側溝は、確認できなかった。

ピットは、1個(P10)検出した。

埋土 埋土は、2層に分けられ、自然堆積したものと思われる。

性格 S I-7、8の埋土中には、ともに④層(黄褐色土粒が混入した暗灰黄色粘質土)が見られる。S I-7、8は、同時に使用されていたことも考えられる。S I-8は、S I-7に付随する施設であった可能性も示唆しておく。

遺物 S I-7の遺物の項目で一括して報告している。

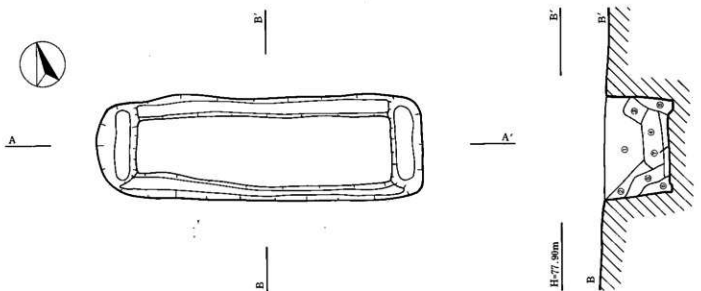
時期 出土した土器および出土状況より、古墳時代前期と考える。S I-8とS I-9の新旧関係は、切り合い関係より、S I-8の方が古いと判断した。

S I-9 (挿図57、58・写真図版17、18、28)

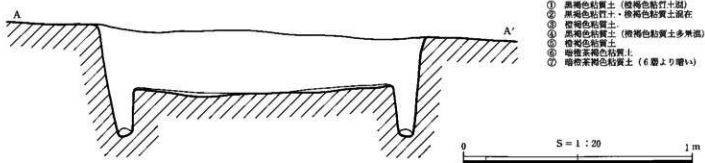
位置 A区の北端部、B1グリッドに位置し、標高65.6~65.8mの、北に向かって緩やかに下る緩斜面に立地する。西側で、S I-8と切り合っている。

形態 北部は、流失しており、南壁と、東壁、西壁の一部が検出できた。平面形は、方形を呈すると思われる。南壁中央では、S K-5を検出した。検出できた規模は、東西3.1m、南北2.4mを測る。壁高は、最も残存状態が良い南端部で約25cmを測る。側溝は、南壁と西壁沿いに確認できた。幅約10cm、深さ約6cmを測る。

ピットは、3個検出した。主柱穴は、P 7、9と考える。これらの径は30cm、38cm、深さは35cmを測る。



H=78.00m



- ① 黒褐色粘質土 (褐色粘質土層)
- ② 黒褐色粘質土 (褐色粘質土層)
- ③ 褐色粘質土
- ④ 褐色粘質土 (褐色粘質土多量混)
- ⑤ 褐色粘質土
- ⑥ 褐色粘質土
- ⑦ 褐色粘質土
- ⑧ 褐色粘質土 (6層より薄い)

挿図70 SX-3 遺構図

埋土 埋土は、4層に分けられ、自然堆積したものと思われる。

遺物 図化できた遺物はPo67、71、76である。Po71は複合口縁を呈する甕である。口縁端部は平坦な面を持ち、下端部は横方向へつまみだされている。内面は、頸部以下にケズリが見られる。Po76は甕の複合口縁と思われ、下端部が横につまみだされる。

時期 出土した土器および出土状況より、古墳時代前期と考える。

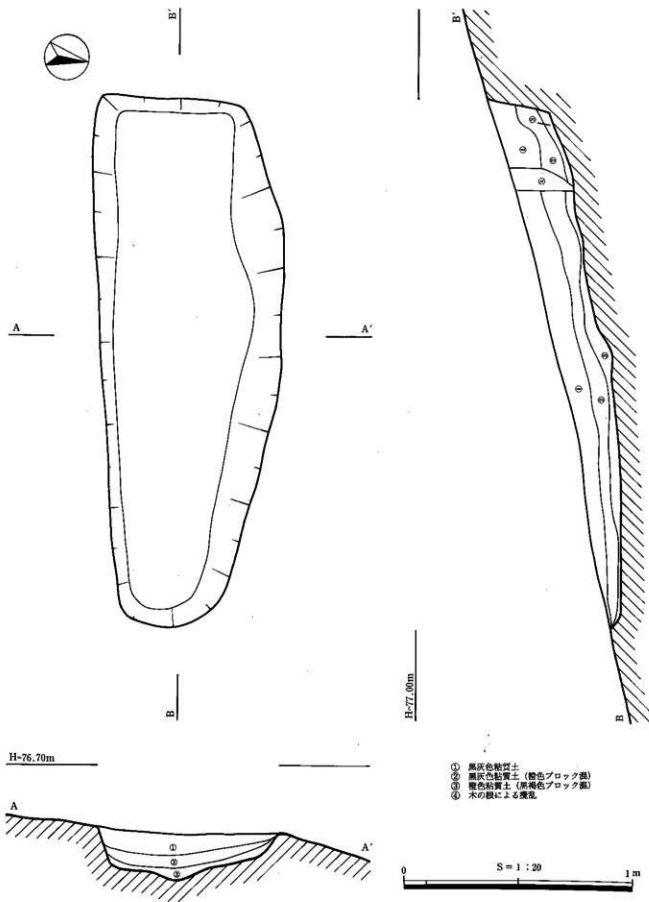
S K-10 (挿図59、60・写真図版18、29)

位置 A区の北側、B2グリッドに位置し、標高66.4mの平坦面に立地する。

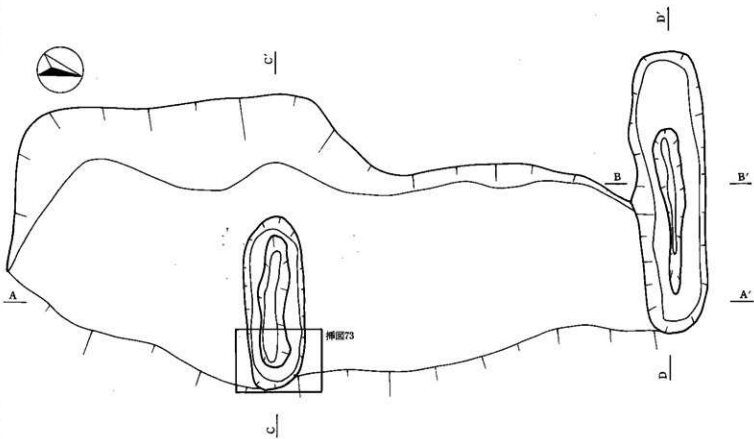
形態 平面形、底面形とも、いびつな円形を呈する。規模は、検出面で長軸180cm、短軸175cm、底面で長軸210cm、短軸183cm、深さ122cmを測る。断面形は、袋状を呈している。

埋土 埋土は15層に分けられ、上層を①層 (黒灰褐色粘質土) が占める。自然堆積したものと思われる。

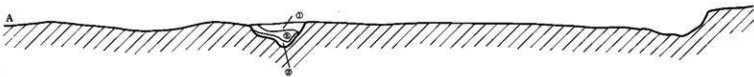
遺物 図化できた遺物はPo86~98である。Po86~88は弥生土器の甕である。内傾するくりあげ口縁で、端部は上下に拡張され、外面には3~4条の凹線を有する。また、頸部外面には貼付突起がめぐる。Po86は内外面ともハケメ調整が顕著である。Po89~95も弥生土器の甕である。その内、くりあげ口縁のPo90は頸部以下内外面のハケメが顕著である。Po94は口縁が複合化したものであるが、外面に4条の凹線が残る。複合口縁のPo95では、外面の凹線は見られない。Po96は弥生土器の甕である。やや内傾する口縁は3条の凹線がめぐり、下端部は下垂気味になる。外面はハケメが全体に観察でき、頸部には約1cmの間隔をおいて2条の平行凹線がめぐる。その凹線の間には、ハケメをなで消した上に刺突文が施されている。刺突文の内部にも斜め方向のハケメが見られる。Po98は、底部片で、外面にミガキ



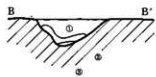
挿図71 SX-4 遺構図



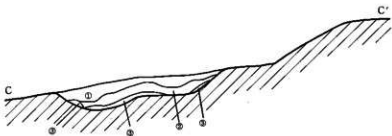
H-76.80m



H-76.90m

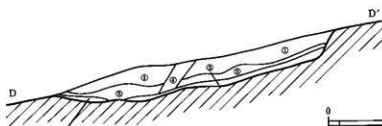


H-77.30m



- ① 暗灰茶褐色粘質土 (橙茶褐色粘質土少量混)
- ② 暗灰茶褐色粘質土 (橙茶褐色粘質土混)
- ③ 暗茶褐色粘質土 (暗灰茶褐色粘質土少量混)
- ④ 暗茶褐色粘質土 (暗灰茶褐色ブロック少量混)

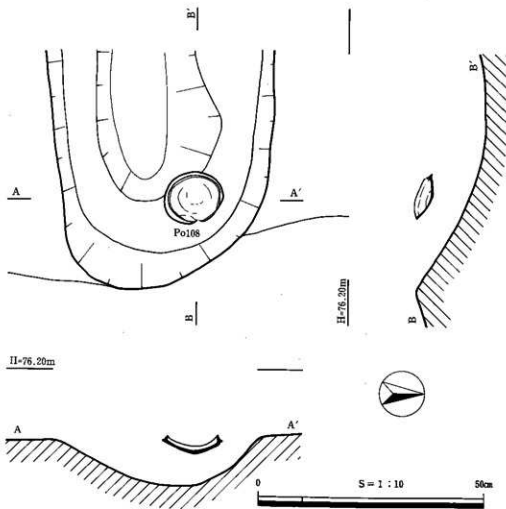
H-77.30m



S = 1 : 40

2m

挿図72 SX-5.6 SS-1遺構図



挿図73 SX-5 遺物検出状況

痕が見られる。

性格 本土坑は、貯蔵穴と考える。

時期 出土した土器および出土状況より、弥生時代中～後期と考える。

4 古墳 (挿図61～66・写真図版19～21、30)

伯楽塚16号墳 (挿図61～66・写真図版19～21、30)

・位置と現状

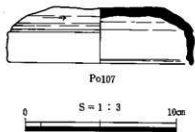
伯楽塚16号墳は、調査区の南に位置している。16号墳が立地する場所は、調査着手段階では平坦面となっており、古墳の存在は確認できなかった。遺構面確認のための試掘によって16号墳周溝が確認できた。

本調査区と接する伯楽塚古墳群が、周知の遺跡として知られているが、調査区の周辺は後世の削平や擾乱によって旧状を留めていない。現在確認されている伯楽塚古墳群は15基からなり、鳥取県埋蔵文化財センターが行った遺跡分布調査によると、15基の古墳はいずれも円墳で、現状での外部直径は8～14mとなっている。

・調査の経過と方法

まず、検出面確認のためのトレンチ (以下Tr-1) を調査区西側に設定し掘り下げた。表土下約1mで地山を掘り込んだ北東-南西に延びる溝状の掘り込みを検出したが、溝の延びる方向が不明なためTr-1を延長、さらにトレンチを2本 (以下Tr-2、Tr-3) を設定し掘り下げた。Tr-2では地山を掘り込む溝は検出できなかったが、Tr-3ではわずかながら地山を掘り込んだ溝が確認できた。Tr-1、3により、溝はほぼ全周する古墳の周溝と判断した。

各トレンチの土層断面の観察より、古墳はクロボク層を基底面として構築されていると考えられるが、後世の



挿図74 S X-5 出土遺物実測図

る。

・出土遺物

図化できたものにPo99~102、S 2がある。Po99は周溝北側の底面近くから出土した土師器の長頸甕である。検出状況から上部からの転落であると考え。Po100、101は土師器の椀である。それぞれ周溝南東部、北部からの床面直上で出土した。Po102は周溝埋土層より出土した須恵器坏身である。いずれも6世紀末~7世紀初頭の時期の特徴をもって、古墳の構築時期を示すものとする。

・土器棺 (挿図65~66・写真図版21、30)

周溝内南東隅で周溝内埋葬の土器棺(S X-2)を検出した。土器棺の肩が周溝底面より上位であるため、ある程度周溝内に土砂が堆積してから埋葬された可能性があり、本来の墓壇はさらに上位から掘り込まれていたと考えられる。土器棺の主軸はN-89°-Eをとり、ほぼ東西を向く。墓壇の平面形はいびつな円形を呈しており、長軸60cm、短軸45cmを測る。

土器棺は合計4個体(Po103~106)からなり、いずれも土師器の甕が使われている。本体はPo104で、口縁部を西に向けてほぼ水平に据えられている。本体に蓋をするように口縁部を合わせる形でPo105を据えている。底部を欠く破片Po103、106が、Po105の上下を挟むように本体と同じ方向に据えられていた。検出段階で、すでに本体胴部が破損しており、棺内には大量の土砂が流れ込んでいた。土器棺内で人骨、遺物の出土はみられなかった。

Po103、104は外反する「く」の字状口縁をもち、口縁端部を丸くおさめている。Po104の方が肩がはるが、どちらも胴部はほぼ球形をなしている。口頸部は内外面ともナデ、胴部外面はハケメ、内面はケズリを施している。Po105は小型の甕で、小型であることを除くとPo103、104と同じ形態、手法が施されている。Po106は口縁が外傾する「く」の字状口縁をもち、口縁端部を丸くおさめている。口頸部は内外面ともナデ、胴部外面は風化が激しく調整は不明、内面はケズリを施している。土器はいずれも古墳時代後期(6世紀末)と考えられ、土器棺の埋納時期を示すものとする。

蛍光X線による胎土分析によって、4個体の産地分けを試みた。Po103~105は同一の産地であるのに対し、Po106は別の産地であるとの分析結果を得た(註7)。

5 古墳時代の遺構 (挿図67~78・図版22~25、30)

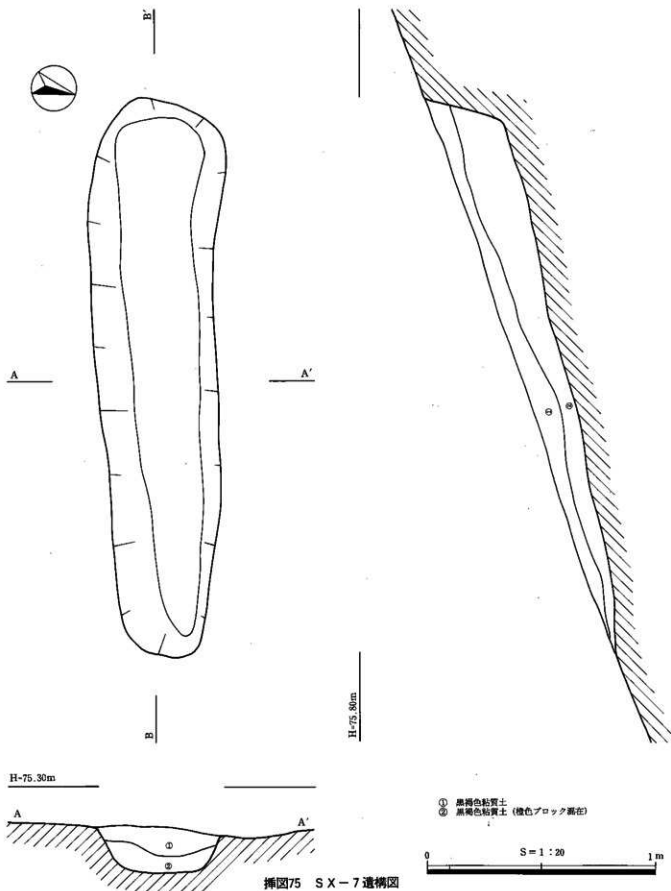
古墳時代の遺構として石蓋土壇墓(S X-1)1基、木棺墓(S X-3)1基、土壇墓7基(S X-4~10)を検出した。S X-1、5は遺物を伴っており、時期の特定が容易であったが、他の土壇墓とテラス状遺構からは遺物の出土をみないため、正確には古墳時代の遺構であるとは言い難い。しかし、S X-4、6、7はS X-5と形態、埋土が似ており、主軸方向もほぼ等しいことなどから、同時期に構築されたものと判断した。S X-3、8~10については、周辺の伯耆塚古墳群の存在や位置関係、周辺土壇墓の埋土、形態などから、古墳に伴う埋葬施設と判断した。

攪乱によって墳丘の大部分を削り取られ、その後クロボク層と非常によく似た黒色系の粘質土が堆積しているものと判断した。面的な古墳の検出には困惑したが、周溝埋土層の茶褐色系埋土を目安に重機によって表土を上部から少しずつ剥ぎ取る作業を行い、古墳の周溝を検出した。

・墳丘・周溝

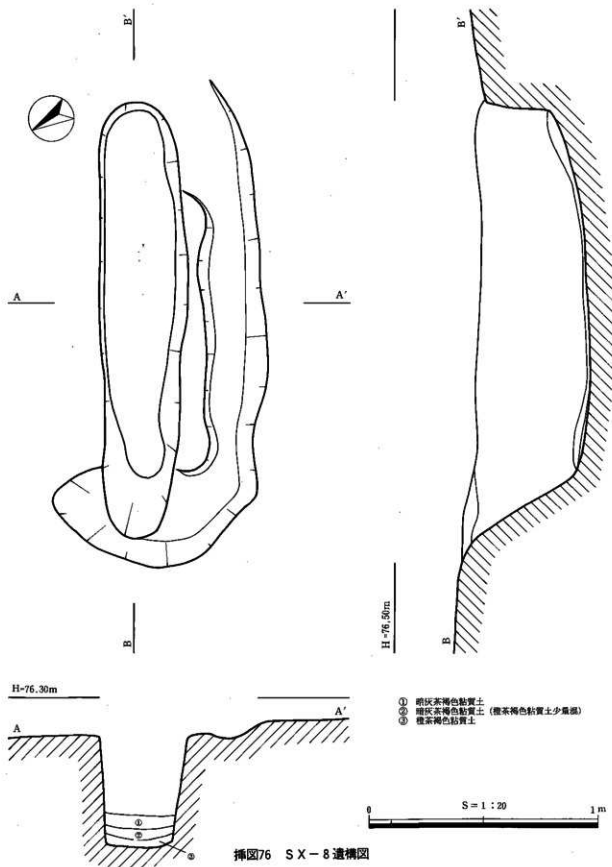
墳形は円墳であり、直径約13mを測る。

周溝は全周する様であるが、西側は調査区外のため不明である。周溝検出上部での南北の最大径は約19mを測る。幅は1.5~3.5m、検出面からの深さは、南西側で約1.1mと最も深く、北東側では約0.3mを測る。



SX-1 (揮図67~69・写真図版22、30)

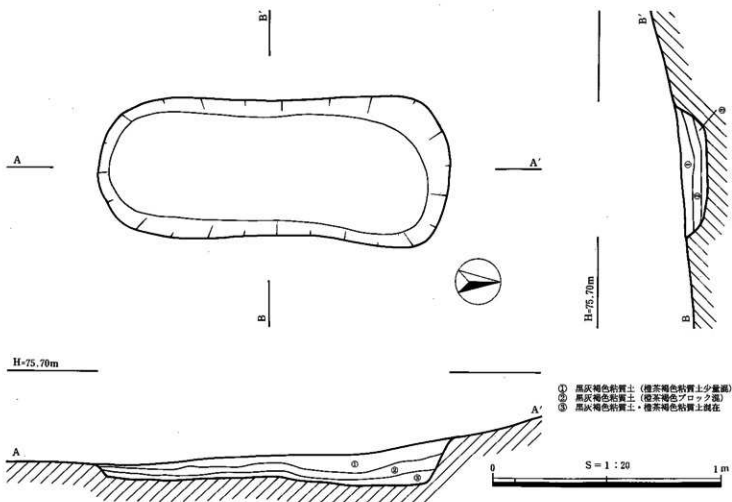
B区の南、T41グリッドに位置する。Tr-1掘り下げ時に検出した石蓋土墳墓である。墓域は東西2m、南北2.7mのいびつな四角形で、墓墳は墓域の中央部を掘り込んでいる。墓墳は、しまりの悪い黒灰色粘質土で覆われており、これを除去すると細粒閃緑岩(註8)の蓋石が5枚東西方向に並んで検出された。蓋石は土圧によって中央の石を中心に逆「へ」の字にへこんでおり、南北の壁面には蓋石が沈み込んだ跡と考えられる段が見ら



挿図76 SX-8遺構図

れた。蓋石の直下は空洞になっていた。墓墳の主軸方向はN-93°-Eをとり、ほぼ東西を向く。検出面で東西2.2m、南北0.7~0.8mのいびつな長方形を呈し、深さ約50cmを測る。底面は東西約1.5m、南北0.3~0.4mを測り、いびつな長方形を呈している。墓墳の断面形は逆台形状である。底面の東西壁際に小口穴と思われる掘り込みを有し、木棺墓の可能性を考えるが、側板に伴う溝は南北壁際には見当たらず、土層断面観察でも確認できなかった。

床面東側は一段高くなっており、細粒閃緑岩(註9)の角礫1個を検出した。枕と考える。よって、遺体の頭



挿図77 SX-9遺構図

位は東側となる。角縁の直上、および床面直上で須恵器坏蓋P○107を検出した。蛍光X線による胎土分析の結果によると、P○107は外来品であり、陶色産の可能性が指摘されている(註10)。P○107は陰田編年5期(註11)に並行するものと考えられ、遺構は古墳時代後期(6世紀末)の構築と考える。

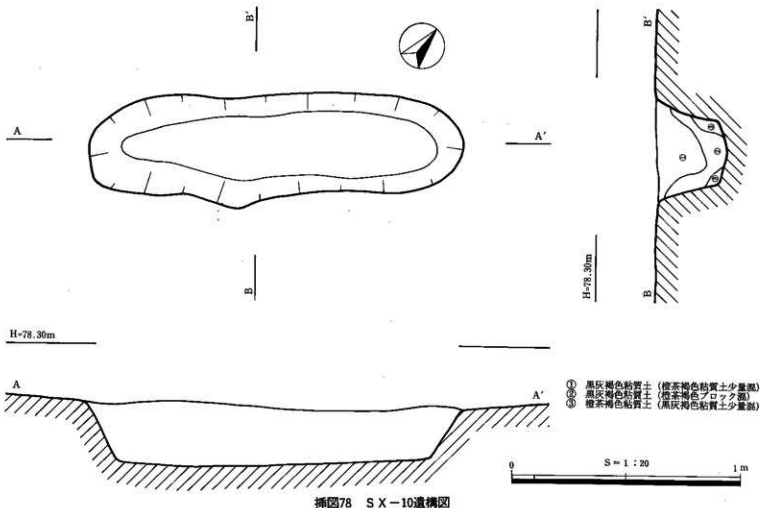
SX-3 (挿図70・写真図版23)

B区の南側、U42グリッドに位置している。南東に向かってなだらかに下る標高77.7mの台地上に立地している。検出面は長軸14.5m、短軸0.45mを測り、いびつな隅丸長方形で西側は丸くなる。底面は長軸1.1m、短軸0.3mを測り、長方形を呈している。深さは最大約0.3m、主軸方向はN-72°-Wである。遺構は木棺墓と考えられ、底面の南北壁際の小口穴と思われる掘り込みを有し、規模は検出面で長軸30cm前後、短軸10cm前後、深さ約20cm前後である。また南北壁際で幅4~8cm、深さ3~5cmの溝が認められ、側板に伴うものと考えられる。埋土は7層に分層でき、⑥層が側板の痕跡と考える。⑦層は比較的⑧層と似ており、底板の可能性が考えられる。埋土中に遺物がなく、構築時期を特定することはできない。

SX-4 (挿図71・写真図版24)

B区調査区中央やや南寄り、T~U39グリッドに位置する。北側にSX-5、6、SS-1がある。現況で北東に向かって下る斜面は、深さ約70cmの表土およびクロボクが堆積し、重機によって除去すると検出面である橙色系の地山が現れた。本遺構は地山を掘り込んで構築されており、斜面に対し直交するように立地する。検出面の標高は76.1~76.7mである。

検出面、底面ともいびつな隅丸長方形を呈しており、東へ向かって若干すぼまる。底面は東に向かってなだらかに傾斜する。規模は検出面で長軸約2.3m、短軸約0.8m、底面で長軸約2.2m、短軸約0.6mを測る。深さは西



挿図78 SX-10遺構図

側で最大約0.3mを測るが、東側ではわずか6cmである。東側は流失したものと考えられ、本来は東へなだらかに下る斜面上に構築された遺構と考える。主軸方向はN-85'-Eである。埋土は3層からなり、埋土中に遺物はなかった。

SX-5 (挿図72~74・写真図版24、30)

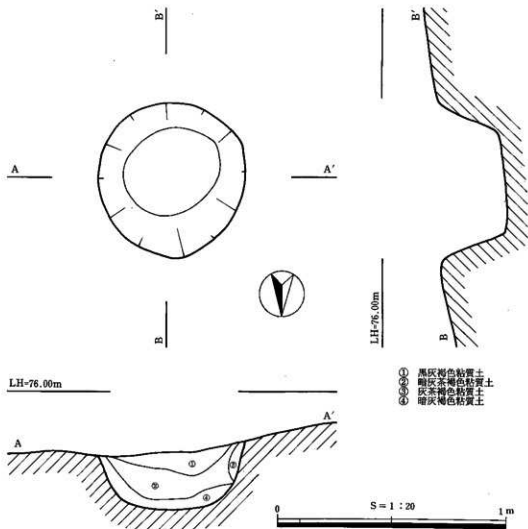
B区のほぼ中央、T39グリッドの東、SS-1の中に位置している。周辺にはSX-4、6が位置する。SS-1の埋土を除去した後に検出された遺構であり、SS-1構築以前の遺構と判断する。標高76.1~76.3mの比較的なだらかな斜面上に立地しているが、SS-1構築時に上面を削られていると考えられ、本来は、SX-4、6と同様に、東に向かって下る斜面に直交するように構築されていたものとする。

検出面、底面ともいびつな槽円形を呈しており、底面は多少凹凸があるが東へ向かってなだらかに下る。底面は細い溝状に掘り込まれている。規模は検出面で長軸1.5m、短軸0.5m、底面で長軸1.4m、短軸0.4m、深さは約0.25mを測る。底面の溝は長さ1.2m、幅0.25m、深さ0.1mを測る。主軸方向はN-74'-Eである。

埋土中より須恵器坏身P0108を検出した。上層からの出土のため遺構の構築時期を特定する試料ではないが、陰田編年の5期に並行するものとする。なお蛍光X線による胎土分析の結果によると、P0108は地元、島根県東部地域の製品である可能性が指摘されている(註12)。

SX-6 (挿図72・写真図版24)

B区のほぼ中央、T38グリッド南東に位置する。周辺にSX-5、7が位置し、南東側でSS-1と接している。遺構は標高76.0~76.7mの東に向かってなだらかに下る斜面上に立地し、斜面に対して直交するように構築



挿図79 SK-11遺構図

されている。検出面、底面ともいびつな長方形を呈しており、底面は東へ向かってなだらかに下る。底面はSX-5と同様に細い溝状に掘り込まれている。規模は検出面で長軸2.5m、短軸0.65m、底面で長軸2.3m、短軸0.4mを測る。深さは、西側で約0.3mを測るが、東側では検出面とほぼ一致する。底面の溝は長さ1.5m、幅0.2m、深さ約0.1mを測る。主軸方向はN-74°-Eで、SX-5と等しい。

SX-7 (挿図75・写真図版25)

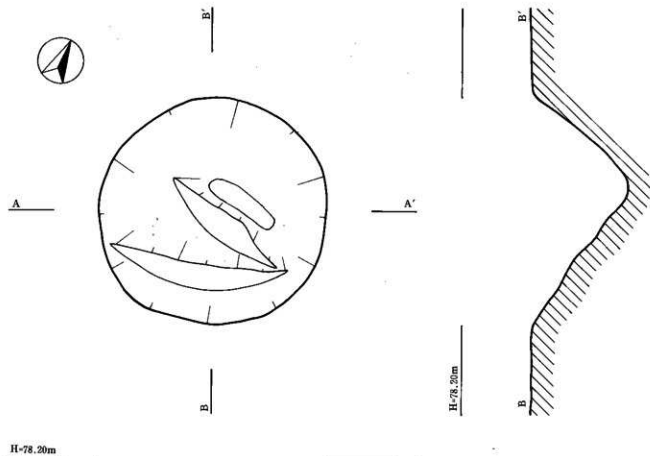
B区のほぼ中央、T-U38グリッドに位置する。本遺構が立地する、東に向かって下る斜面は現状でも確認できたが、重機によって深さ約1.5mのクロボク土を除去すると、検出面はさらに急峻になった。本遺構は斜面に対し直交するように構築されており、検出面の標高は74.7~75.5mである。

検出面、底面ともいびつな長方形を呈しており、底面は東に向かってなだらかに下る。規模は検出面で長軸約2.5m、短軸約0.5m、底面で長軸約2.3m、短軸約0.4mを測る。深さは西側で最大約0.4mを測るが、東側はほぼ検出面と一致する。主軸方向はN-85°-Eである。

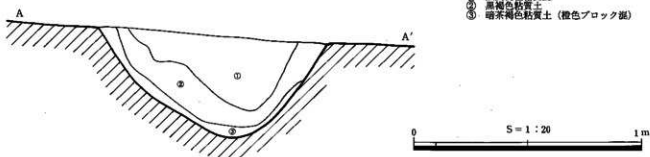
SX-8 (挿図76・写真図版25)

B区調査区中央やや北寄り、S36グリッドに位置している。北東に向かってやや下るが、標高76.1~76.2mのほぼ平坦な場所に立地している。検出面西側にのびている不定形な溝は後世の擾乱で、重機の爪痕に黒褐色系のしまりの悪い土が混入しており、当初、本遺構を擾乱と判断したため掘り過ぎてしまった。

遺構は検出面、底面ともいびつな楕円形を呈しており、規模は検出面で、長軸1.95m、短軸0.4m、底面で長



- ① 黒灰色粘質土
 ② 黒褐色粘質土
 ③ 暗茶褐色粘質土 (褐色ブロック凝)



挿図80 S K-12遺構図

軸1.6m、短軸0.3m、深さは北側で最大0.5mを測る。主軸方向はN-57°-Wをとる。

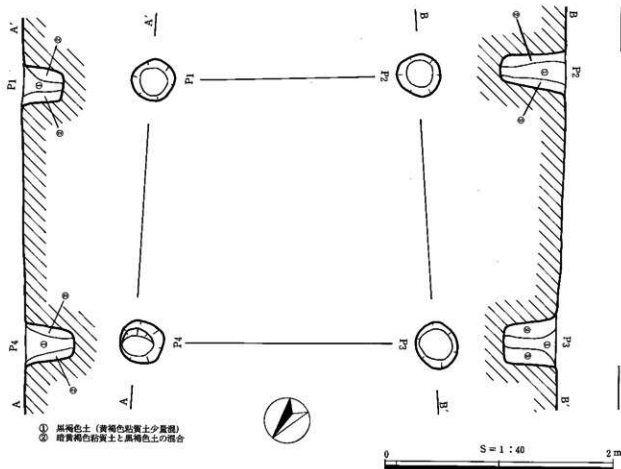
S X-9 (挿図77・写真図版25)

B区の中央、T36グリッドに位置する。現状ではゆるやかな斜面地であったが、表土を剥くと小さな尾根状の台地となった。検出面の標高は75.3~75.4mである。検出面、底面ともいびつな楕円形を呈しており、規模は検出面で長軸1.55m、短軸0.6m、底面で長軸1.4m、短軸0.45mを測る。深さは北側で最大約20cmを測る。主軸方向はN-1°-Wをとり、ほぼ南北を向く。

S X-10 (挿図78・写真図版25)

本遺構は伯耆塚16号墳の墳丘内に立地するが、遺構周辺は基盤層であるクロボクが攪乱によって後世に一度削平されており、これを除去した後に検出した土壌墓である。伯耆塚16号墳の埋葬施設であることも考えられるが、形態、埋土などが他の土壌墓と比較的似ていることより、本項で述べる。

遺構は調査区南側、T42グリッドに位置する。標高78mのほぼ平坦面に立地し、主軸方向はN-50°-Eであ



挿図81 SB-1遺構図

る。形態は検出面、底面ともいびつな楕円形を呈し、規模は検出面で長軸17m、短軸0.5m、底面で長軸1.4m、短軸0.3m、深さは0.3mを測る。

6 時期不明の遺構 (挿図79～82・写真図版26)

SK-11 (挿図79・写真図版26)

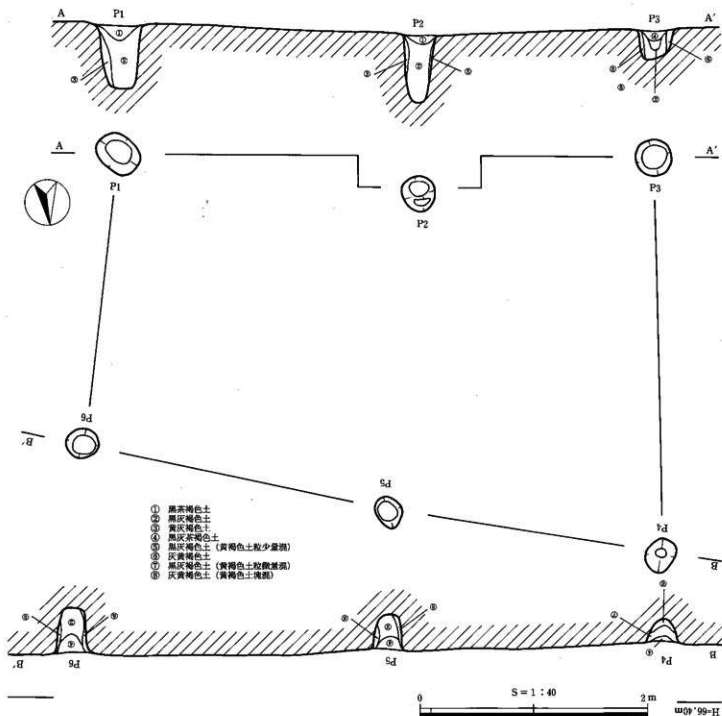
SK-11はB区の中央北寄り、S34グリッドに位置する。標高約76.8mの若干東へ下る台地上に立地している。周辺は地形が大幅に改変されているようで、周辺地山面のいたる所に後世の擾乱である重機の爪痕が見られた。形態は検出面、底面ともいびつな円形を呈しており、規模は検出面で径約60cm、底面で長軸約45cm、短軸約35cm、深さは約25cmを測る。埋土は黒褐色系の土を基本とし、しまりが悪い。性格は不明であり、埋土中に遺物もなく時期を特定することができない。

SK-12 (挿図80・写真図版26)

SK-12はB区の南、T41グリッドの南に位置する。周辺には北に石蓋土墳墓SX-1が、南には伯楽塚16号墳が位置している。Tr-1を掘り下げた時に、地山面より検出した土坑である。標高約78mのほぼ平坦な台地上に立地する。検出面は直径約1mのほぼ円形を呈しており、検出当初は落とし穴の可能性を考えたが、掘り下げると深さは約45cmを測り、断面は逆三角形となる。底面は長軸で約30cm、短軸約10cmの小さな楕円形を呈している。周辺から検出した落とし穴、SK-7～9の形態とは異なる。埋土も他の落とし穴とは異なり、黒灰色系のよくなった土であった。埋土中に遺物がみられなかったため時期を特定することはできず、性格も不明である。

SB-1 (挿図81・写真図版26)

A区の中央、N15グリッドに位置し、標高74.4mの調査地北端の平坦面に位置する。本遺構は調査区外におよぶ可能性がある。検出した規模は、梁行1間、桁行1間で、梁行長2.4m、桁行長2.6mを測る。主軸方向はN-



挿図82 SB-2 遺構図

52°-Eである。柱穴は、4個検出した。これらは径約40cm、深さ35~60cmを測る。埋土は2層に分けられる。それぞれのピットに共通してみられる①層（黄褐色粘質土が少量混在した黒褐色土）は、柱痕と考える。遺物は出土しなかった。

SB-2（挿図82・写真図版26）

A区の北端部、B2グリッドに位置し、標高65.9~66.3mの北に向かってなだらかに下る緩斜面に立地する。梁行1間、桁行2間で、梁行長2.4m、桁行長2.7~3.4mを測る。主軸方向はN-83°-Wである。柱穴は6個検出した。これらの径は約30cm、深さ20~60cmを測る。柱穴間距離は、P1-2から順に、2.3m、1.8m、3.1m、2.2m、2.5m、2.3mである。埋土は8層に分けられる。P4を除くピット埋土中に②層（黒灰褐色土）が見られる。これは柱痕と考える。遺物は出土しなかった。

SS-1 (挿図72・写真図版26)

B区のほぼ中央、T39グリッドの東に位置している。遺構中央にSX-5が位置し、北側にSX-6と接し切り合っている。東へ向かってなだらかに下る斜面上に立地しており、斜面を断面「L」字状にカットし、平坦面を造成している。床面はいびつな楕円形で東西約1.4m、南北約6mを測る。西側の壁は最大約40cmが遺存している。床面には柱穴や溝などは存在せず、テラス上に構築物の存在を示すものはなかった。埋土は、灰茶褐色のしまりの悪い土が単層で入り込んでいる。埋土中に遺物はなく、時期を特定することはできないが、切り合い関係よりSX-5、6より新しい。埋土の堆積状況から遺構というよりも、むしろ後世の擾乱の可能性を考える。

ピット (挿図33・写真図版26)

調査区のほぼ全域で約300基のピットを検出した。ピットは径10～20cm程度、深さは10～30cm程度の小さなものが大半を占めている。埋土は黒褐色系の粘質土でしまりは悪い。ピットの並び方には規則性は見られなかった。埋土中に遺物もなく、時期も不明である。

- 註1 「越敷山遺跡群」 1992 会見町教育委員会・岸本町教育委員会
- 註2 「青木遺跡Ⅲ」 1978 鳥取県教育委員会
- 註3 「泉中峰・泉前田遺跡」 1994 鳥取県教育文化財団
- 註4 本書「第7章 小町越城野原第2遺跡の調査」
- 註5 「尾高御建山遺跡・尾高古墳群」 1994 鳥取県教育文化財団
- 註6 石製品の花材については、鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご教示いただいた。
- 註7 三辻利一 「出土土器の蛍光X線分析」 (本書第8章第2節)
- 註8 前掲註5
- 註9 前掲註5
- 註10 前掲註6
- 註11 萩原勝・佐古和枝 「第4節；須恵器について」 『陰田』 1984 米子市教育委員会
- 註12 前掲註6

参考文献

- 「長者原遺跡群発掘調査報告書」 1984 岸本町教育委員会
- 「津寺遺跡2」 1995 岡山県古代古備文化財センター
- 「糸谷古墳群 第2次発掘調査概報」 1980 国府町教育委員会
- 「糸谷古墳群」 1994 同志社大学文学部文化学科内考古学研究室
- 「古海古墳群・葛蒲遺跡」 1993 鳥取市教育福祉振興会
- 「イザ原古墳群・小林古墳群」 1983 倉吉市教育委員会
- 「帝塚山考古学 No. 5」 1985 帝塚山考古学研究所
- 「研究輯録Ⅱ」 1992 広島県埋蔵文化財調査センター
- 「土下古墳群発掘調査報告書第1集」 1983 北条町教育委員会
- 「百塚遺跡群Ⅱ」 1993 淀江町教育委員会
- 「土下285号墳・286号墳発掘調査報告書」 1992 北条町教育委員会
- 「東宗像遺跡」 1985 鳥取県教育文化財団
- 「佐川遺跡」 1986 鳥取県教育文化財団
- 「大下畑遺跡」 1994 鳥取県教育文化財団

- 『マケン堀古墳群・北王寺遺跡』 1990 西伯町教育委員会
- 『宇野3～9号墳』 1991 鳥取県教育文化財団
- 『面影山古墳群発掘調査報告書』 1996 鳥取市教育福祉振興会
- 『陰田遺跡群』 1996 鳥取県教育文化財団
- 『岩吉遺跡Ⅲ』 1991 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団
- 『上種第5遺跡発掘調査報告書』 1985 大栄町教育委員会
- 『丸山遺跡発掘調査報告書』 1984 三期町教育委員会・花園大学考古学研究室

第5章 坂長佛谷遺跡の調査

第1節 位置と環境 (挿図83、84・写真図版31)

坂長佛谷遺跡は岸本町坂長字佛谷に所在し、標高226mの越敷山山頂より北へ約1kmに位置する。越敷山から北に向かって派生する尾根は、深い谷を形成し2本に別れる。本遺跡はその谷の東側、急峻な斜面に立地している。谷下には熊ノ谷池(くまんだにいけ=通称)があり、越敷山からの湧水が谷を通り、池に流れ込んでいる。

遺跡は119基からなる越敷山古墳群の中にあり、本遺跡の位置する斜面の上方である尾根上には越敷山57~64号墳が存在し、北へ約300mのところには坂中第5遺跡(本書第4章)が、南へ約400mに小町越城野原第2遺跡(本書第7章)が位置する。

東西約25m、南北約220mの狭長な調査区は、現況で標高78.0~97.5m、検出面で77.0~97.0mである。

第2節 調査の経過と方法 (挿図83、84)

坂長佛谷遺跡の調査は、平成8年4月より着手、8月まで現場作業を実施した。調査地内は、事前に岸本町教育委員会によって試掘調査が行われており、遺構、遺物の検出状況と現地地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査面積は約3,700m²であった。

調査地は南北に狭長で、東西は急峻な斜面である。調査着手段階では、調査区の中央付近の傾斜がゆるやかな場所に住居や掘立柱建物等、構築物跡の存在が想定された。

岸本町教育委員会の事前の試掘調査によって、表土下にクロボク層を挟んで地山面が確認されており、地山面を遺構面として、表土およびクロボク層をすべて重機によって除去することにした。斜面が急峻なため、重機の動きが制約され、表土剥ぎは困難であった。また、地山面の土色および土質は場所によってさまざまに変化しており、遺構面の検出には困惑した。表土を剥ぐと斜面はさらに急峻になり、所々で小さな谷地形がみられた。表土を剥いだ後、人力によって精査、掘り下げを行い、調査区内の2ヶ所で集中するピット群を確認し、所々で遺物を検出した。必要に応じて、遺物の出土状況の写真撮影、実測、取り上げを行った。検出した遺構についてはそれぞれ写真撮影、実測を行った。8月初旬にラジコンヘリコプターによる全体空中写真撮影を行い調査を終了した。

第3節 遺構と遺物 (挿図84~98・写真図版32~36)

1 概要 (挿図84~98・写真図版32~36)

本調査地内で検出した遺構は、総数518基のピットである。ピットは大きく3ヶ所に別れて集中しており、このうち中央にあるものと、南側にあるものについてはそれぞれピット群1、ピット群2とした。北方で検出したピットについては、ピット群1および2と比べると、①立地する斜面が急峻である、②ピットの規模が小さい、③埋土のしまりが悪い、④ピット間距離がまちまちで距離がありすぎる、など遺構というよりもむしろ木の根痕と判断する。

ピット群1、2は、比較的斜面が緩やかになった場所に立地している。ピット群1ではB-C-5~9グリッド内に約300基のピットが広がっており、その中に掘立柱建物跡を9棟(SB-1~9)検出した。

ピット群2ではA-C-11~13グリッド内に約150基のピットが広がっており、その中に掘立柱建物跡5棟(SB-10~14)を検出した。SB-13は溝を伴った掘立柱建物である。

本遺跡で調査中より掘立柱建物跡と考えられたものはピット群2のSB-10、13のみであり、他は調査終了

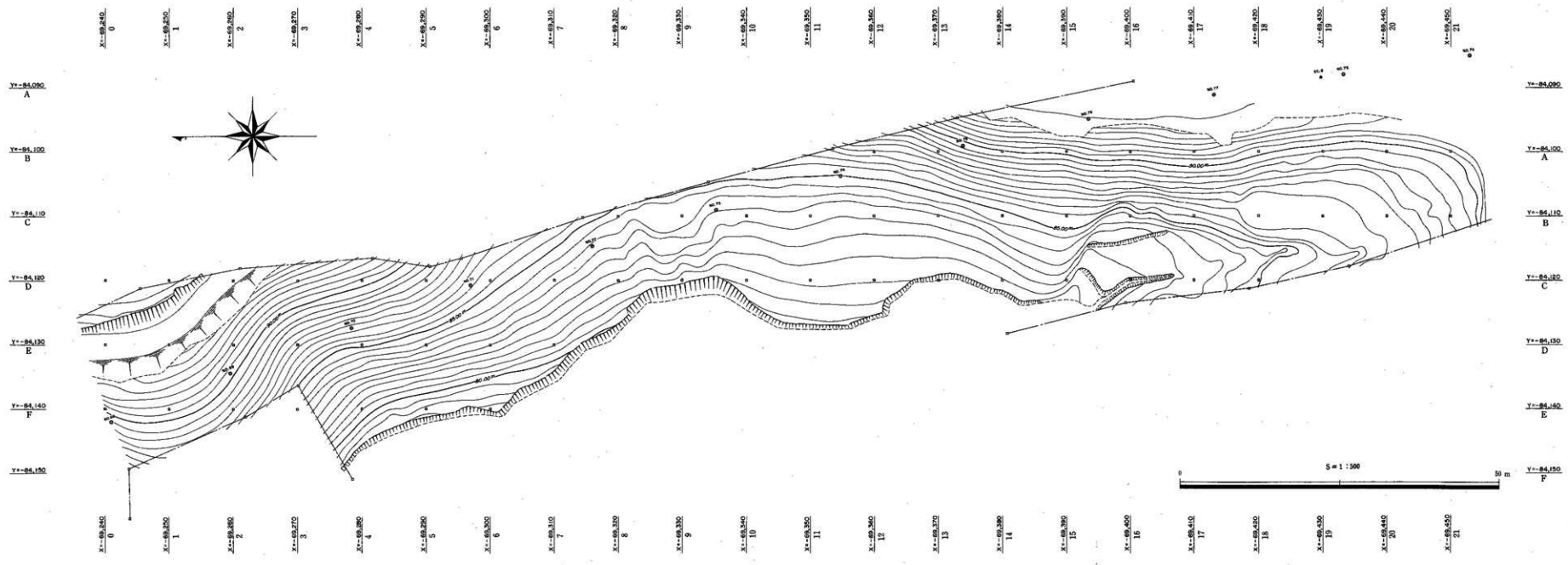
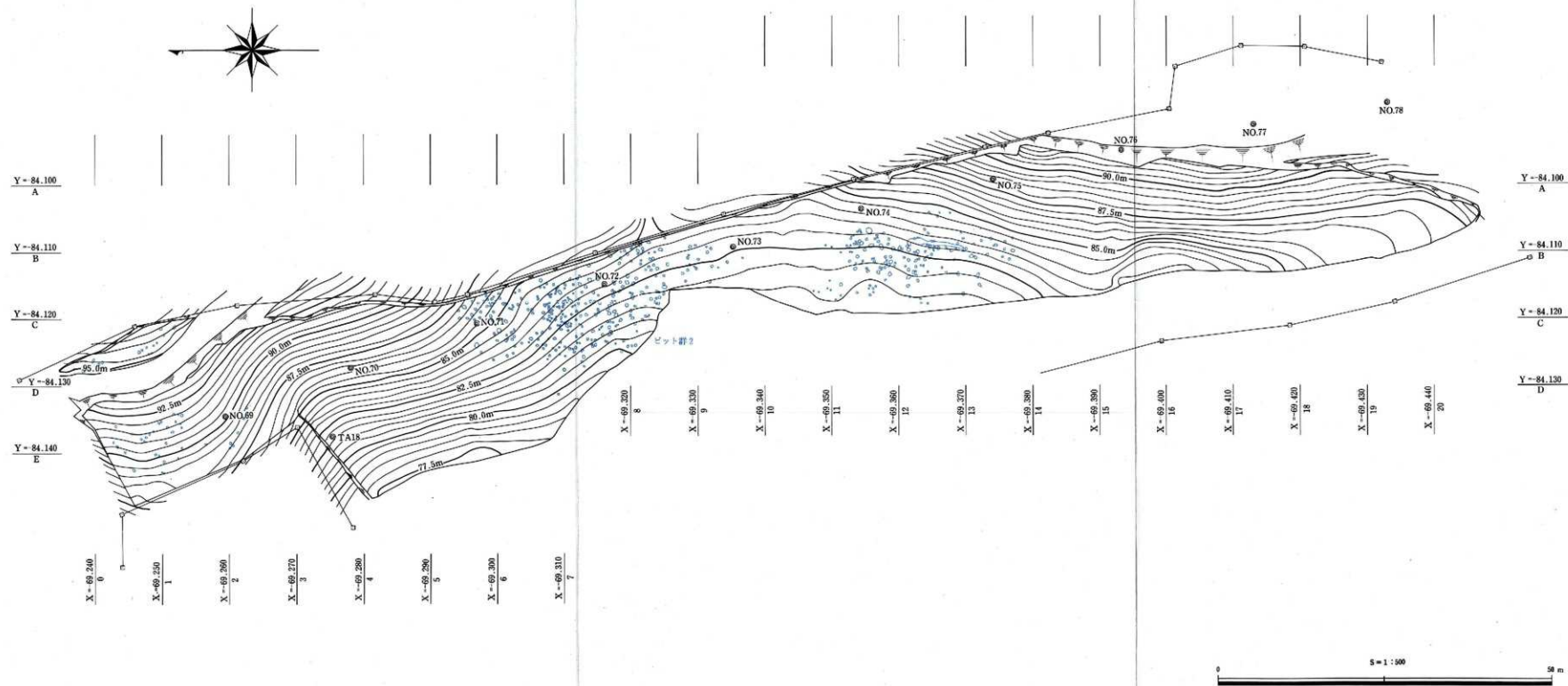
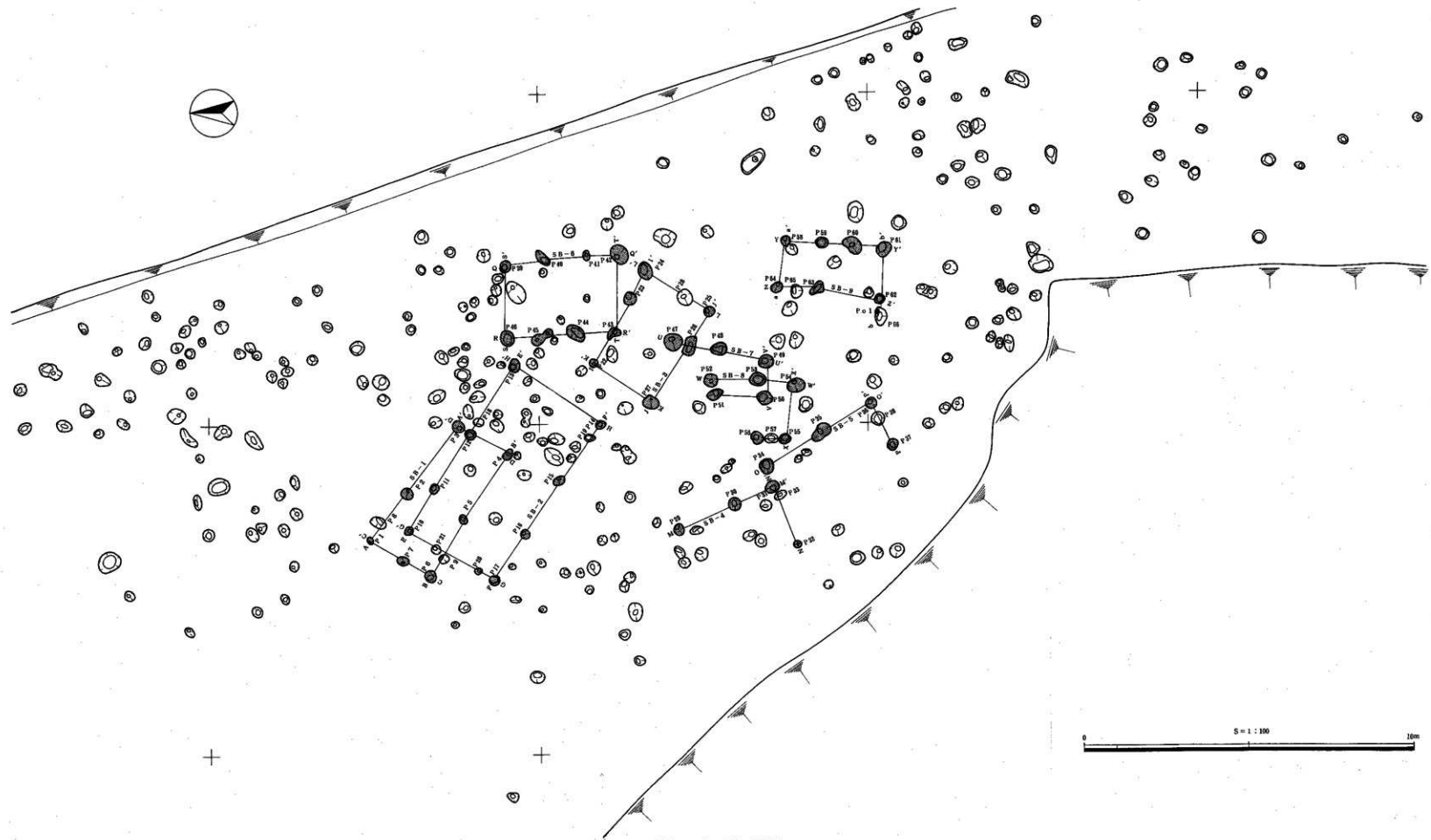


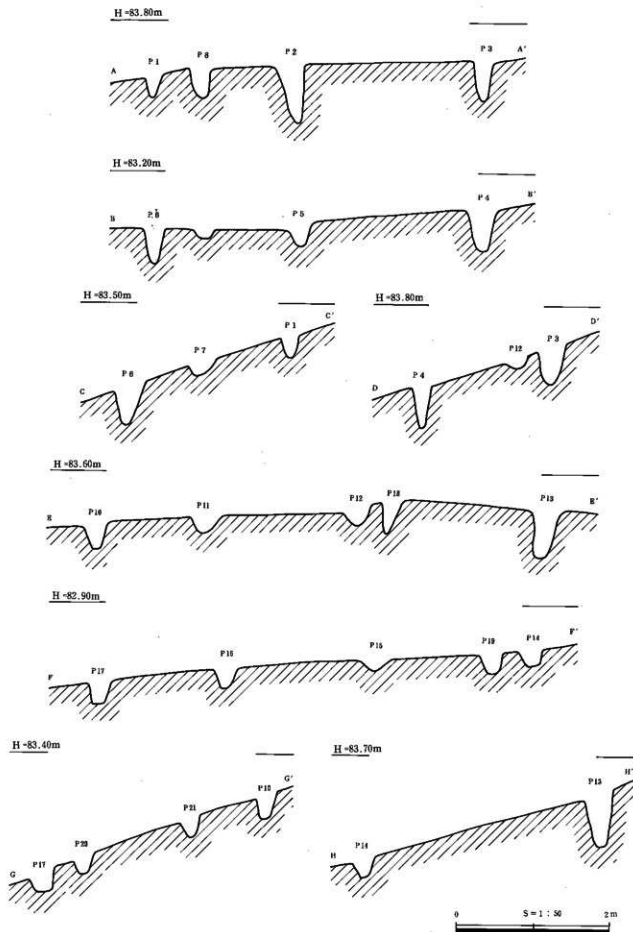
插图83 板长佛谷道勘测前地形测量图



挿図84 板長佛谷遺跡全体遺構実測図

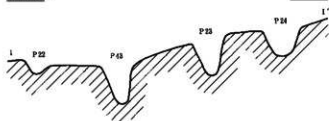


押図85 ピット群1遺構図

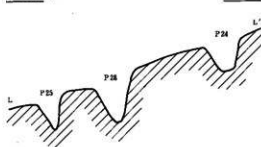


挿図86 ビット群1SB-1・2断面図

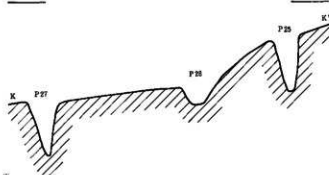
H = 83.80m



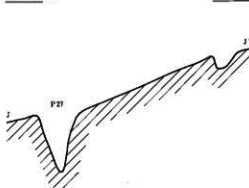
H = 84.00m



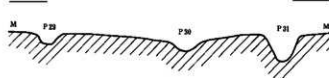
H = 83.50m



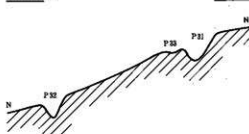
H = 83.70m



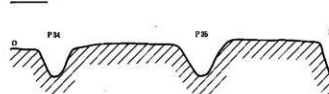
H = 81.50m



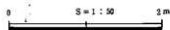
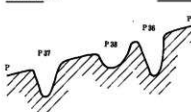
H = 81.50m



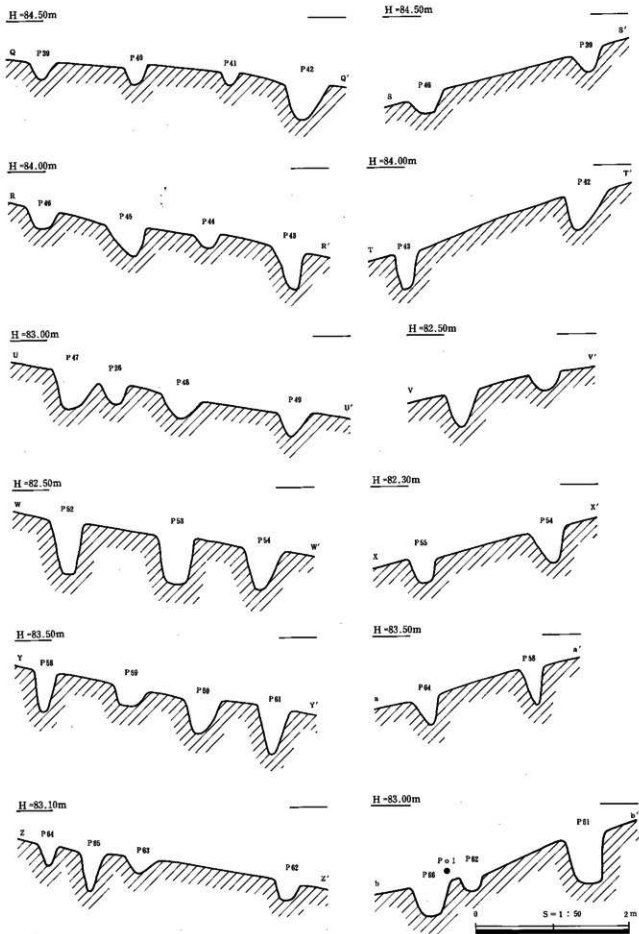
H = 81.80m



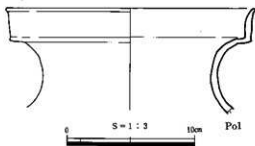
H = 81.80m



挿図87 ビット1 SB-3~5断面図



挿図88 ビット1 SB-6~9断面図



挿図89 ビット群1出土遺物実測図

後、図面をもとに検討し掘立柱建物跡としたものである。

2 ビット群1

(挿図85～89・写真図版32、33)

ビット群1では、東西16m、南北40mの範囲内に合計314基のビットを検出した。現状で標高80～87m、検出面で標高79～85mの急峻な斜面に立地する。各ビットはそれぞれいびつな円形を呈し、規模は径10～80cm、深さ10～70cmとまちまちである。埋土は黒褐色系の土が堆積しており、いずれも単層で柱底をもつビットはなかった。また、しまりの悪い埋土を持つビットも多くあり、前述のように、すべてのビットを人為的に穿った遺構と判断することはできないが、遺構の可能性も否定できないため、すべてを実測し掲載した。

以下、検出したビットの中から平面実測図面より掘立柱建物跡の柱穴の可能性をもつものを抽出し、SB-1～9としたものについて述べる。ビット群1では出土遺物が少なく、図化できた遺物はSB-9付近から出土したP01のみであるが、検出面より浮いた状況で出土したため構築された年代を特定することはできない。

9棟の掘立柱建物跡は、主軸方向によっておおむね3つに分類することができる。北に対して西へ55～57°振るもの(SB-1～3)、25～30°振るもの(SB-4・5)、ほぼ北を向くもの(SB-6～9)である。遺構は斜面上に立地するため、建物を構築するには地形に左右されやすい環境ではあるが、掘立柱建物の構築時期を区分する指標の一つとして、建物の主軸方向が重要視されているため、本項でもこれに従い、各掘立柱建物跡を分類した。

・SB-1～3 (挿図85～87・写真図版32、33)

SB-1～3はそれぞれP1～6、P10～17、P22～27で構成されていると考える。主軸方向はそれぞれN-55°-W、N-57°-W、N-57°-Wであり、斜面に対し並行するように構築されている。SB-1と2は重複しているため、構築の新旧は不明であるが少なくとも1度の建て替えを行っていると考えられる。

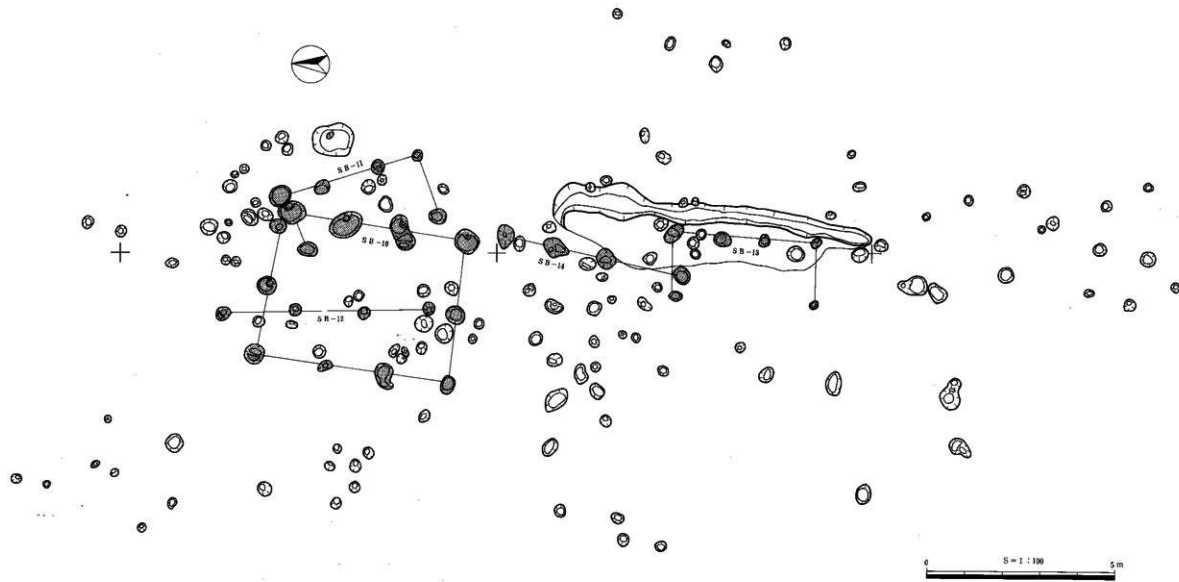
SB-1は桁行2間、梁行1間と考えるが、西側の梁行はP7を含めて2間となる可能性もある。柱穴間距離は桁行で1.8～2.5m、梁行で1.8～2.1m、床面積は約9㎡である。各柱穴の規模は、P1が最も小さく径約20cm、深さ約50cmを測る。最も大きなものはP2で径約40cm、深さ約80cmを測る。

SB-2は桁行3間、梁行1間と考えられ、柱穴間距離は桁行1.5～2.4m、梁行約3m、床面積は約18㎡である。各柱穴の規模は、径30～40cm、深さ15～70cmを測る。

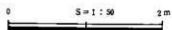
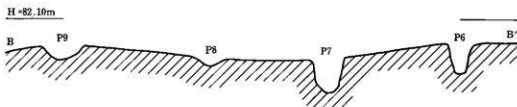
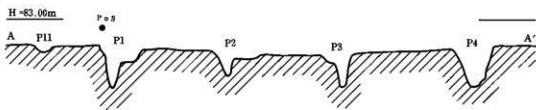
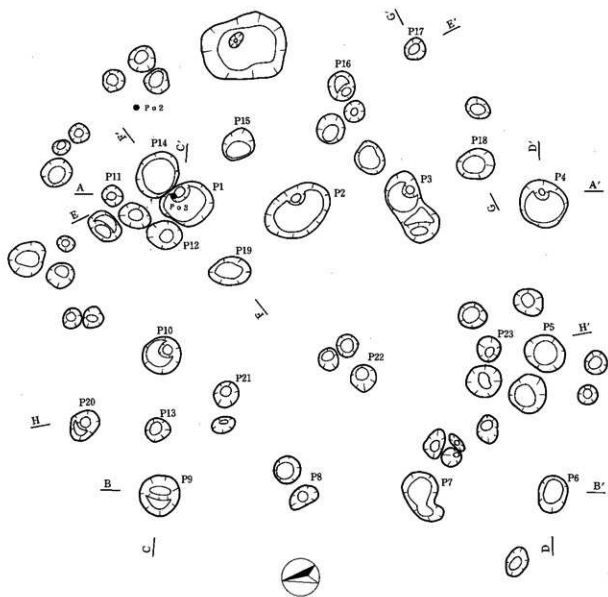
SB-3は桁行2間、梁行1間と考えるがI-I'上のP22～23間にSB-6の柱穴と考えるP43が位置している。このP43をSB-3の柱穴とすると桁行は3間となるが、P43に対応する柱穴がJ-J'上に見当たらない。柱穴間距離は桁行1～2.3m、梁行2～2.2m、床面積は約7.3㎡である。各柱穴の規模は、径30～70cm、深さ20～70cmを測る。斜面上の立地という条件下では、上部からの流水や土砂の流れ込みが考えられ、建物の強度を増すために上方の桁行を3間にした可能性も考えられる。

・SB-4、5 (挿図85・87・写真図版32、33)

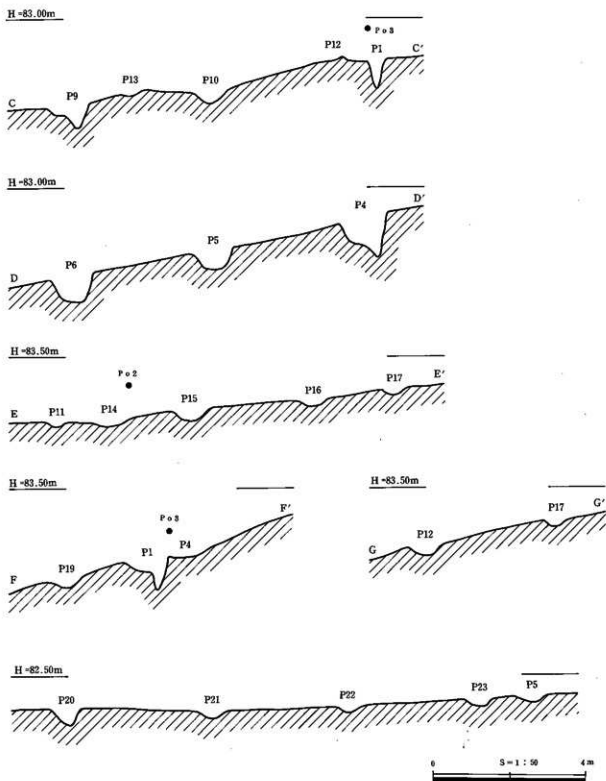
SB-4、5はいずれもP29～32、P34～37で構成されているが、西側柱穴を欠いているため完結しない桁行2間以上、梁行1間以上の掘立柱建物である。主軸方向はSB-4がN-25°-W、SB-5がN-30°-Wをとり、SB-1～3と同じく斜面に対して並行に構築されている。柱穴間距離は桁行1.3～1.8m、梁行1.4～1.8m、柱穴の規模は径20～70cm、深さ15～50cmを測る。SB-4、5も同時に構築されることはなく、新旧は不明だが建て替えが行われたものとする。



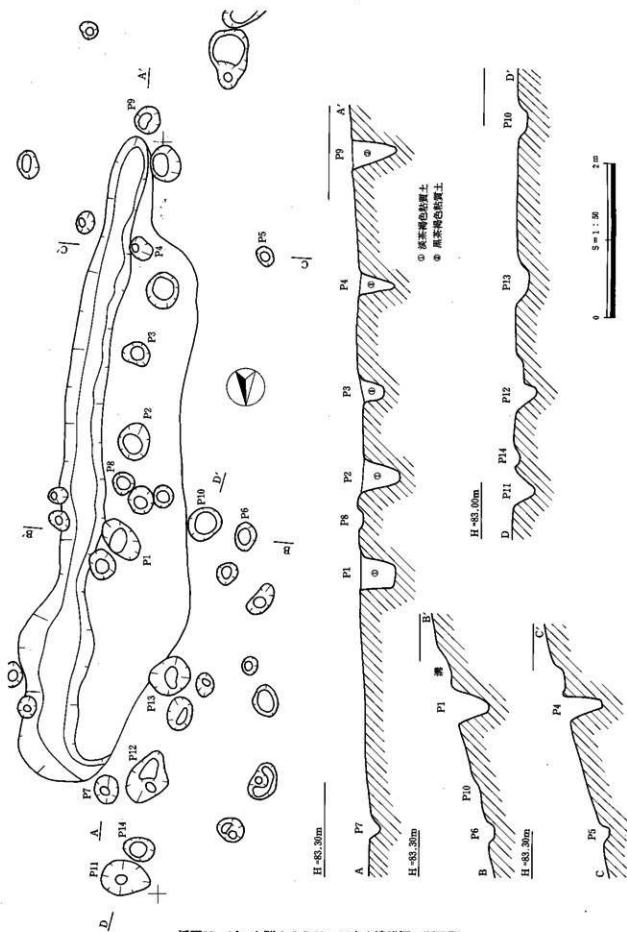
挿図90 ビット群2遺構図



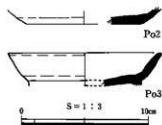
挿図91 ビット群2 SB10~12遺構図・断面図



挿図92 ビット群2 S B 10~12断面図



挿図93 ビット群2 SB 13~14出土遺構図・断面図



挿図94 ビット群2 出土遺物実測図

・SB-6~9 (挿図85、88・写真図版32~33)

SB-6~9はそれぞれP39~46、P47~51、P52~56、P58~64で構成されている。主軸方向はSB-6より順に、N-3°-W、N-4°-E、N-4°-E、N-5°-Eをとり、斜面に対し斜行するように構築されている。

SB-6は桁行3間、梁行1間と考える。柱穴間距離は桁行0.8~1.2m、梁行2.2~2.4mを測り、床面積は約8㎡である。柱穴の規模は径25~60cm、深さ20~60cmを測る。

SB-7、8はそれぞれ桁行2間以上、梁行1間の完結しない掘立柱建物跡である。柱穴間距離は桁行で0.8~1.5m、梁行で1.2~1.6mである。柱穴の規模は径40~60cm、深さ25~80cmを測る。この2棟も新旧は不明であるが建て替えが行われている。

SB-9は桁行3間、梁行1間と考えるが、P60に対応する柱穴がみられない。柱穴間距離は桁行1~1.3m、梁行1.5mを測り、床面積は約4.5㎡である。柱穴の規模は径40~60cm、深さ25~70cmを測る。P66付近でPo1が出土した。Po1は土師器の壺である。検出面より浮いた状態での検出であったため、遺構の時期を特定できるものではない。本遺構に伴うものではなく、調査地東側の斜面上部からの流れ込みの遺物と判断する。

3 ビット群2 (挿図90~94・写真図版34、35)

ビット群2では、合計153基のビットを検出した。前項ビット群1同様、すべてのビットが遺構とは考えられない。比較的ゆるやかな斜面上に立地し、現況での標高は82.5~84.5m、検出面の標高は81.5~83.5mであり、調査当初より遺構の存在を想定した場所であった。各ビットはそれぞれいびつな円形を呈し、規模は径0.2~1m、深さ20~70cmとまちまちである。埋土は黒褐色系または茶褐色系の土が堆積しており、いずれも単層で柱痕をもつビットはなかった。

調査中より掘立柱建物跡と判断したものは、SB-10、13の2棟であり、SB-13は背後に1条の溝を有する。その他の掘立柱建物跡については調査終了後、平面実測図面より柱穴の可能性をもつビットを抽出し、掘立柱建物の構築の可能性を想定した。

・SB-10~12 (挿図90~92、94・写真図版34、35)

ビット群2の北側で3棟の掘立柱建物跡(SB-10~12)を検出した。これらは互いに切り合う形での検出のため、同時期に構築されたものではなく、何度か建て替えが行われたものとする。図化できた遺物は、須恵器坏身Po2、3であるが、検出面より浮いた状態での出土のためこれら掘立柱建物跡の構築時期を特定することはできない。

SB-10はP1~10で構成される、桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。

柱穴間距離は桁行で1.5~1.8m、梁行で1.8~2.1m、柱穴の規模は径0.5~1m、深さ15~50cmを測り、床面積は約20㎡である。主軸方向はN-10°-Eである。埋土は茶褐色系の単層で土層断面を観察したが柱の痕跡は見られなかった。

SB-11は、SB-10の上方に立地する、P14~19で構成される完結しない掘立柱建物跡である。桁行は3間と考えるが、梁行は1間以上である。柱穴間距離は桁行で1~1.5m、梁行は1.5m前後である。柱穴の規模は径30~60cm、深さ10~20cmを測り、主軸方向はN-16°-Wである。

SB-12はSB-10の中央やや西側に位置している、P20~23からなる掘立柱建物跡である。ビットは一直線に並ぶP20~23からなり、柱穴間距離は1.8mである。柱穴は径40cm前後で、深さ10~20cmを測る。主軸方向はN-2°-Eをとる。各柱穴に対応するビットは見られず、検出した4基のビットの深さも浅いことから、流失したものとする。

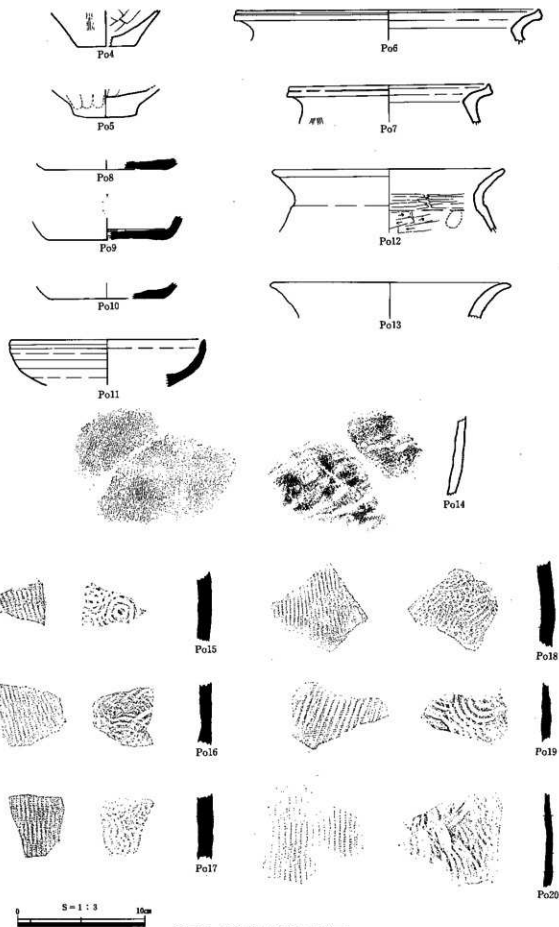
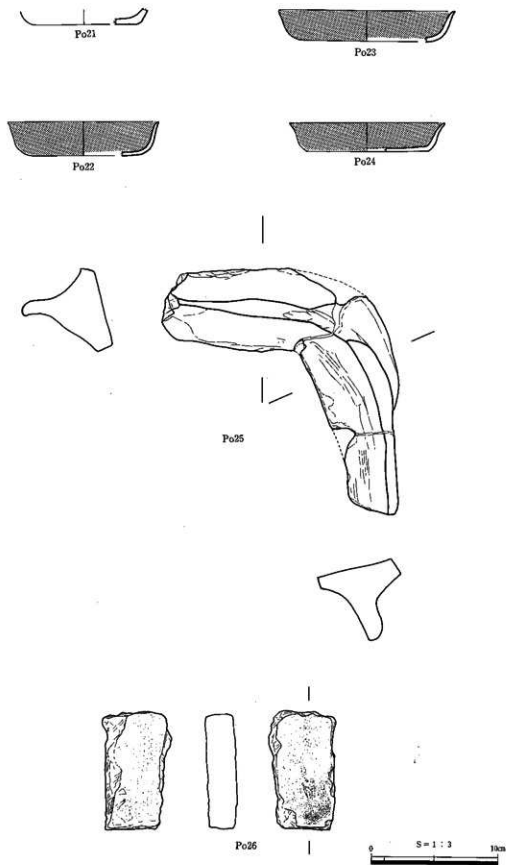


插图95 遗構外出土遺物実測図



挿図96 遺構外出土遺物実測図2

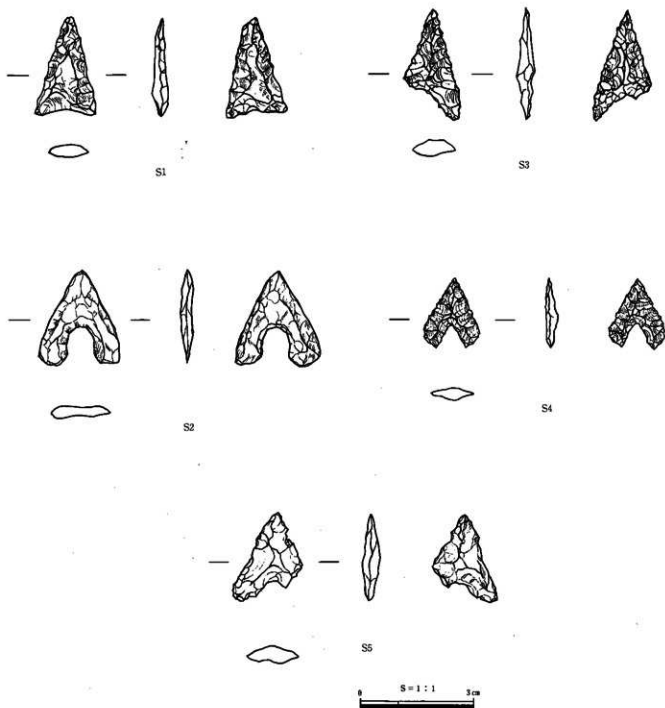
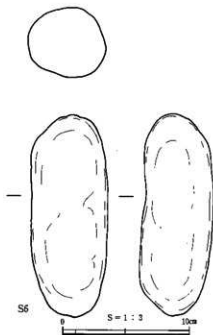


插图97 遗物出土物实测图 3



挿図98 遺構外出土遺物実測図4

・SB-13、14 (挿図90、93・写真図版34、35)

SB-10~12の南側、標高82.3~83.1mの西に向かって緩やかに下る斜面上にSB-13、14を検出した。

SB-13は、背後に溝を伴う掘立柱建物跡である。溝は南北方向に斜面に沿ってのびており、規模は幅0.4~1m、長さ約8.5m、深さ10~15cmを測る。南側は完結しており、北側は先端で西に向かって「L」字状に曲がり、消える。溝の西側には、わずかであるが平坦面が確認できる。平坦面は最大で幅1.5mが遺存しており、西側は流失したものと考える。この平坦面はSB-10構築に伴って造成されたものであり、溝は排水用と考える。掘立柱建物跡はP1~6で構成されており、N-4-Eに主軸方向をとる。桁行3間であるが、梁行はP2、3に対応する柱穴が見られないため1間以上としておく。柱穴間距離は桁行で1.3m前後、梁行で1.7mを測る。規模は径25~60cm、深さ10~60cmである。P1~4は比較的遺存状態のよい柱穴であり、しっかりと穿ってあるが、埋土は茶褐色系の単層で柱痕はみられなかった。

SB-14はSB-13の北に位置している。P11~14で構成され、桁行3間と考える。これら柱穴に対応するピットは流失しているも

のと考えられ、柱穴の検出には至らなかった。柱穴間距離は1.3m前後、規模は径60cm前後、深さ20cm前後を測る。主軸方向はN-14-Eをとる。

4 遺構に伴わない遺物 (挿図95~98・写真図版35、36)

遺構外、特に調査地西側の斜面裾部で多量の遺物が出土した。そのほとんどが細片で、図化できた遺物はPo4~26、S1~6 (註1)である。

Po4~7は弥生土器の底部および口縁部である。いずれも青木編年I期 (註2)に比定される。Po8~11は須恵器の坏、Po12、13は土師器の甕である。Po14、25はかまど (註3)である。Po21~24は古墳時代以降の土師質の皿である。Po22~24には内外面に丹塗りされている。Po26は瓦 (註4)である。細片で風化が激しいが、凸面に縄目タタキを施し、凹面に布目痕が残る。S1~5は石炭である。S1、2、5は無斑晶安山岩、S3、4は黒曜石である。S6は大山系石英安山岩亜円礫のたたき石である。

これらの遺物は重機による表土除去作業中および掘り下げ中に検出面よりも高い位置より出土しており、層位に関係のない出土状況であるため、本遺跡に伴うものではなく斜面上方からの流れ込みの遺物であると判断した。

註1 石製品の花材については、鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご教示いただいた。

註2 「青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 1978 鳥取県教育委員会

註3 奈良教育大学三辻利一先生に胎土分析をお願いし、ご教示いただいた。

註4 前掲註3

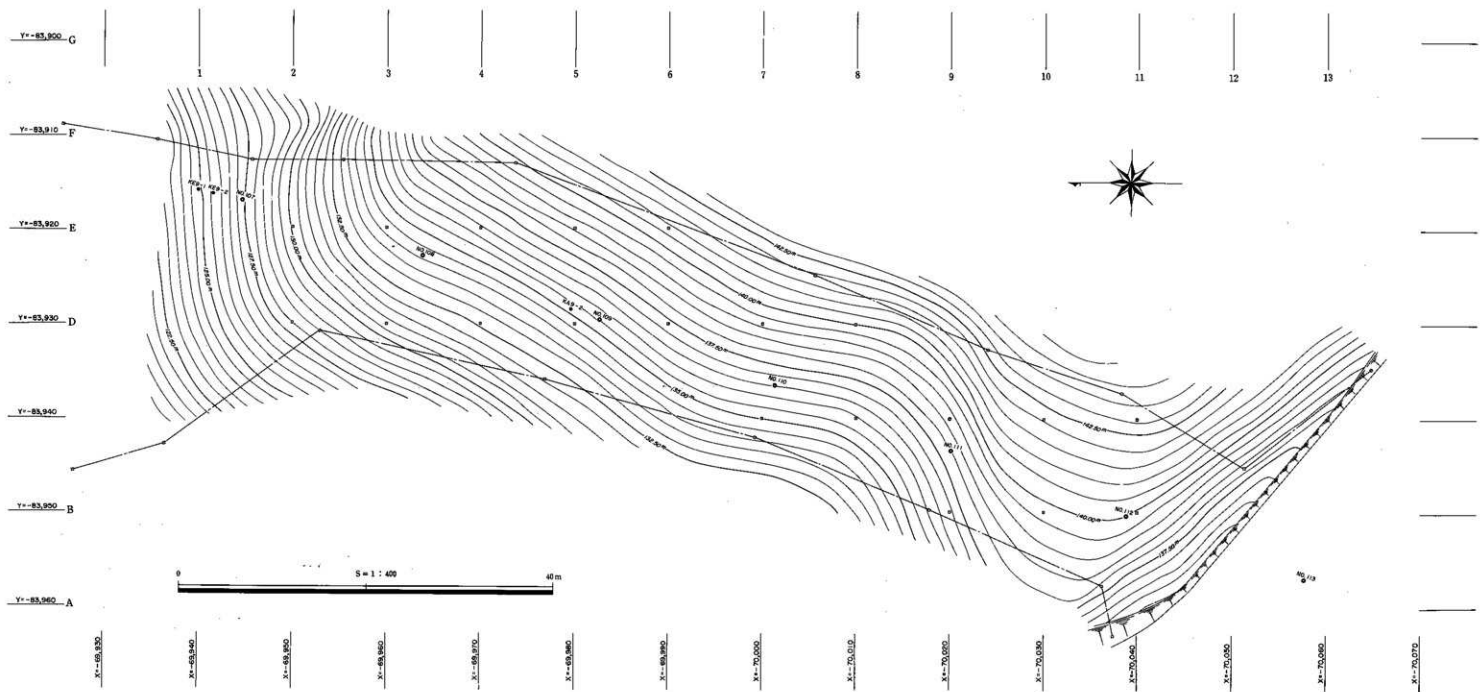
参考文献

清水真一 「青木遺跡」 『古墳時代の研究 第2巻 集落と豪族居館』 1990 雄山閣

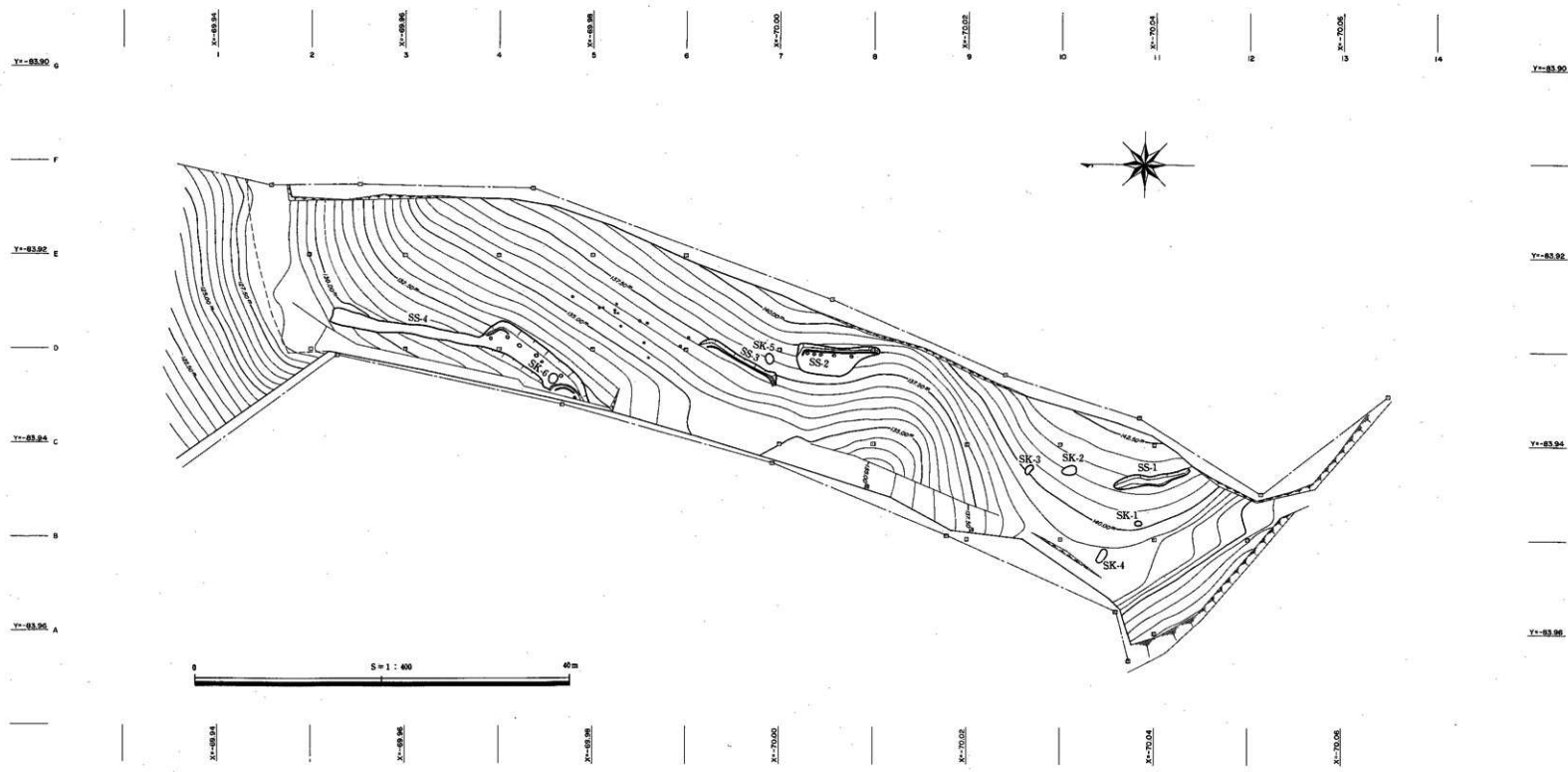
『陰田遺跡群』 1996 鳥取県教育文化財団

『越敷山遺跡群』 1992 会見町教育委員会・岸本町教育委員会

『上淀廃寺』 1995 淀江町教育委員会



挿図99 小町越城野原第1遺跡調査前地形測量図



挿図100 小町越城野原第1遺跡全体遺構実測図

第6章 小町越城野原第1遺跡の調査

第1節 位置と環境 (挿図99、100)

小町越城野原第1遺跡は、小町字越城野原ノ五に位置する。小町集落は日野川左岸丘陵の細長い谷地形に築かれ、集落名は平安歌人小野小町によるという伝説の残る地である。当遺跡は、この小町集落より越敷山へ向かい奥へ入った山間に所在し、標高約130～140mの西向きの斜面に立地する。谷をひとつ隔てた北側には、同じく山間の斜面上に立地する小町越城野原第2遺跡(本書第7章参照)が位置する。両遺跡の裾には石橋下池(石橋堤=谷称)と称される溜池が広がり、周辺谷部の棚田を利用した稲作に利用されている。

第2節 調査の経過と方法

小町越城野原第1遺跡の調査対象面積は1763㎡であり、平成7年5月から調査に着手した。

事前に岸本町教育委員会によって調査地内の試掘調査が行われており、その成果と残存するトレンチの状況を参考にしつつ、重機による表土剥ぎを実施した。その後、人力による精査・検出を行った。表土剥ぎ終了後には10×10mのグリッド設定を行い、遺構の測量等に活用した。遺跡の南側から北側に向かって調査を進めていき、土坑(落し穴)6基、テラス状遺構4基を検出した。遺構の検出・実測終了後、調査後地形測量を行った。調査は平成7年11月10日に終了した。最終的に調査した面積は1555㎡である。

第3節 遺構と遺物

1 概要 (挿図99、100)

小町越城野原第1遺跡では、土坑6基(SK-1～6)、テラス状遺構4基(SS-1～4)を検出した。土坑(SK-1～5)は縄文時代の落し穴と考えられ、隣接する小町越城野原第2遺跡と同様、斜面に立地するこの遺跡が良好な狩猟場であったことを窺わせる。なお、落し穴については、小町越城野原第2遺跡から検出されたものを中心に、本書第8章第5節で詳述する。

テラス状遺構は、斜面地に平坦面と溝状の施設を築いたものである。平坦面には等間隔にピットが並ぶものも存在し、斜面地を利用してなんらかの建物を構築したものと考えられる。SS-1、3については溝状遺構とも考えられたが、遺構の立地・形態および出土遺物から4基は同時期に同様の機能を果たしていたと判断し、すべてテラス状遺構としてとりあげた。

隣接する小町越城野原第2遺跡では弥生時代の竪穴住居跡1棟が確認されており、遺跡の東側にあたる尾根上の比較的平坦な一帯には集落が営まれていた可能性が考えられる。

なお、遺構の説明文において、規模を表す数値は基本的に実測図をもとに計測したものであり、斜面に立地する遺構の深さは最深部の計測値を表記した。また、落し穴の遺構図では、杭痕跡を赤色、石を青色で表した。

2 縄文時代の遺構

落とし穴

SK-1 (挿図101・写真図版38)

位置 C10グリッドに位置し、標高139mの緩斜面に立地する。

形態 平面形は検出面、底面とも長方形を呈する。規模は、検出面で長軸97cm・短軸45cm、底面で長軸80cm・短軸47cm、深さ60cmを測る。

底面P 底面のほぼ中央に獲物殺傷用の杭を立てるためのビット（以下、底面ビットと呼称する）を持ち、その径は21cm、深さ19cmを測る。底面ビットの埋土内には黒灰褐色土が棒状に入りこんでいる部分が6ヶ所認められる。規模は、径約4cm、深さ約12cmで、これは木の杭を立てていた痕（杭痕跡）と考えられる。

埋土 黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

SK-2 (挿図101)

位置 C10グリッドに位置し、標高141mの斜面に立地する。

形態 平面形は検出面で楕円形、底面で円形を呈する。規模は、検出面で長軸136cm・短軸108cm、底面で長軸38cm・短軸36cm、深さ198cmを測る。

底面P 存在しない。

埋土 上層は黒灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

SK-3 (挿図102)

位置 C9グリッドに位置し、標高140mの谷に向かう斜面に立地する。

形態 平面形は検出面、底面ともほぼ長方形を呈する。規模は、検出面で長軸90cm・短軸48cm、底面で長軸68cm・短軸56cm、深さ88cmを測る。

底面P 底面ビットを有し、その規模は径20cm、深さ32cmを測る。

埋土 黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

SK-4 (挿図102)

位置 A10グリッドに位置し、標高140mの斜面に立地する。

形態 平面形は検出面で楕円形、底面で隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸142cm・短軸58cm、底面で長軸104cm・短軸66cm、深さ34cmを測る。

底面P 底面ビットを有し、その規模は径18cm、深さ34cmを測る。

埋土 黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

SK-5 (挿図103)

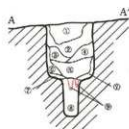
位置 B10グリッドに位置し、標高138mの緩斜面に立地する。

形態 平面形は検出面で楕円形、底面で円形を呈する。規模は、検出面で長軸110cm・短軸90cm、底面で長軸40cm・短軸34cm、深さ160cmを測る。

底面P 存在しない。

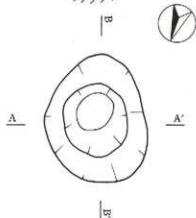
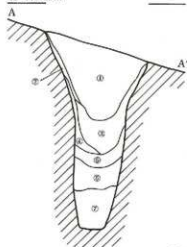
埋土 上層は黒灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土の混合層からなり、自然堆積と考えられる。

H-140.60m



- ① 黒灰褐色土
- ② 黒灰褐色土 (黄緑茶褐色粘質土小ブロック混)
- ③ 黒灰褐色土 (黄緑茶褐色粘質土小ブロック混)
- ④ 黒灰褐色土と黄緑茶褐色粘質土の混合
- ⑤ 暗赤灰褐色土 (黄緑茶褐色粘質土小ブロック混)
- ⑥ 暗赤灰褐色土 (黄緑茶褐色粘質土小ブロック混)
- ⑦ 黄緑茶褐色粘質土 (暗赤灰褐色土混)
- ⑧ 暗赤灰褐色土
- ⑨ 黒灰褐色土 (もうい)

H-141.40m

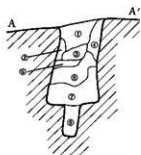


- ① 黒灰褐色土
- ② 黒灰褐色土 (黄緑茶褐色粘質土小ブロック少量混)
- ③ 黒灰褐色土 (黄緑茶褐色粘質土少量混)
- ④ 暗赤灰褐色土 (黄緑茶褐色粘質土少量混)
- ⑤ 黒灰褐色土 (粘性土)
- ⑥ 黒灰褐色土と黄緑茶褐色粘質土の混合
- ⑦ 暗赤灰褐色土

S = 1 : 40 1m

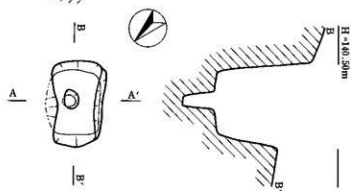
挿図101 SK-1 遺構図

H - 140.50m

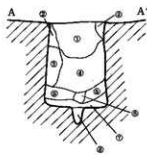


SK-3

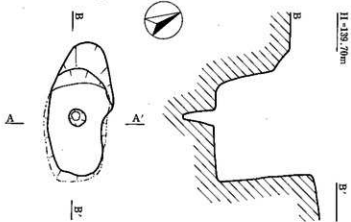
- ① 黒灰褐色土
- ② 黒灰褐色土 (黄褐色粘質七塵小ブロック混)
- ③ 鉄屑茶灰褐色土
- ④ 暗黒茶灰褐色土と淡黄灰褐色粘質土の混合
- ⑤ 黒灰褐色土 (黄褐色粘質土小ブロック混)
- ⑥ 黒灰褐色土 (やや粘性強)
- ⑦ 黒灰褐色土 (やや粘性強)
- ⑧ 黒灰褐色土



H - 139.70m



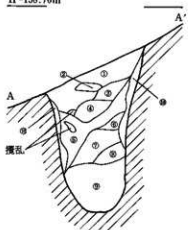
SK-4



S = 1 : 40
0 1m

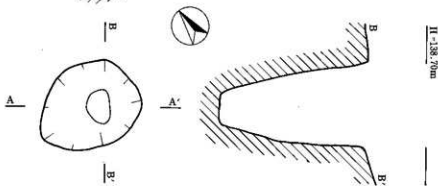
挿図102 SK-3・4遺構図

H=138.70m

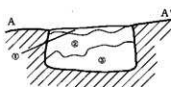


SK-5

- ① 黒灰褐色土
- ② 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量混)
- ③ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック・黒灰褐色土混)
- ④ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土中・小ブロック多量混)
- ⑤ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土混小ブロック混)
- ⑥ 黒灰褐色土と暗茶灰褐色土の混合
- ⑦ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土中・小ブロック混状に混)
- ⑧ 黒灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土粒の混合
- ⑨ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土少量混)
- ⑩ 黄橙茶褐色粘質土 (黒灰褐色粘質土混)

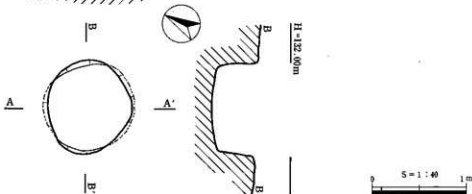


H=132.00m



SK-6

- ① 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土多量混)
- ② 黒灰褐色土
- ③ 暗茶灰褐色土と黄灰褐色粘砂土・黄橙茶褐色粘質土ブロックの混合



挿図103 SK-5・SK-6遺構図

SK-6 (挿図103)

位置 C4グリッドに位置し、SS-4内の平坦面に立地する。

形態 平面形は検出面、底面ともにほぼ円形を呈する。規模は、検出面で長軸98cm・短軸90cm、底面で長軸98cm・短軸90cm、深さ48cmを測る。

埋土 暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

性格 不明である。床面近くおよび上層から土器片3点が出土しており、SS-4に伴う可能性が考えられる。形態、規模から考えて、落し穴の可能性もある。

3 弥生時代の遺構

SS-1 (挿図104・写真図版39)

位置 C10~11グリッドにかけて位置し、標高141~142mの緩斜面をほぼ南北方向にのびている。

形態 緩やかな斜面を、断面「U」字状に掘削している。

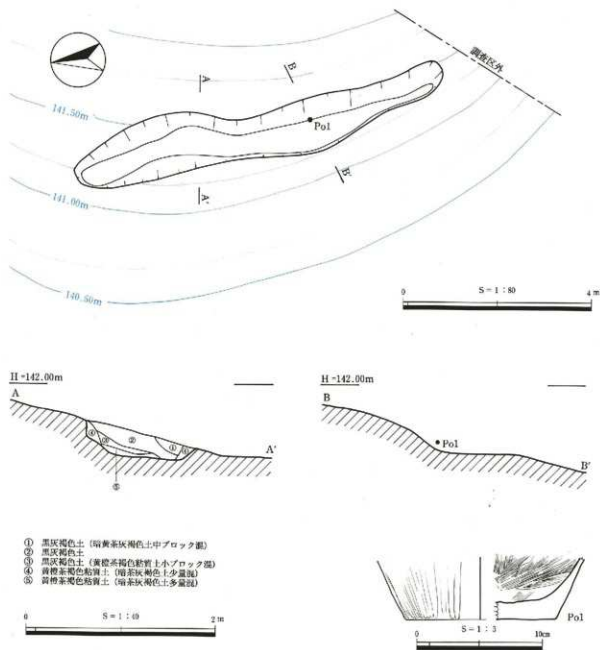
規模は、長さ南北8m40cmにわたり、幅は最大1m40cmを測る。

埋土 黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

遺物 図化できたものに弥生土器底部片Polがある。

性格 不明である。

時期 出土遺物より弥生時代と考えられる。



挿図104 SS-1遺構図・出土遺物実測図

SS-2 (挿図106、107・写真図版40、41)

位置 D7～8グリッドにかけて位置し、谷上の急斜面に立地する。標高138～139mの斜面上を南北方向にのびている。

形態 斜面を断面「L」字状に掘り下げて平坦面を造成し、北側には溝を備える。溝に沿って、5個のピットが一直線に並ぶ。平坦面は西へ向かって緩やかに下りながら2m30cmほどの幅で広がっている。溝は長さ8m70cm、幅約80cmを測り、北側部分で西へ向かって屈曲する。ピットの規模は、P1が径23cm、深さ45cm、P2が径27cm、深さ20cm、P3が径20cm、深さ25cm、P4が径30cm、深さ65cm、P5は径33cm、深さ45cm、各ピット間距離は、P1-2間が45cm、P2-3間が42cm、P3-4間が1m20cm、P4-5間が1m55cmである。

埋土 黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

遺物 図化できたものに弥生土器Po2～8、S1がある。その他弥生土器片が少量出土している。

Po2、3はともに底部片である。Po4、5は弥生土器の甕で、口縁部に2条の凹線を持ち、外面に刷毛目調整の跡が見られる。Po6も弥生土器の甕である。Po7は弥生土器の甕の底部で、外面には寛磨き調整が見られる。Po8は弥生土器の甕で、口縁部に2条の凹線を持つ。S1は優白質白雲母花崗岩を加工した砥石である。(注1)

性格 不明である。しかし、斜面に平坦面を造成し、背後に溝、平坦部にピットを備えていることから、何らかの建物(掘立柱建物)が構築されていた可能性が考えられる。溝はその構築物に伴う排水施設等の可能性が考えられる。

時期 出土遺物より、弥生時代中期中葉と考えられる。

SS-3 (挿図105・写真図版41、42)

位置 D6～7グリッドにかけて位置し、標高136～137.5mの斜面を南北方向にのびている。

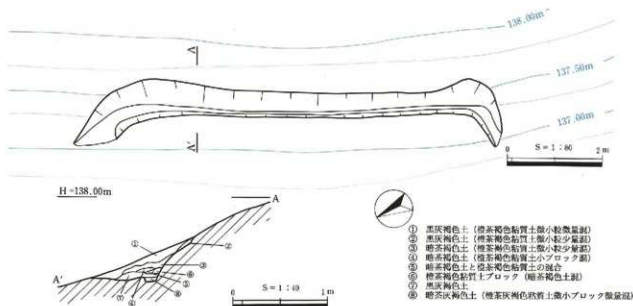
形態 傾斜面を断面「L」字状に掘り下げてあり、平面形はかすかい状を呈している。南北9m、幅は斜面を掘り込む肩から裾まで約70cm程度であり、溝状を呈する。

埋土 黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

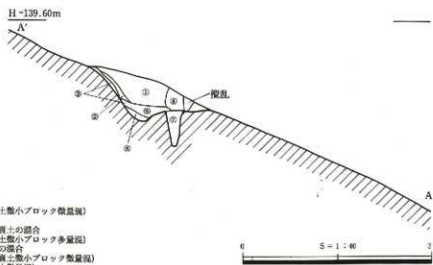
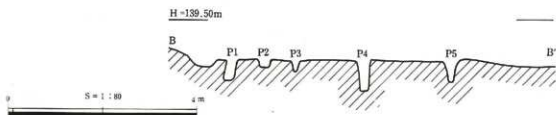
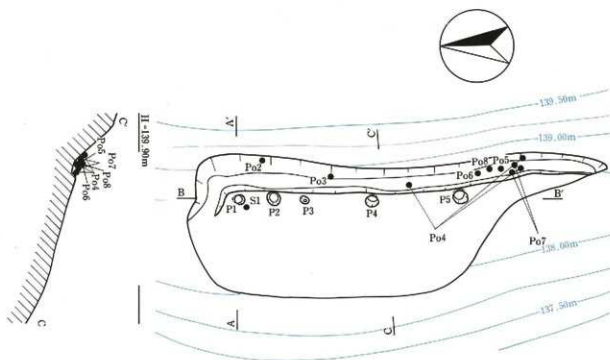
遺物 出土していない。

性格 不明である。形態はSS-2に類似しており、同様の機能を果たした遺構と考えたい。

時期 不明である。しかし形態・埋土がSS-2に類似していることから、弥生時代のもつと解釈したい。



挿図105 SS-3 遺構図



- ① 黒灰褐色土 (糖褐色粘質土微小ブロック微量混)
- ② 暗茶褐色土
- ③ 黒灰褐色土と黄灰褐色粘質土の混合
- ④ 黒灰褐色土 (黄褐色粘質土微小ブロック多量混)
- ⑤ 黒灰褐色土と暗茶褐色土の混合
- ⑥ 暗茶褐色土 (糖茶褐色粘質土微小ブロック微量混)
- ⑦ 黒灰褐色土 (暗茶褐色土微量混)

挿図106 SS-2遺構図

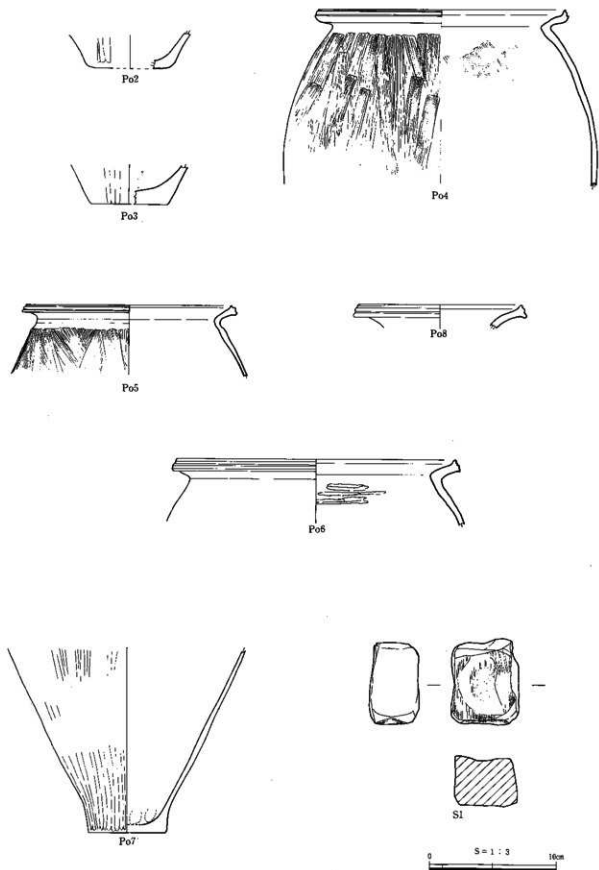


插图107 S S - 2 出土遗物实测图

SS-4 (挿図108、109・写真図版42 43)

- 位置** E 2~4・D 4グリッドにかけて位置し、標高129~133mの斜面を南北方向にのびている。
- 形態** 斜面を断面「L」字状に掘り下げ平坦面を造成しており、北側・南側はそれぞれ西へ向かい緩やかなカーブを描く。斜面地をカットしたテラスの北側は溝状を呈する。また、平坦面の西側はさらに半円を描くように幅約35cmの溝がめぐっているが、遺構の西側は調査地外へおよぶため全貌は不明である。
- テラス内にはピットが8つ存在する。各ピットの規模は、P 1が径25cm、深さ95cm、P 2が径26cm、深さ98cm、P 3が径28cm、深さ97cm、P 4が径17cm、深さ68cm、P 5が径29cm、深さ95cm、P 6が径22cm、深さ42cm、P 7が径17cm、深さ34cm、P 8が径20cm、深さ37cmである。この内P 1~P 5はほぼ一直線に並ぶ。ピット間距離はP 1-2間1m42cm、P 2-3間1m25cm、P 3-4間1m20cm、P 4-5間2m33cmを測る。テラスの範囲は、南北におよそ11m、東西に2mの幅で広がっている。
- テラスから北へ続く平坦面は16mにわたってのびていく。
- 埋土** 黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 遺物** 図化できたものは弥生土器の甕Po 9、10、11、13、14、底部片Po12、15、16、17、石斧S 2がある。この内、Po12はP 2、4内より、S 2はP 3内より出土したものである。また、Po10は、テラスの北側の溝状に掘込まれた地点からまとまって出土している。
- Po11の口縁部は2条の凹線の上に刻み目と棒状浮文が施され、頸部には貼付突帯を有する。Po14は口縁に2条の凹線、頸部に貼付突帯を有する。Po12、16は外面に筈磨き調整が見られる。
- S 2は細粒凝灰質砂岩製の始刃石斧である。(注)
- 性格** 斜面地を「L」字状にカットして平坦面を築き、平坦面にはピットがほぼ一直線に並ぶこと、またピットの背後をわずかではあるが溝状に掘り込んでいることから、テラスを構築したのちに何らかの建物を建てていた可能性が考えられる。調査地外へおよぶため全貌は明らかでないが、平坦面の西に半円を描くように広がる溝も、何らかの建物関連施設の可能性を考えたい。テラスから北側へ向かって16mのびる平坦面は、テラスおよびそこに建てられていた建物へ向かうための道の機能を果たしていたものと考えられる。
- 時期** 出土遺物より弥生時代中期中葉と考えられる。

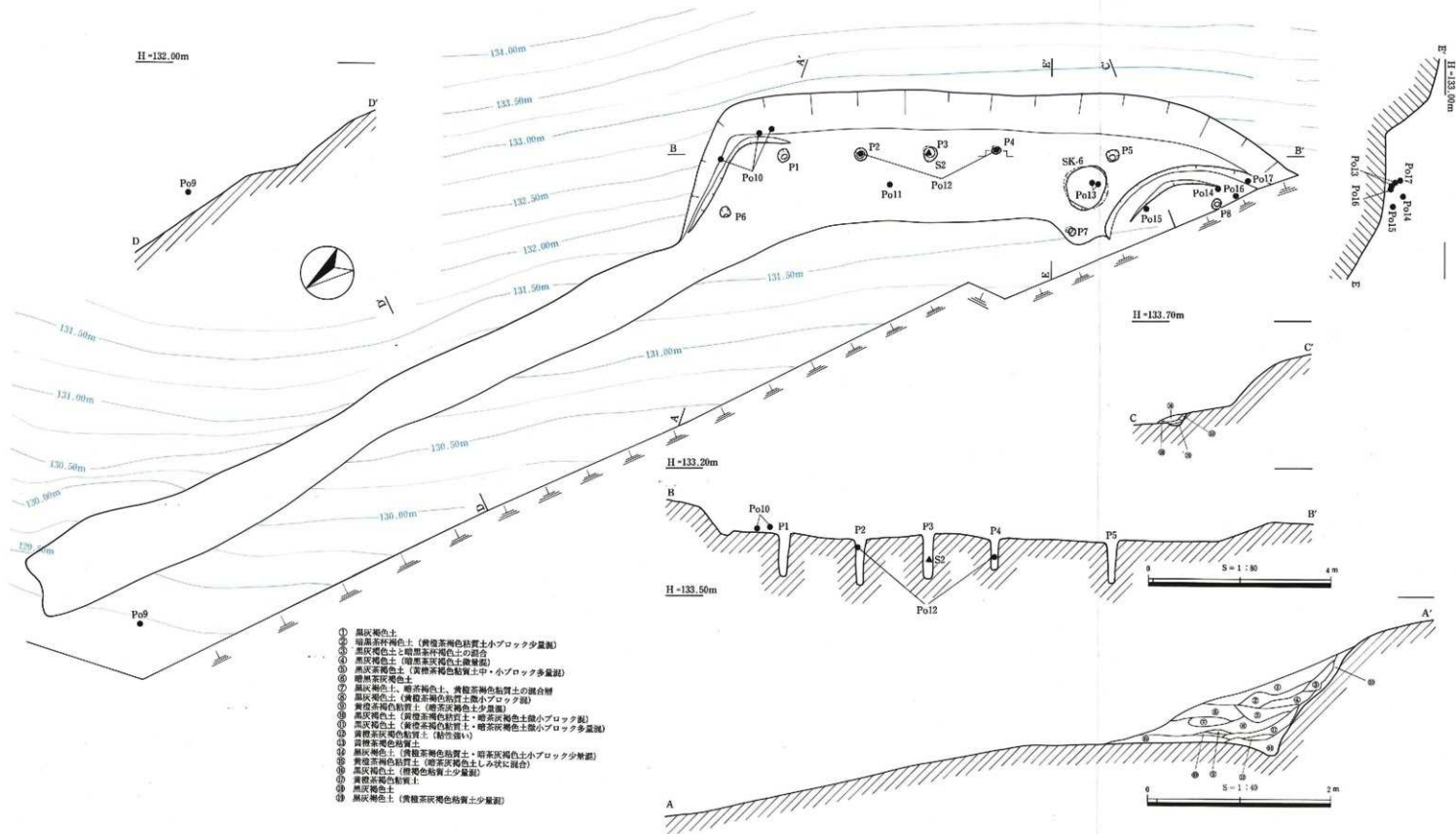
テラス状遺構小結

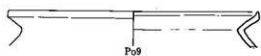
小町越城野原第1遺跡では、斜面地を断面「L」字状にカットし平坦面を造成したテラス状遺構と考えられるものを4基検出した。いずれも規模・形態は微妙に異なるものの、ほぼ南北方向にのびる溝状の形態を成し、また出土遺物も弥生時代中期中葉の土器であることから、これらは同時期に同様の機能を果たしていたものと考えたい。

SS-1の形態は他の遺構と比較するとややいびつではあるが、他のテラス状遺構に比べて最も平坦な地形に立地していることが形態の異なる要因と考えたい。一連のテラス状遺構として位置付けたが、違う機能を果たしていた可能性も十分考え得る。

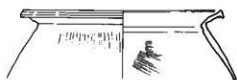
一方、SS-2は緩やかな傾斜はあるがほぼ平坦といえる面を備え、さらに溝状の掘り込みに平行して5つのピットが並んでいることから掘立柱建物等が存在した可能性が考えられる。遺物も弥生土器の甕を中心に多数の出土があった。

またSS-3はピットを伴わず遺物の出土もなかったが、その形態はSS-2に近似していることからその性格こそ明らかではないが、同機能を果たしていたものと考えたい。SS-4は、広く安定した平坦面を備えているテラスである。付随する溝やピットもしっかりとしており、P 1~8は深さ90cm前後と柱穴と呼ぶにふさわしいものである。さらに特筆すべきは「コ」の字型に削り込まれたテラス平坦面の中に円形を描く小さな溝状の落ち込みが存在すること、テラスから北へ向かってのびる幅2m・長さ16mの平坦面の存在である。前者はテ





Po9



Po13



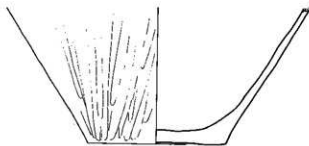
Po10



Po14



Po11



Po12



Po15



Po16



Po17



S2

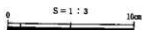


插图109 S S - 4 出土遺物実測図

ラス内に構築された施設との関連が推定され、また後者はこのテラスへと向かう道であったものと考えられる。

調査前の地形および表土の堆積状況を観察した限りでは、地山が大きな攪乱・削平を受けているとは考えにくく、検出した遺構は比較的原形を留めているものと思われる。しかし、テラス状遺構に関しては、平坦面に建物を構築することを前提とした場合、検出した部分のみではその機能を十分に果たしたとは考えがたく、斜面西側に客土を施していた可能性がある。

近隣の類例としては、米子市の東宗像遺跡（注2—掘立柱建物跡および段状遺構として報告されている）、吉谷トコ遺跡（注3—掘立柱建物跡および溝状遺構として報告されている）、西伯郡西伯町清水谷遺跡（注4—段状遺構として報告されている）などが挙げられる。中でも吉谷トコ遺跡のSB-01、02、03、SD-01などは小町越城野原第1遺跡のSS-2、3に非常に近似した形態であり、時期も弥生時代後期と報告されている。

東宗像遺跡の掘立柱建物跡は急斜面を段状に掘り込んで造った平坦面上に存在し、その背後にはやはり小町越城野原第1遺跡のテラス状遺構で見られるような溝が掘り込まれている。排水用の溝と報告されており、また遺物から弥生時代のもと考えられている。第7号段状遺構では平坦面に半円形を描く浅い溝も検出されており、小町越城野原第1遺跡SS-4との類似が興味深い。

清水谷遺跡の段状遺構は緩斜面を掘り込んで平坦面を造成したもので、ピットと背後の溝は存在していない。出土遺物は弥生時代後期の土器である。

いずれにしても弥生時代の当地域では、集落を営む上で斜面地をも有効に利用していたものと考えられる。現時点では不明点が多いが、斜面地を利用した構築物跡の今後の資料増加を待って改めて検討したい。

4 遺構外遺物（挿図110・写真図版44）

調査区中央付近の深い谷部の掘り下げ中に、多数の遺構外遺物を検出した。図化出来たものはPo18～Po21の4点のみだが、出土したものはすべて弥生土器片である。

Po18は壺の口縁～肩部で口縁に1条の凹線をもつ。Po19は短頸壺の口縁～肩部で、口縁端部には2条の凹線をもつ。Po20は壺の底部である。Po21は壺の口縁で、頸部に貼付突起、口縁には2条の凹線を有する。

時期的にも弥生時代中期中葉のものであることから、上方のテラス状遺構より転落したのと考えられる。

（注1）石器の石材については鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご教示頂いた。

（注2）『東宗像遺跡』1985 財団法人鳥取県教育文化財団

（注3）『吉谷トコ遺跡』1994 財団法人米子市教育文化事業団

（注4）『清水谷遺跡』1992 西伯町教育委員会

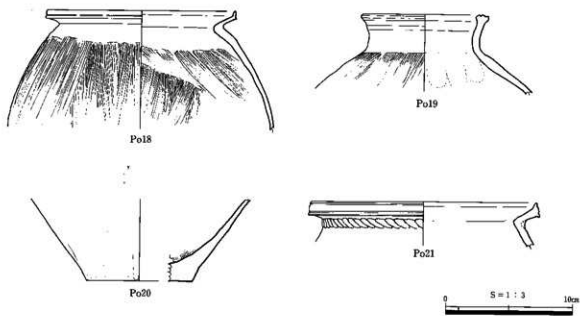


插图110 遗構外出土遺物実測図

第7章 小町越城野原第2遺跡の調査

第1節 位置と環境 (挿図111、112)

小町越城野原第2遺跡は、岸本町小町字越城野原ノ五に位置する。小町集落は日野川左岸丘陵の細長い谷地形に築かれ、集落名は平安歌人小野小町によるという伝説の残る地である。当遺跡は、この小町集落より越敷山へ向かい西へ入った山間に所在し、標高約130～140mの西向きの斜面に立地する。谷ひとつ隔てた南側には、同じく山間の斜面地に立地する小町越城野原第1遺跡(本書第6章参照)が位置する。両遺跡の裾には石橋下池(石橋堤=俗称)と称される溜池が広がり、周辺谷部の棚田を利用した稲作に利用されている。

第2節 調査の経過と方法

小町越城野原第2遺跡の調査対象面積は4052㎡であり、平成8年4月から調査に着手した。事前に岸本町教育委員会によって調査区内の試掘調査が行われており、その成果と残存するトレンチの状況を参考にしつつ、重機による表土剥ぎを調査区の北側・南側の2区に分けて実施した。遺跡の北側から南側へ向かって調査を進め、北側半分を重機による表土剥ぎ・人力による精査・検出の順に行った後、南側半分も同様の手順で調査した。表土剥ぎ終了後には10×10mのグリッド設定を行い、遺構の測量等に活用した。遺構の検出・実測終了後、調査後地形測量を行った。また、ラジコンヘリコプターによる全体空中写真撮影を実施した。調査は平成8年10月24日に終了した。最終的に調査した面積は3800㎡である。

第3節 遺構と遺物

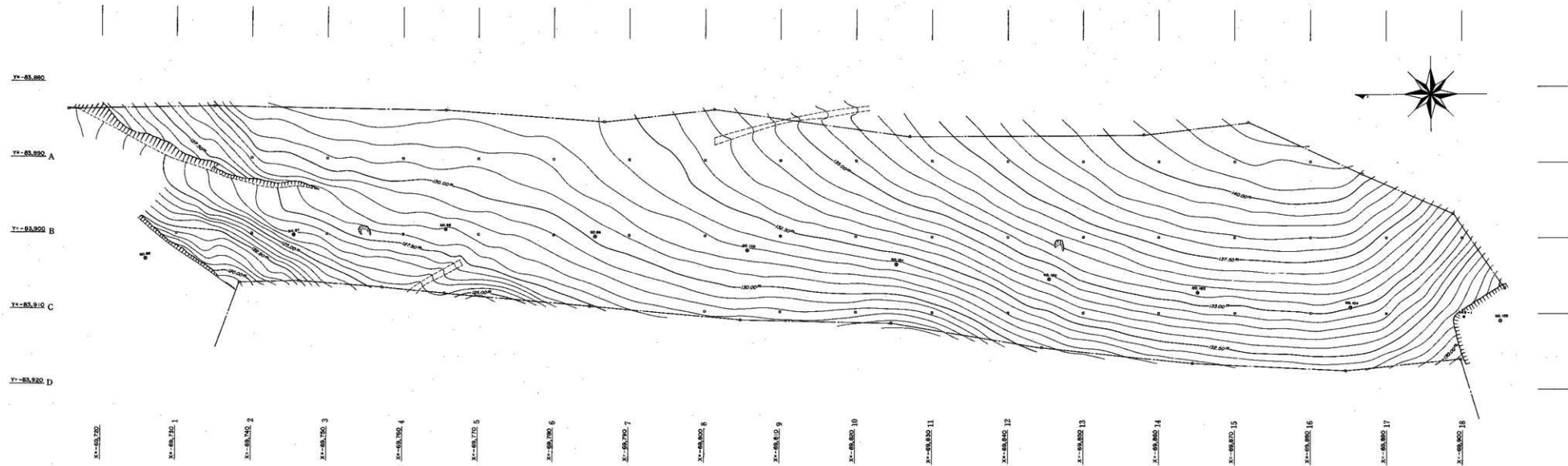
1 概要 (挿図111、112)

小町越城野原第2遺跡からは、土坑25基(SK-1～25)、竪穴住居跡1棟(SI-1)、溝状遺構1条(SD-1)、総計82基からなるピット群を検出した。

土坑は25基すべて、縄文時代の落し穴であると考えられる。遺跡のほぼ全域にわたって分布しており、縄文時代の当地は良好な狩猟場であったことが窺われる。なお、当遺跡で検出された落し穴の特徴・傾向については本書第8章第5節で詳述する。

竪穴住居跡は調査区の東端、尾根上の比較的平坦な部分に立地している。出土遺物より、弥生時代後期のものと考えられる。今回の調査では1棟のみの検出にとどまったが、隣接する小町越城野原第1遺跡からは同時代のテラス状遺構が検出されており、調査区外に集落跡が存在する可能性もある。

その他、溝状遺構、ピット群を検出したが、これらについては遺物等の情報が少なく、時期・性格とも不明である。



押図111 小町越田野原第2 遺跡調査前地形測量図

Y = 83.870

Y = 83.880

Y = 83.890

Y = 83.900

Y = 83.910

Y = 83.920

Y = 83.930

X = 69.720

X = 69.730

X = 69.740

X = 69.750

X = 69.760

X = 69.770

X = 69.780

X = 69.790

X = 69.800

X = 69.810

X = 69.820

X = 69.830

X = 69.840

X = 69.850

X = 69.860

X = 69.870

X = 69.880

X = 69.890

X = 69.900

X = 69.910

X = 69.910

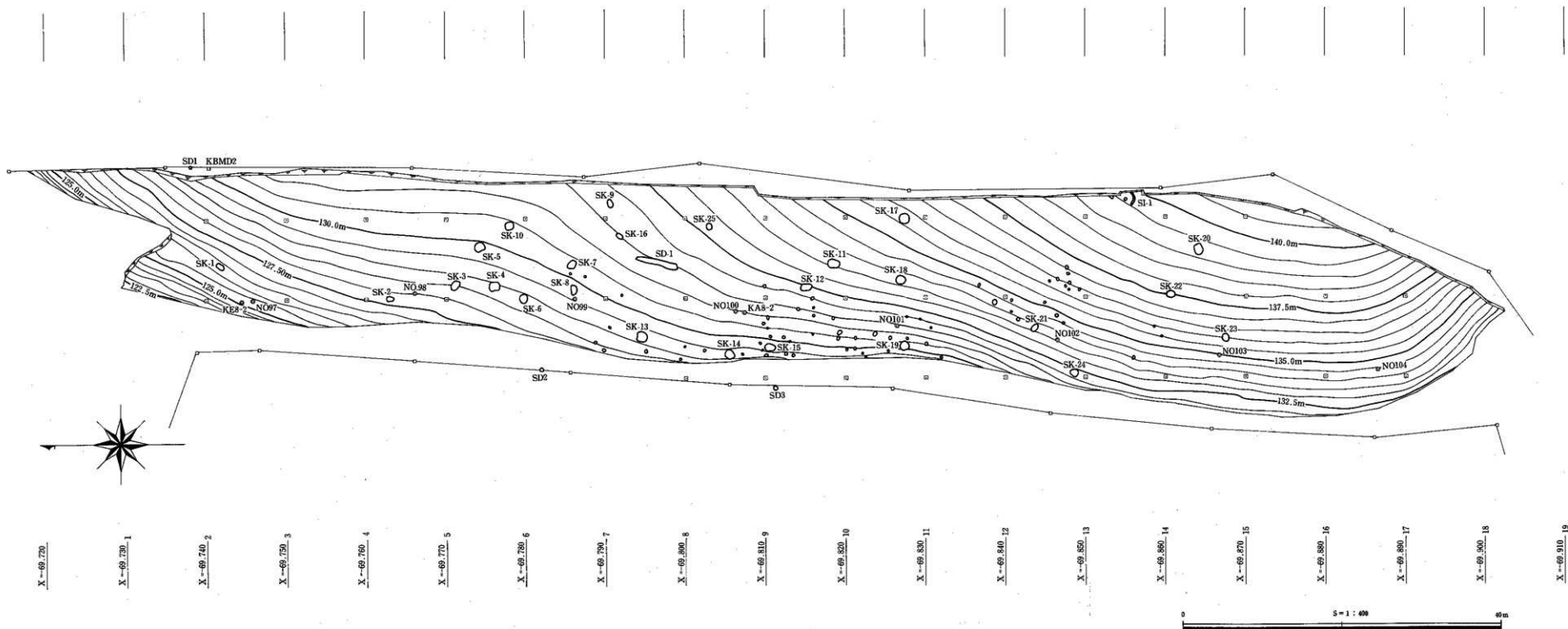


插图112 小町越田野原第2遺跡全体遺構実測図

2 縄文時代の遺構

落し穴

落し穴の遺構図において、赤色は杭痕跡、青色は石を表す。また、遺構の規模は実測図をもとに測った数値であり、斜面に立地する落し穴の深さは最深部の計測値を表記している。

S K-1 (挿図113・写真図版46)

位置 A 2 グリッドに位置し、標高126mの斜面地に立地する。

形態 平面形は検出面、底面とも歪んだ長方形を呈する。規模は検出面で、長軸100cm・短軸56cm、底面で長軸88cm・短軸52cm、深さ137cmを測る。

底面P 底面には、ほぼ中央に獲物殺傷用杭を立てるためのビット（以下、底面ビットと呼称する）を持ち、その規模は径16cm、深さ40cmを測る。

埋土 上層が黒灰褐色土系の土層、下層が暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-2 (挿図113)

位置 A～B 4 グリッドにかけて位置し、標高127.5mの斜面地に立地する。

形態 平面形は検出面、底面とも不定形である。規模は検出面で長軸90cm・短軸64cm、底面で長軸73cm・短軸62cm、深さ134cmを測る。

底面P 底面ビットを持ち、その規模は径14cm、深さ28cmを測る。ビットの縁で握りこぶし大の礫を一点検出した。これはビット内に獲物殺傷用の杭などを立てる際の固定材と考えたい。

埋土 暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。底面ビット内の埋土は黒灰褐色土である。

S K-3 (挿図114・写真図版47)

位置 A 5 グリッドに位置し、標高128mの斜面地に立地する。

形態 平面形は検出面で隅丸長方形、底面で楕円形を呈する。規模は検出面で長軸123cm・短軸90cm、底面で長軸106cm・短軸60cm、深さ89cmを測る。

底面壁際には、幅約3cm・深さ2cmの溝がめぐっているが、その用途は不明である。

底面P 底面ビットを持ち、その規模は径20cm、深さ60cmを測る。

埋土 上層が黒灰褐色土系の土層、下層が暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土の混合層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-4 (挿図114・写真図版47)

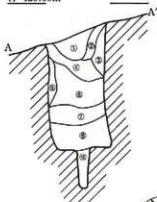
位置 A 5 グリッドに位置し、標高129mの斜面地に立地する。

形態 平面形は検出面、底面とも隅丸長方形を呈する。規模は検出面で、長軸129cm・短軸106cm、底面で長軸88cm・短軸66cm、深さ124cmを測る。

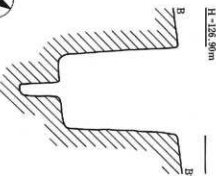
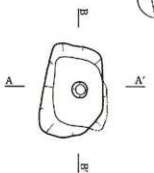
底面P 底面ビットを持ち、その規模は径30cm、深さ49cmを測る。

埋土 黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

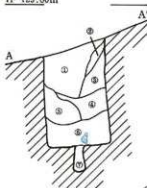
H-126.90m



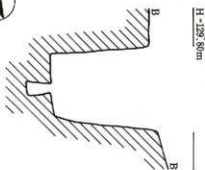
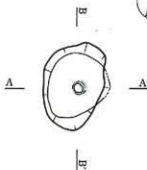
- ① 黒灰褐色土
- ② 黒灰褐色土 (暗茶灰褐色土混)
- ③ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土中ブロック混)
- ④ 暗茶灰褐色土
- ⑤ 黄橙茶褐色粘質土 (暗茶灰褐色土少量混)
- ⑥ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量混)
- ⑦ 黄橙茶褐色粘質土中ブロックと暗茶灰褐色土の混合
- ⑧ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色土少量混)
- ⑨ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色土少量混)



H-129.80m



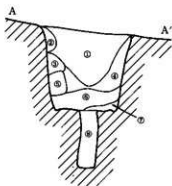
- ① 暗茶灰褐色土
- ② 暗茶灰褐色土 (黄茶褐色粘質土混)
- ③ 黄橙茶褐色粘質土 (暗茶灰褐色土少量混)
- ④ 暗茶灰褐色土
- ⑤ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土混)
- ⑥ 黄橙茶褐色粘質土 (暗茶灰褐色土少量混)
- ⑦ 黒灰褐色土



0 S=1:48 1m

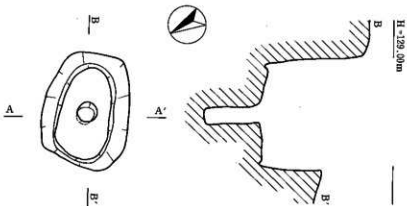
挿図113 SK-1・2遺構図

H=129.00m

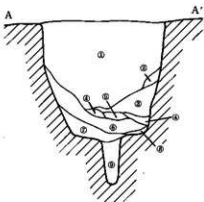


SK-3

- ① 黒灰褐色土
- ② 黄橙茶褐色粘質土ブロック (暗茶褐色土混)
- ③ 黄橙茶褐色粘質土中ブロックと暗茶灰褐色土の混合
- ④ 黄橙茶褐色粘質土中・小ブロックと暗茶灰褐色土の混合
- ⑤ 黄橙茶褐色粘質土
- ⑥ 黄橙茶褐色粘質土中・小ブロックと暗茶灰褐色土の混合 (前者比強)
- ⑦ 黄橙茶褐色粘質土 (暗茶灰褐色土微量混)
- ⑧ 黄橙茶褐色粘質土と暗茶灰褐色粘質土粒の混合

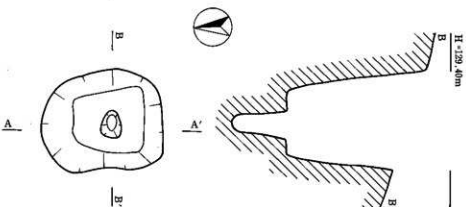


H=129.40m



SK-4

- ① 黒灰褐色土 (暗茶褐色土ブロック状に混・炭屑じり)
- ② 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量混)
- ③ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土微小ブロック少量混)
- ④ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック混)
- ⑤ 黄灰褐色粘質土ブロック
- ⑥ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土中・小ブロック混)
- ⑦ 黒灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土の混合
- ⑧ 黄橙茶褐色粘質土 (黒灰褐色土少量混)
- ⑨ 暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土小ブロックの混合



S=1:40 1m

挿図114 SK-3・4 遺構図

S K-5 (挿図115)

位置 A 5グリッドに位置し、標高130mの斜面地に立地する。

形態 平面形は検出面でほぼ円形、底面で方形を呈する。規模は検出面で長軸126cm・短軸110cm、底面で長軸84cm・短軸70cm、深さ126cmを測る。

底面P 底面ピットを持ち、その規模は径30cm、深さ56cmを測る。

埋土 暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-6 (挿図115)

位置 A~B 5グリッドにかけて位置し、標高128.5mの斜面地に立地する。

形態 平面形は検出面、底面とも円形を呈する。規模は検出面で長軸110cm・短軸106cm、底面で長軸66cm・短軸58cm、深さ142cmを測る。

底面P 底面ピットを持ち、その規模は径22cm、深さ33cmを測る。

埋土 暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-7 (挿図116・写真図版47)

位置 A 6グリッドに位置し、標高130mの緩やかな斜面地に立地する。

形態 平面形は検出面、底面ともに楕円形を呈する。規模は検出面で長軸114cm・短軸94cm、底面で長軸87cm・短軸63cm、深さ108cmを測る。

杭痕跡 底面には獲物殺傷用の杭を直接立てた痕と考えられる小ピット（以下杭痕跡と呼称する）が4つ存在する。各杭痕跡の規模は、径はすべて7cm、深さは東側から31cm・23cm・33cm・33cmである。

埋土 上層が黒灰褐色土系の土層、下層が暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-8 (挿図116・写真図版47)

位置 A 6グリッドに位置し、標高129.5mの緩やかな斜面地に立地する。

形態 平面形は検出面、底面ともに楕円形を呈する。規模は検出面で長軸125cm・短軸71cm、底面で長軸59cm・短軸40cm、深さ174cmを測る。

底面P 底面ピットを持ち、その規模は径11cm、深さ16cmを測る。

埋土 暗茶灰褐色土系の土層と黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-9 (挿図117)

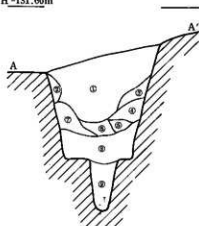
位置 A 7グリッドの1m東に位置し、標高132mの平坦面に立地する。

形態 平面形は検出面、底面ともに楕円形を呈する。規模は検出面で長軸134cm・短軸80cm、底面で長軸102cm・短軸52cm、深さ124cmを測る。

底面P 底面ピットを持ち、その規模は径16cm、深さ38cmを測る。

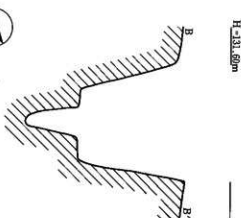
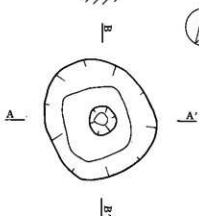
埋土 暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

H=131.60m

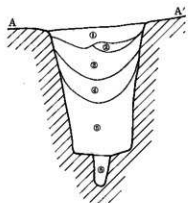


SK-5

- ① 暗茶灰褐色土
- ② 暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土の混合
- ③ 淡黄茶褐色土（黄橙茶褐色粘質土層小ブロック少量混）
- ④ 暗茶灰褐色土（黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量混）
- ⑤ 黄橙茶褐色粘質土
- ⑥ 暗茶灰褐色土（黄橙茶褐色粘質土中・小ブロック少量混）
- ⑦ 淡黄茶褐色土（黄橙茶褐色粘質土混）
- ⑧ 暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土中・小ブロックの混合
- ⑨ 暗茶灰褐色土（黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量混）

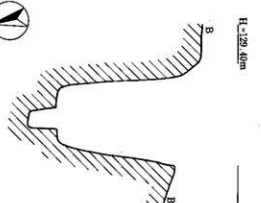
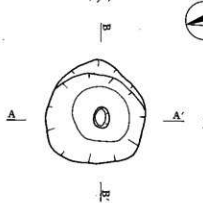


H=129.40m



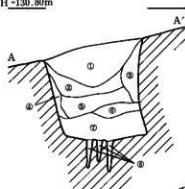
SK-6

- ① 暗茶灰褐色土（淡茶褐色土混）
- ② 暗茶灰褐色土（炭面じり）
- ③ 暗茶灰褐色土（黄橙茶褐色土少量混）
- ④ 暗茶灰褐色土（黄橙茶褐色粘質土小ブロック混）
- ⑤ 暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土の混合
- ⑥ 暗茶灰褐色土（黄橙茶褐色粘質土層小ブロック少量混）



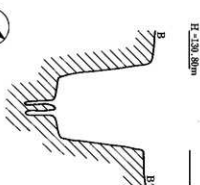
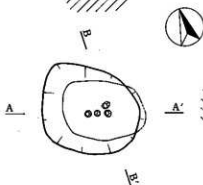
挿図115 SK-5・6遺構図

H-130.80m

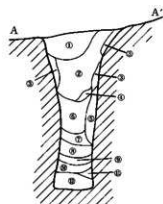


SK-7

- ① 暗茶灰褐色土
- ② 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色土層)
- ③ 黄橙茶褐色土 (暗茶褐色土少量)
- ④ 黄橙茶褐色粘質土 (暗茶褐色土少量)
- ⑤ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量)
- ⑥ 黄灰褐色粘質土ブロック
- ⑦ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック)
- ⑧ 黒灰褐色土

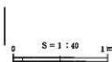
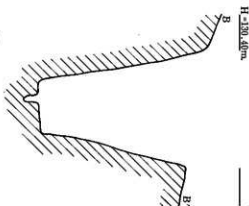
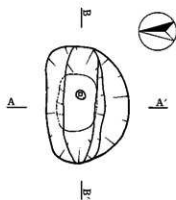


H-130.40m



SK-8

- ① 暗茶灰褐色土
- ② 黒灰褐色土 (暗茶灰褐色土少量)
- ③ 黄灰褐色粘質土 (暗茶灰褐色土少量)
- ④ 黄橙茶褐色粘質土ブロック
- ⑤ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土中・小ブロック)
- ⑥ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土中・小ブロック少量)
- ⑦ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土中・小ブロック)
- ⑧ 暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土中・小ブロックの組合
- ⑨ 黒灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土中・小ブロックの組合
- ⑩ 黒灰褐色土
- ⑪ 黒灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土中・小ブロックの組合 (粘性強)
- ⑫ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量混入)



挿図116 SK-7・8遺構図

SK-10 (挿図117)

- 位置 A 5グリッドに位置し、標高130.5mの平坦面に立地する。
- 形態 平面形は検出面、底面ともに隅丸長方形を呈する。規模は検出面で長軸120cm・短軸95cm、底面で長軸86cm・短軸43cm、深さ108cmを測る。
- 底面P 底面ピットを持ち、その規模は径25cm、深さ40cmを測る。
- 埋土 上層が暗黒茶灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

SK-11 (挿図118)

- 位置 A 9グリッドに位置し、標高133.5mの緩斜面に立地する。
- 形態 平面形は検出面で隅丸長方形、底面で長方形を呈する。規模は検出面で長軸152cm・短軸102cm、底面で長軸112cm・短軸57cm、深さ142cmを測る。
- 底面P 底面ピットを持ち、その規模は径22cm、深さ47cmを測る。
- 埋土 暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

SK-12 (挿図119・写真図版48)

- 位置 A 9グリッドに位置し、標高132mの斜面地に立地する。
- 形態 平面形は検出面で楕円形、底面で方形を呈する。規模は検出面で長軸142cm・短軸91cm、底面で長軸63cm・短軸49cm、深さ226cmを測る。
- 底面P 底面ピットを持ち、その規模は径14cm、深さ26cmを測る。
- 埋土 暗黒茶灰褐色土系の土層、暗茶灰褐色土系の土層、淡暗茶灰褐色土系の土層の3種からなり、自然堆積と考えられる。

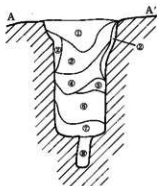
SK-13 (挿図118)

- 位置 B 7グリッドに位置し、標高129mの斜面地に立地する。
- 形態 平面形は検出面、底面ともに隅丸長方形を呈する。規模は検出面で長軸140cm・短軸118cm、底面で長軸116cm・短軸76cm、深さ136cmを測る。
- 底面P 底面ピットを持ち、その規模は径24cm、深さ42cmを測る。
- 埋土 上層が黒灰褐色土系の土層、下層が暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

SK-14 (挿図120)

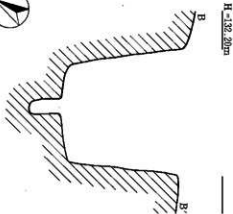
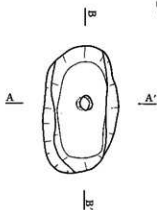
- 位置 B 8グリッドに位置し、標高129mの斜面地に立地する。
- 形態 平面形は検出面で楕円形、底面で長方形を呈する。規模は検出面で長軸130cm・短軸100cm、底面で長軸92cm・短軸55cm、深さ150cmを測る。
- 底面P 底面ピットを持ち、その規模は径26cm、深さ50cmを測る。
- 埋土 上層が黒灰褐色土系の土層、中層が暗茶灰褐色土系の土層、下層が黄褐色粘砂土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

H=132.20m

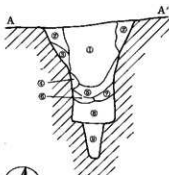


SK-9

- ① 暗茶灰褐色土と黒灰褐色土の混合
- ② 黄橙茶灰褐色粘質土
- ③ 暗茶灰褐色土
- ④ 暗茶灰褐色土と黒灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土小ブロックの混合
- ⑤ 暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土中ブロックの混合
- ⑥ 暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土中・小ブロックの混合
- ⑦ 黄橙茶褐色粘質土 (暗茶灰褐色土混)
- ⑧ 黄橙茶褐色粘質土と暗茶灰褐色土の混合

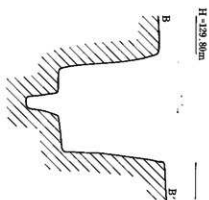
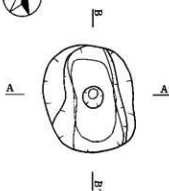


H=129.80m



SK-10

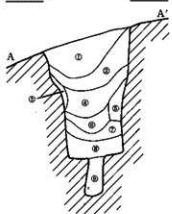
- ① 暗黒茶灰褐色土
- ② 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土微量混)
- ③ 黄橙茶褐色粘質土 (炭酸塩混)
- ④ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土大・小ブロック混)
- ⑤ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量混)
- ⑥ 黄橙茶褐色粘質土 (暗茶灰褐色土微量混)
- ⑦ 黄橙茶褐色粘質土
- ⑧ 黄橙茶褐色粘質土中・小ブロックと暗茶灰褐色土の混合
- ⑨ 暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土小ブロックの混合



0 S=1:40 1m

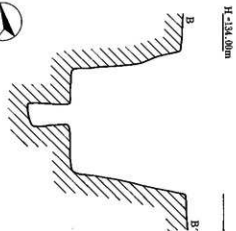
挿図117 SK-9・10遺構図

H=134.00m

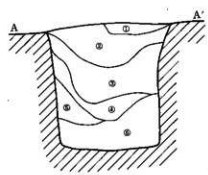


SK-11

- ① 暗茶灰褐色土 (黒灰褐色土層)
- ② 暗茶灰褐色土
- ③ 黄褐色粘質土
- ④ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土少量混)
- ⑤ 黄褐色粘質土 (暗茶褐色土少量混)
- ⑥ 淡暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土少量混)
- ⑦ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土少量混)
- ⑧ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土少量混)
- ⑨ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土少量混)

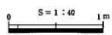
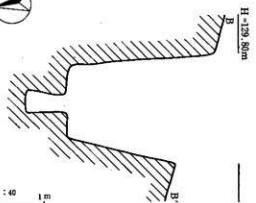
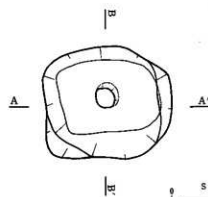


H=129.80m



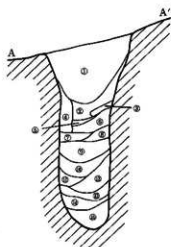
SK-13

- ① 暗茶灰褐色土 (黄灰褐色土少量混)
- ② 黄灰褐色土
- ③ 黄灰褐色土 (暗茶灰褐色土少量混)
- ④ 黄灰褐色土 (暗茶灰褐色土少量混・黄褐色粘質土少量混)
- ⑤ 黄灰褐色土 (黄褐色粘質土・中ブロック混)
- ⑥ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土・中ブロック少量混)



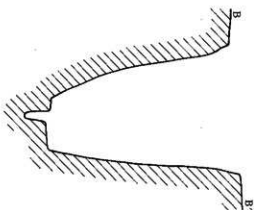
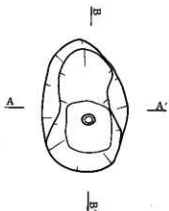
挿図118 SK-11・13遺構図

H-133.00m



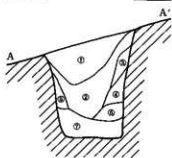
SK-12

- ① 暗黒茶灰褐色土
- ② 暗黒茶灰褐色土 (黄褐色粘質土微小ブロック微量混)
- ③ 黄褐色粘質土 (暗黒茶灰褐色土微量混)
- ④ 暗黒茶灰褐色土 (黄褐色粘質土中・小ブロック混)
- ⑤ 黄褐色粘質土・ブロック
- ⑥ 暗黒茶灰褐色土 (黄褐色粘質土中・小ブロック多量混)
- ⑦ 暗黒茶灰褐色土 (黄褐色粘質土微小ブロック微量混)
- ⑧ 暗黒茶灰褐色土 (黄褐色粘質土小ブロックの混合層)
- ⑨ 暗黒茶灰褐色土 (黄褐色粘質土小ブロック微量混)
- ⑩ 淡褐色粘質土 (黄褐色粘質土小ブロック微量混)
- ⑪ 淡褐色粘質土 (黄褐色粘質土・ブロック混)
- ⑫ 淡褐色粘質土 (黄褐色粘質土中ブロック・黄褐色粘質土小ブロック混)
- ⑬ 暗黒茶灰褐色土 (暗黒茶灰褐色土微量混)
- ⑭ 暗黒茶灰褐色土 (もろく黄褐色粘質土小ブロック含む)



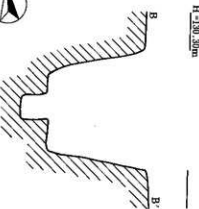
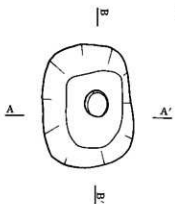
H-133.00m

H-130.30m



SK-15

- ① 黒灰褐色土
- ② 暗黒茶灰褐色土 (黄褐色粘質土中ブロック微量混)
- ③ 暗黒茶灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土少量混)
- ④ 暗黒茶灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土多量混)
- ⑤ 暗黒茶灰褐色土 (黄褐色粘質土微量混)
- ⑥ 黄褐色粘質土 (暗黒茶灰褐色土層状に混)
- ⑦ 暗黒茶灰褐色土 (黄褐色粘質土少量混)



H-130.30m

0 S = 1 : 40 1m

挿図119 SK-12・15遺構図

S K-15 (挿図119)

- 位置 B 9グリッドに位置し、標高129.5mの斜面地に立地する。
形態 平面形は検出面、底面ともに隅丸長方形を呈する。規模は検出面で長軸130cm・短軸94cm、底面で長軸86cm・短軸60cm、深さ126cmを測る。
底面P 底面ビットを持ち、その規模は径28cm、深さ28cmを測る。
埋土 上層が黒灰褐色土系の土層、下層が暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-16 (挿図120)

- 位置 A 7グリッドに位置し、標高132mの平坦面に立地する。
形態 平面形は検出面、底面ともに隅丸長方形を呈する。規模は検出面で長軸115cm・短軸70cm、底面で長軸72cm・短軸40cm、深さ174cmを測る。
底面P 存在しない。
埋土 上層が暗茶灰褐色土系の土層、下層が暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-17 (挿図121)

- 位置 A 10グリッドに位置し、標高135.5mの緩斜面に立地する。
形態 平面形は検出面で楕円形、底面で隅丸長方形を呈する。規模は検出面で長軸140cm・短軸125cm、底面で長軸90cm・短軸73cm、深さ138cmを測る。
底面P 底面ビットを持ち、その規模は径24cm、深さ45cmを測る。
埋土 暗茶灰褐色土と黒灰褐色土の混合層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-18 (挿図121・写真版48)

- 位置 A 10グリッドに位置し、標高133.5mの斜面地に立地する。
形態 平面形は検出面で楕円形、底面で隅丸長方形を呈する。規模は検出面で長軸120cm・短軸105cm、底面で長軸90cm・短軸73cm、深さ106cmを測る。
底面P 底面ビットを持ち、その規模は長軸28cm・短軸18cm、深さ46cmを測る。
埋土 上層が黒灰褐色土系の土層、下層が暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

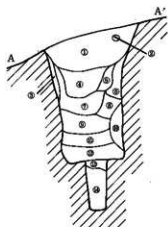
S K-19 (挿図122)

- 位置 B 10グリッドに位置し、標高130mの急斜面地に立地する。
形態 平面形は検出面、底面とも円形を呈する。規模は検出面で長軸110cm・短軸104cm、底面で長軸76cm・短軸72cm、深さ145cmを測る。
底面P 底面ビットを持ち、その規模は径25cm、深さ30cmを測る。
埋土 上層が淡暗茶灰褐色土、中層が黒灰褐色土、下層が暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-20 (挿図122)

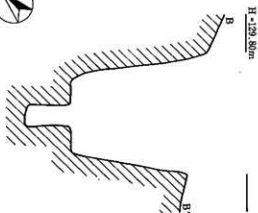
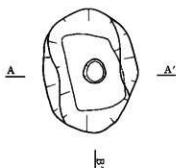
- 位置 A 14グリッドに位置し、標高139mの緩斜面に立地する。
形態 平面形は検出面、底面とも隅丸長方形を呈する。規模は検出面で長軸136cm・短軸108cm、底面で長軸64cm・短軸26cm、深さ156cmを測る。
底面P 底面ビットを持ち、その規模は径16cm、深さ24cmを測る。
埋土 上層が淡暗茶灰褐色土、下層が暗茶灰褐色土からなり、自然堆積と考えられる。

H=129.80m

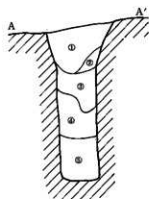


SK-14

- ① 黒灰褐色土
- ② 黄褐色粘質土ブロック
- ③ 黄褐色粘質土 (黒灰褐色土微量混)
- ④ 黒灰褐色土 (黄褐色粘質土微小ブロック微量混)
- ⑤ 暗茶灰褐色土 (黒灰褐色土少量混)
- ⑥ 黄褐色粘質土と暗茶灰褐色土の混合
- ⑦ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土微小ブロック少量混)
- ⑧ 暗茶灰褐色土と黄褐色粘質土の混合
- ⑨ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土中・小ブロック混)
- ⑩ 黄褐色粘質土
- ⑪ 黄褐色粘質土
- ⑫ 黄褐色粘質土
- ⑬ 暗茶灰褐色粘砂土 (黒灰褐色土少量混)



H=131.90m



SK-15

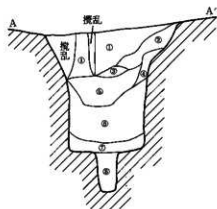
- ① 暗黒茶灰褐色土
- ② 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土混)
- ③ 暗茶灰褐色土
- ④ 黄褐色粘質土 (暗茶灰褐色粘質土微量混)
- ⑤ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土多量混)



0 5:1=40 1m

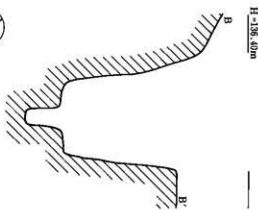
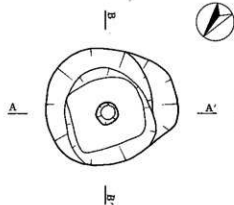
挿図120 SK-14・15遺構図

H=136.40m

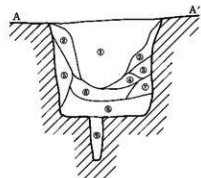


SK-17

- ① 暗茶灰褐色土 (黄灰褐色土層状に配)
- ② 暗茶灰褐色土 (黄灰褐色土少量層)
- ③ 黒灰褐色土
- ④ 暗茶灰褐色土 (黒灰褐色土・黄橙茶褐色粘質土小ブロック散層)
- ⑤ 暗茶灰褐色土 (黒灰褐色土層状に配)
- ⑥ 暗茶灰褐色土と黒灰褐色土・黄橙茶褐色粘質土小ブロックの混合層
- ⑦ 暗茶灰褐色土と黒灰褐色土・黄橙茶褐色粘質土小ブロックの混合層 (灰多量混)
- ⑧ 暗茶灰褐色土と黒灰褐色土・黄橙茶褐色粘質土小ブロックの混合

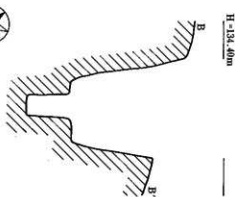
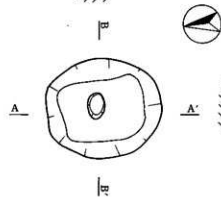


H=134.40m



SK-18

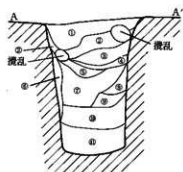
- ① 黒灰褐色土 (暗茶灰褐色土層状に混)
- ② 暗茶灰褐色土 (黒灰褐色土少量混)
- ③ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土中ブロック少量混)
- ④ 黒灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土ブロックの混合層
- ⑤ 黄橙茶褐色粘質土 (暗茶灰褐色土少量混)
- ⑥ 黒灰褐色土・黄橙茶褐色粘質土中・小ブロックの混合層
- ⑦ 暗茶灰褐色土と黄灰褐色粘質土大ブロックの混合層
- ⑧ 暗茶灰褐色土と黄灰褐色粘質土中・小ブロックの混合層 (灰多量混)
- ⑨ 暗茶灰褐色土と黄灰褐色粘質土中・小ブロックの混合層



S=1:40 1m

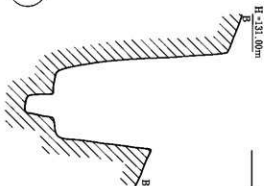
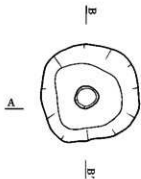
挿図121 SK-17・18遺構図

H-131.00m

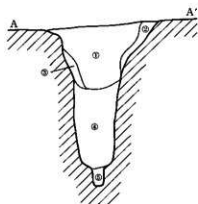


SK-19

- ① 淡褐色灰褐色土
- ② 黒灰褐色土
- ③ 暗茶灰褐色土 (黄褐色土混)
- ④ 黒灰褐色土と暗茶灰褐色土の混合
- ⑤ 黄褐色粘質土 (暗茶褐色土混)
- ⑥ 黄褐色粘質土
- ⑦ 暗茶灰褐色土 (黄褐色土少量混)
- ⑧ 暗茶灰褐色土
- ⑨ 暗茶灰褐色土と黄褐色粘質土の混合
- ⑩ 暗茶灰褐色土 (黄褐色土混・・・粘性強)
- ⑪ 暗茶灰褐色土 (黄褐色土混・・・灰多量混)

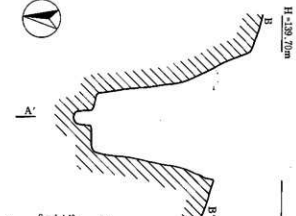
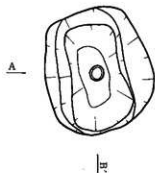


H-139.70m



SK-20

- ① 淡褐色灰褐色土 (黒灰褐色土小ブロック少量混)
- ② 黄褐色粘質土 (淡褐色土少量混)
- ③ 黄褐色粘質土 (淡褐色土多量混)
- ④ 暗茶灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土混)
- ⑤ 暗茶灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土少量混)



0 S = 1 : 40 1 m

挿図122 SK-19・20遺構図

S K-21 (挿図123)

- 位置 B12グリッドに位置し、標高134mの斜面地に立地する。
- 形態 平面形は検出面で隅丸長方形、底面で長方形を呈する。規模は検出面で長軸98cm・短軸68cm、底面で長軸104cm・短軸48cm、深さ110cmを測る。
- 底面P 底面ビットを持ち、その規模は径25cm、深さ38cmを測る。
- 埋土 上層が黒灰褐色土系の土層、下層が暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土の混合層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-22 (挿図123)

- 位置 A14グリッドに位置し、標高137.5mの斜面地に立地する。
- 形態 平面形は検出面、底面とも楕円形を呈する。規模は検出面で長軸110cm・短軸85cm、底面で長軸106cm・短軸60cm、深さ126cmを測る。
- 底面P 底面ビットを持ち、その規模は径20cm、深さ41cmを測る。
- 埋土 上層が黒灰褐色土系の土層、下層が暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-23 (挿図124)

- 位置 B14グリッドに位置し、標高136mの急斜面地に立地する。
- 形態 平面形は検出面で不定形、底面で長方形を呈する。規模は検出面で長軸102cm・短軸90cm、底面で長軸116cm・短軸70cm、深さ116cmを測る。
- 底面P 底面ビットを持ち、その規模は径20cm、深さ40cmを測る。
- 埋土 上層は黒灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

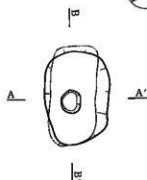
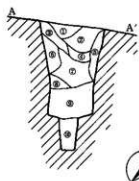
S K-24 (挿図124)

- 位置 B12グリッドに位置し、標高132mの斜面地に立地する。
- 形態 平面形は検出面で楕円形、底面で円形を呈する。規模は、検出面で長軸110cm・短軸92cm、底面で長軸68cm・短軸55cm、深さ121cmを測る。
- 底面P 底面ビットを持ち、その規模は径20cm、深さ18cmを測る。
- 埋土 暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

S K-25 (挿図125)

- 位置 A 8グリッドに位置し、標高133mの緩斜面に立地する。
- 形態 平面形は検出面、底面とも楕円形を呈する。規模は検出面で長軸85cm・短軸80cm、底面で長軸81cm・短軸55cm、深さ112cmを測る。
- 底面P 底面ビットを持ち、その規模は径25cm、深さ54cmを測る。底面ビット内では、握りこぶし大の礫が10個検出された。これは獲物殺傷用の杭を立てる際の固定補助材と考えられる。
- 埋土 暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

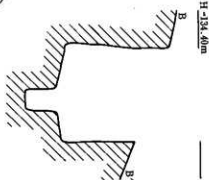
H-134.40m



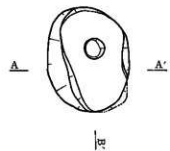
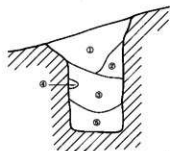
SK-21

- ① 暗茶灰褐色土 (黒灰褐色土類)
- ② 黒灰褐色土
- ③ 暗茶灰褐色土 (黒灰褐色土・黄灰褐色粘質土大ブロック混)
- ④ 黒灰褐色土 (黄灰褐色粘質土小ブロック少量混)
- ⑤ 黄橙茶褐色粘砂土 (暗茶灰褐色土斑状に混)
- ⑥ 黄橙茶褐色粘質土 (暗茶灰褐色土少量混)
- ⑦ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量混)
- ⑧ 黄橙茶褐色粘質土 (暗茶灰褐色土斑状に混)
- ⑨ 黄橙茶褐色粘質土ブロックと暗茶灰褐色土の混
- ⑩ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック混)

H-134.40m



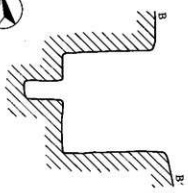
H-138.00m



SK-22

- ① 黒灰褐色土 (暗茶灰褐色土斑状に混)
- ② 黄橙茶褐色粘質土 (黒灰褐色土少量混)
- ③ 暗茶灰褐色土 (黒灰褐色土・灰少量混)
- ④ 黄橙茶褐色粘質土ブロックと黒灰褐色土の混
- ⑤ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック・灰少量混)
- ⑥ 暗茶灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量混)

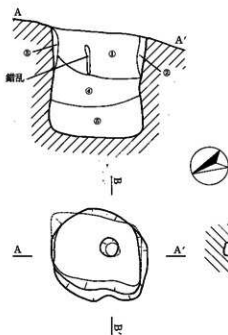
H-138.00m



S = 1 : 40 1m

挿図123 SK-21・22遺構図

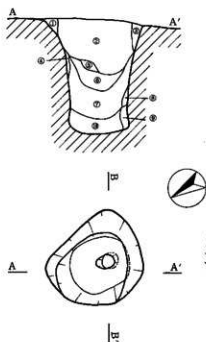
H-136.60m



SK-23

- ① 黒灰褐色土 (暗茶灰褐色土層状に掘)
- ② 黄褐色粘質土と暗茶灰褐色土の混合層
- ③ 黄褐色粘質土 (暗茶灰褐色土少量混)
- ④ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土小ブロック混)
- ⑤ 黒灰褐色土 (黄褐色粘質土中・小ブロック少量混)

H-132.80m



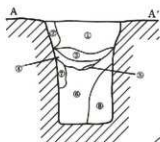
SK-24

- ① 黒灰褐色土
- ② 暗茶灰褐色土 (黒灰褐色土)
- ③ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土小ブロック少量混)
- ④ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土中ブロック少量混)
- ⑤ 黄褐色粘質土ブロック
- ⑥ 黒灰褐色土 (暗茶灰褐色土混)
- ⑦ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土混)
- ⑧ 黄褐色粘質土
- ⑨ 赤褐色粘質土
- ⑩ 暗茶灰褐色土 (黄褐色粘質土・赤褐色粘質土少量混)

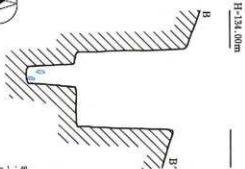
S = 1 : 40 1m

挿図124 SK-23・24遺構図

H-134.00m



- ① 暗赤灰褐色土 (灰暗赤灰褐色土ブロック混)
- ② 黄暗赤灰褐色土
- ③ 黄暗赤褐色粘質土
- ④ 暗赤灰褐色土 (黒褐色土土小ブロック混)
- ⑤ 黄暗赤褐色粘質土ブロック
- ⑥ 暗赤褐色土 (黒褐色土土小ブロック混)
- ⑦ 黄暗赤褐色粘質土
- ⑧ 黄暗赤褐色粘質土 (黒褐色土土小ブロック混)



H-134.00m

S = 1 : 40 1 m

挿図125 S K-25遺構図

3 弥生時代の遺構

竪穴住居跡

S I - 1 (挿図126、127・写真図版50)

位置 A13グリッドから約1m東側へ向かう標高139.5~140mの平坦地に立地する。調査区外へとおよんでいるために全体像は不明である。

形態 遺存状態が悪く、かつ調査区外へおよんでいるため正確な規模は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。残存する規模は、南北0.7m、東西1.8m、壁高は0.18mを測る。住居跡の西角から北へ約1m離れた地点で径60cm前後の広がりをもつ焼土面を検出した。焼土下には、長軸50cm・短軸40cm、深さ20cmのP1が存在する。

側溝は検出できなかった。なお、住居南壁より北に2.5mのところに幅30cm、深さ20cmの溝が存在するが、この住居に伴うものかどうかは不明である。

埋土 埋土は主に黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。P1内の埋土は、焼土と橙茶褐色粘質土・黒灰褐色土の混合層である。

遺物 P1及び焼土面の北側から弥生土器の鉢(Po1)、甕口縁(Po2)を検出した。Po1は安定性のある平底を持ち、胴部と口縁部の間に段を有する。外面底部から胴部にかけてはヘラケズリ、口縁部は横ナデの手法が見られ、内面にはわずかに刷毛目調整のあとが残る。Po2は甕の複合口縁部分で、外面に多数の平行沈線が見られる。外面頸部には刺突文がめぐらされている。

遺物を検出した付近には木の根が深く入りこんでいたため、多少の浮き沈みがあったことも考えられるが、ほぼ床面直上からの出土と判断し、遺構の時期決定資料とした。

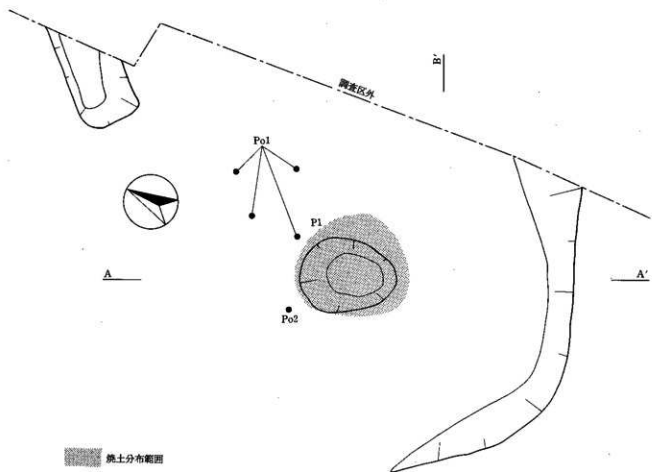
時期 出土遺物より、弥生時代後期と考えられる。

今回の調査では住居1棟のみの検出に留まり、しかもその住居が調査区外との境界に位置したため、全体像がつかめなかった。しかし、調査区外は平坦な地形となっており、S I - 1の他にも竪穴住居跡が存在する可能性がある。

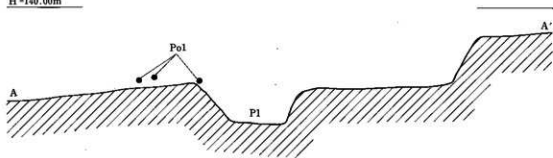
時代はやや遡るが、隣接する小町越城野原第1遺跡(本書第6章参照)では弥生時代中期のテラス状遺構が検出されており、弥生時代の当該地域に集落が営まれていた可能性を裏付けている。



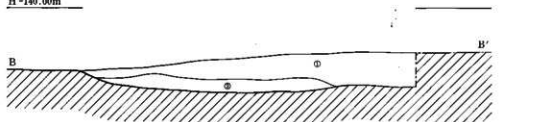
挿図126 S I - 1出土遺物実測図



H - 140.00m



H - 140.00m



- ① 黑灰褐色土
 ② 橙赤褐色粘質土 (黑灰褐色土混)

0 S = 1 : 20 1m

插圖127 S I - 1 遺構圖

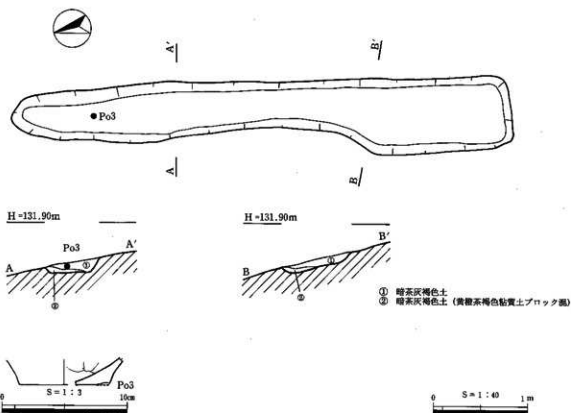
4 時期不明の遺構

S D-1 (押図128・写真図版49)

- 位置** A7グリッドに存在し、標高131mの緩やかな斜面に立地する。
- 形態** ほぼ南北方向に向かったのび、検出面で長さ5.2m(南北方向)・最大幅0.8m(東西方向)、底面で長さ5.0m、最大幅0.6m、深さ0.1mを測る。
- 埋土** 暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 遺物** 溝の南側部分で土器底部片(Po3)を検出したが、埋土上層付近での出土であり、遺構の時代・性格等を決定付ける資料とは言い難い。
- 性格** 不明である。

ピット群 (押図112・写真図版51)

- 位置** 遺跡のほぼ中央部分、B7~13グリッド付近にかけて存在し、総計82基よりなる。とりわけB9・B12グリッド付近にはピットが集中している。調査区東側の平坦地よりも西側の急斜面に多く分布する。
- 埋土** ほぼ黒褐色土の単層である。
- 遺物** 出土していない。
- 性格** ピットの配置や規模等を比較・検討したが、掘立柱建物跡と考えられるような同一規模のピットの並びは見られなかった。また、落し穴へ獣を追いながら誘い込むための罠列の可能性も検討したが、落し穴へとe向かう一定の方向性は見られなかった。よって、性格は不明である。



押図128 S D-1遺構図・出土遺物実測図